善ク政ヲ爲スト云ベカラズ、而ノ、其術、賞罰ノ二柄ニアリ、賞典ハ姑ク措テ論セズ、罰ヲ以テ是ヲ論ゼン、方今、諸士中、隱居ノ者、或ハ禁足シ、或ハ遠嶋シ、或ハ拘幽スル者、意フニ幾百ヲ以テ數フヘシ、余此輩ヲ視ルニ、法度外ニ自暴自棄スル者、十常ニ八九ニ及ブ、其自ラ淬勵スル者ノ如キハ、實ニ十中ニ一二ヲ得ルモ亦難シトス、余ガ福堂策ヲ作ル、其如レ是ヲ憂ルナリ、而シテ、更ニ一処置ヲ思フコアリ、近時、洋賊陸梁、勢、將ニ事ヲ生ゼントス、此時ニ當テ、勇毅敢死ノ士、最モ国ニ用アリトス、今新ニ一令ヲ下シ云ク、凡ソ隱居ノ輩、敢テ自ラ暴ヒ自ラ棄ルコナカレ、一旦事アル、用ヒテ先鋒ニ當ツベシ、果シテ能ク功ヲ立テナバ、旧秩祿ニ復スベシト、若シ然ラバ、幾百人敢死ノ士、立處ニ得ベシ、亦是國家ノ一便計ト云ベシ、余、常ニ近世士道ノ衰頽ヲ嘆ズ、囚ト爲ツテ以來、益ミ罪人ト居リ、又、在嶋人ノ情態ヲ聽クニ、大抵、自暴自棄シテ、放縱自ラ處リ、士道都テ忘ル、ニ至ル、然レドモ、人斯性ナキハナシ、斯ノ性アレバ、斯ノ情アリ、斯性情アリテ、而モ且自棄スル、豈其甘ズル所ナランヤ、誠ニ委靡壞敗、自ラ奮フ能ハザルニ坐スルナリ、然ル、人必謂ン、彼輩罪アリ、故ニ廢ス、何ゾ又更ニ起シ用ユルニ堪ンヤト、余窃ニ以テ然ラズトナス、夫ハ罪ハ事ニアリ人ニ在ラズ、一事ノ罪、何ゾ遽カニ全人ノ用ヲ廢スルコヲ得ンヤ、況ヤ、其ノ罪已ニ悔ル、固ヨリ全人ニ復スルコヲ得ルヲヤ、罪ハナホ疾ノ如キカ、目ニ盲スル者、固ヨリ耳鼻ニ害ナシ、頭ニ瘡アル者、固ヨリ手足ニ害ナシ、一處ノ疾、何ゾ全身ノ用ヲ廢スルニ足ンヤ、其一處ニ疾テ全身從テ廢スル者ハ、心疾是ノミ、而シテ、心疾豈人々ニアランヤ、酒ニ酗シ、色ニ耽リ、貨ヲ貪リ、力ヲ恃ム、世ノ所謂大罪ナリ、而ノ、余ハ則謂ラク一事ノ罪ニシテ未ダ其全人ノ用ヲ廢スルニ足ラズト、又、是ヲ禽獸草木ノ人ニ於ルニ譬フ、牛馬言語セズト雖、載スベシ、耕スベシ、草木行走セズト雖モ、棟梁トスベシ、屋席トスベシ、今ヤ、人一罪アリト雖モ、何ゾ遽ニ禽獸草木ニ劣ランヤ、要、是レヲ用ユル如何ニアルノミ、有罪ノ人、固ヨリ平時ニ用ユベカラズト雖モ、是ヲ兵戰ノ場ニ用ル時ハ、其用ヲ得ルト云ベシ、漢時、七科ノ謫ヲ発シテ兵トス、其意、蓋亦斯ノ如シ、是レ余ガ人ヲ鼓舞作興スルノ一處置ニシテ福堂策ニ附錄スル所以ナリ、

余已作二此論一、語二諸同囚一、或曰、已矣、人必謂子自爲レ計也、余曰、計レ之便二于国一者、吾何避レ嫌不レ言、非二吾言一レ之、則誰敢及レ焉、且使二吾自爲レ計、何苦忘レ身犯レ法自取二困厥一哉、或不レ能レ答、因書、

乙卯秋九月仲一日

野山獄囚奴寅誌

（萩市松陰神社藏　校合濟㊞）

儲糗話

儲蓄ノ國政ニ要ナルヿハ、礼記、其外経史子集ノ論ズル所尽セリ、今更迂生ノ舌ヲ搖スニ及バヌヿナリ、扨、其ノ制、脱粟米ニテハ蠹腐シ易キガ故ニ、粟ト糗トヲ用ユルヿ、古今ノ通論ナリ、粟ハ即チ粃ニテ、書経ニ、散二鉅橋之粟一、孟子ニ移二粟於河内一、トアリ、又漢ノ汲黯傳ニ、河内傷二水旱一、黯持レ節発二倉粟一以賑レ貧、トアル類、皆是ナリ、是、凶荒ノ儲トナシタルナリ、聞ク本邦ノ屯倉、多クハ粃ヲ用ラル、由、最然ルベキコト也、然ルニ、未ダ糗ヲ用ルコトヲ聞カズ、古今ノ通論スル処ナレバ、是亦試タキヿナリ、固ヨリ、古ヘ糗ヲ用ルヿハ、軍備ノ儲ニテ、詩経ニ、乃積乃倉、乃裹二餱糧一、ト云ヒ、書経ニ、峙二乃糗糒一、無二敢不一逮、ト云フ、孟子ニ、師行而糧食、トアルヲ、朱註ニ、糧謂二糗糒之屬一、トアリ、又国史ヲ按ズルニ、坂東諸國ニ、糗糒ヲ儲置テ、奥羽ノ軍所ニ運輸セラレタルヿ、数多ミヘタリ、中ニモ、続日本紀光仁天皇ノ、宝亀十一年五月、勅二坂東諸國及能登越中越後一、令レ備二糒二萬斛一、炊曝有レ数、勿レ致二損失一、トアリ、其年ノ七月、勅割二下總糒六千斛、常陸糒一萬斛一、運二輸陸奥多賀城一、トアル類、糗糒ヲ以テ軍儲トスルヿ、和漢古来、其證枚擧ニ遑アラズ、又和漢兵家者流ノ論ズル所、頗ル詳悉ナリ、右ノ如ク、凶荒ノ儲ニ粟ヲ用ヒ、軍備ノ儲ニ糗ヲ用ユルヿ、古今風俗ノ異同モアルベケレバ、強チ概論シ難ケレモ、當今ノ事情ヲ以テ、窃カニ其由ヲ思フニ、粟ヲ以テ糗トナスヿハ、舂檢簸蹂ヨリ炊曝ニ至ル迄、大ニ人力ヲ費スヿ故、儲蓄ニハ粟ヲ便トス、且、凶荒ノ時ニ至テハ、必ズ貧民ノ業ナキニ苦ムモノ有ベケレバ、是ヲ雇ヒ、舂簸セシメ、相當ノ雇錢ヲ與フル時ハ、亦賑民ノ一助モ

ナルベシ、然レバ、凶荒ノ儲ハ粟ヲ便トス、

漢土三代ノ時ハ、士農工賈ノ四民ノミニテ、殊ニ民政ヲ重ジ、井田等ノ良法アレバ、遊手浮食ノ者ナカリシ由、然ル𪜈、是レ亦其大概ヲ言ノミニテ、孟子礼記等ニモ、鰥寡孤独ノ説アリ、又詩經ニ、彼有ニ不レ穫穉一、此有ニ不レ斂穧一、役有ニ遺秉一、此有ニ滯穗一、伊寡婦之利、トアル類ニテモ、三代ノ時スラ業ナキ貧民アルコトニミユ、況ヤ、後世井田ノ法行ハレザレバ、豐年ノ時ハ目ニ立ザレ𪜈、凶荒ニ至テハ、業ナクシテ苦ムモノ甚多キヨシ、故ニ凶荒ノ時ニ土功ヲ起シテ、貧民ヲ雇スルヿ、古ヘヨリ、荒政ノ一法ニ備ヘタリ、本藩去年ノ浚河、即是レナリ、是等ノ事、牧民ノ責アル者、兼テ考置ベキヿナリ、

重儲ハ是ニ異ナリ、羽檄奔走ノ時ハ、民其役ニ驅逐セラレ、復タ農事ニ暇アラズ、良田美地モ、変ジテ茫々タル草野トナルヿ、古今ノ通患ナレバ、成ベキ丈ハ、民力ヲ費サヾル工夫、第一ノ事ナリ、只今ノ勢変ニ臨デハ、取中間ヤ、小荷駄ヤ、人夫等、百姓ヲ役スル廉々甚多カルベケレバ、籾ヲ舂簸サスベキ民ハ一人モナク、サレバトテ、顆籾ハ糧食ニモナルマジ、且、軍事ハ急速ナルモノニテ、殊ニ西洋船ナドハ、一瞬息ノ間ニ、幾数程ノ海上ヲ駛來ル者ナレバ、之ニ備ルモノ、最モ預メセズンバアルベカラズ、又何ゾ事ニ臨デ粟ヲ舂簸スルニ暇アランヤ、然レバ、軍備ノ儲ハ、糗ヲ便トス、

山鹿素水翁ノ云ク、往年長崎ニ夷警ノアリシ時、筑前ニテハ、急出張ト云ニ、兵糧ヲ取急ギ、民間ノ婦人小兒ヲ役シ、米ヲ舂セシメ、長崎ニ運輓ス、急ノ事ナレバ、米ニ水ヲ入レテ舂キタリシガ、頃ハ盛夏ノ炎蒸ニテ、米皆陳腐シ、又蟲ヲ生ゼシヨシ、故ニ、古ヨリ軍食ハ、脫粟米ヲ用ヒテ、精米ヲ用ヒザルモ理ナリト、素水ノ説、亦事ニ臨デ舂簸スルニ暇ナキヲ證スルニ足ル、

然レ𪜈、余ガ糗ヲ試タキト云モノハ、特ニ軍備ノ儲ノミニ非ズ、亦以テ凶荒ノ儲トナサント欲スルナリ、蓋シ糗ヲ儲フルハ、粟ヲ儲フルヨリ便ナルモノアレバナリ、余嘗テ江戸ニアリシ時、山鹿素水翁ノ所ニテ、武教全書中、兵糧鹽噌置作法ト云フ條ヲ講ズルニ因テ、儲蓄ノ論ニ及ビシニ、翁云ク、脫粟米ハ粟ニ如ズ、粟ハ糗ニ如ズ、粟固ヨリ久シキニ堪ユ、而シテ糗ノ寒中ニ精製シタルモノ、尤モ能ク久シキニ堪ユ、且、其倉廩ノ如キモ、粟ヲ儲フルモノ、半ニテ足レリ、

粟一石ヲ米トナス時ハ、四斗トナル、是ヲ四ツ成リト云、本藩ノ如キ是ナリ、米五斗トナル、是ヲ半磨ト云、關東多ク然リ、小異同ハアルベケレ𪜈、大抵、糗廩ハ、粟倉ノ半ニテ足レリトス、

余嘗テ鎭西ニ遊ビシ時、豐後岡藩ノ制ヲ聞クニ、毎年朔旦、諸士ヨリ、人別糗一升宛ヲ官廩ニ納ムルヲ、古ヨリノ制トス、故ニ、今ニ至テハ、儲蓄極テ夥シ、又ソレトハ別日ノ論ナレ𪜈、事ノ因ミニ語ルベキカ、吾藩ノ先公、

素水本津輕藩人ナリ

家祖素行師ヲ尊信セラレ、師ノ言ニ從テ國政ヲ更張セラレシヿ多カリシ中ニ、君公ノ御挾箱中ニ、常ニ糗糒ヲ入置カルヽヿ初リタリ、シカレ𪜈、治世ノ事ナレバ、用ナクシテ、年ヲ経タリジニ、其後、某公ノ時ニ當テ、封内ヲ巡遊セラレシ時、俄ニ大雨ニテ、橋落テ川留リケルニ、勿論小村僻邑ナレバ、然ルベキ旅宿迚モナク、君公初メ、野陣同様

ニテ、御供ノ面々、民家ニ過リ、麥飯ナリヒトゼフニ、夫モ頓テ尽ケレバ、君公命ジテ糗糒ヲ取リ出サセ、飢ヲ凌ガセラレ、且、師ノ遠見、数世ノ後ニ至テ驗アリト、大ニ感称アリシガ、是等モ武門ノ人ハ、心得アルベキコト、翁ノ話ナリ、時ニ、肥後藩士宮部某ナルモノ座ニアリ、云ク、吾藩、近年、清正公ノ圍ヒ置レタル糗糒ヲ取出シ試ムルニ、少モ損セザル故、儲蓄ハ糗ニ如カズト兼テ論ジ居タルガ、先生ノ論ト默契セリ、弊藩近年ノ製ハ、梔子ノ汁ニテ米ヲ釋シ、同ジク梔子ノ汁ニテ湯ヲ沸シテ、是レヲ蒸スコヲ初メタリト語リタリ、又、余ガ友南部ノ江幡某、其ノ隣藩秋田ノ事ヲ語タリシガ、天保癸巳、甲午、奥羽大凶歉ノ時、諸藩多ク人ヲ餓死セシメタリ、獨リ秋田ノ君公、仁明ニテ、祖先從來ノ宝物タル、古書畫、茶器類、数ヲ盡シテ大坂ヘ典當シ、金ヲ貸リ米ヲ買ヒ、民ヲ賑セシ故、一人ノ餓莩ナシ、

此時、越後新潟ノ賈人、久保田(秋田)ヘ商ニ行居タルヘ命ジテ、新潟ヨリ米ヲ買入シム、遂ニ、其功ヲ以テ祿ヲ與テ士トナス、後、其人秋田ノ祿ヲ辞シ新潟ノ官員トナル、堤十左衛門ト云フ、余其ノ人ト新潟ニテ交ル、又、久保田ノ商人敦賀屋新六ナルモノハ、堤ガ友ニテ、余秋田ニ至リ、其ノ人ヲ訪フ、二人ノ言ニ因リテ、益々其詳ヲ得タリ、

或ハ、其祖先ノ宝物ヲ軽ンズルヲ議スル者アレバ、公云ク、封内ノ士民、独リ祖先ノ宝物ナラズヤ、且、祖先ノ心士民ト書画茶器ト孰カ重ゼラルベキ、書畫茶器ヲ全フシテ士民ヲ傷ランコハ、吾ガ忍ビザル所ナリ、況ヤ典當スル者ハ復タ償還スベキヲヤト、對ヘラレタリトナリ、余既ニ此談ヲ聞キ、謂ラク、此公、必凶荒ノ好處置アルベシト思ヒ、秋田ニ遊シ時、首トシテ其事ヲ尋ネシニ、其疆ニ入レバ、処々ニ社倉アリ、其制農家ヨリ、七十歳以上七歳以下ヲ除キ、口別、米ナレバ一升、粟ナレバ三升宛出シ、米ハ糗トシテ蓄フトナリ、

人別出シ様甚ダ多キ様ナレヒ、秋田ハ、誰モ知タル通リ、米國故、平年ハ、農家モ粒米狼戾ニテ、甚豐饒ナルコニテ、且、其ノ價値モ甚廉ナリ、余ガ遊ビシハ、今年二月ノ頃ナルガ、精米一升六十文位ナレヒ、甚シキ騰貴ナリト云シナリ、然レバ、此ノ例ヲ他用ニ推サバ、甚タ民害ヲナスベシ、凡ソ儲蓄ハ、民ヲ利スル所以ナルニ、其宜シキヲ失フ時ハ、更ニ民ヲ害スルニ至ル、知レタルコナレヒ、念ノ爲ニ記ス、

余、越後ノ方ヨリ海濱ヲ通リ、久保田ヲ過ギ、津輕ノ碇関ヘ入リタルニ、其間三ケ所程見タリシガ、倉ノ大サハ慥ニ覚ザレヒ、皆七棟宛アリ、然シテ、今ハ皆充滿シタル故、民ヨリ納ムルコハ已ミタリ、唯年々曝ス時、民ヲ役スルノミナリ、是レ、果シテ彼公ノ意匠ニ出タルナラント感ジタリ、右等ノ数事ニ因テ、軍備ノ儲ノミナラズ、凶荒ノ儲ニモ、糗ヲ試タク欲スルナリ、況ヤ、當今海冦防禦ノ爲ノ御儲アルベケレバ、是等ハ、尤モ糗ニテ置キタキコナリ、前ニ云如ク、粟ヲ糗トナスニハ、大ニ人力ヲ費スコナレバ、否ノ論モアルベケレドモ、玆ニ策アリ、當今、士農工商寺社共ニ節季ノ餅舂セザルハナシ、此序ニ、士農工商出家社家何ニヨラズ、御國中ニ在合フモノハ、皆儀式トナシ、其分限相當ノ糗ヲ作リ、官倉ヘ納メサセタキコナリ、些ト滑稽ニ類シタレヒ、諸郡ハ、村毎ノ總鎮守社ノ中ニ、倉廩ヲ立テ、餅舂ノ時ニ乘ジ、初穂ヲトリ曝シ、春祭ノ時、必鎮守社ニ詣テ、意ヲ精シクシテ之ヲ献ゼシメ、祭後、役人共立合ヒ、倉廩ヲ封ジ、社人ニ命ジテ是ヲ守ラシメ、又秋陽ニテ曝ス時モ、役人立合ヒテ、並ニ奸曲ヲ詰リ、扨発ヒ廩賑レ民時ハ、神意ヲ伺ヒテ後、是ヲ行ハヾ、民ヲシテ神ヲ敬セシムル一端トナルベシ、民ヲシテ神ヲ敬セシムルハ、

迂ニ似テ甚ダ關係アルヿナリ、其詳ハ、此書ノ及ス所ニアラズ、抑ミ儲蓄ハ、本、民ヲ利スル所以ナリ、然ルヲ、強テ納サセントスレバ、却テ民ノ害トナルヿモアルベシ、凡ソ民ヲ富厚スルハ、政ノ本ナリ、民ヲ賑恤スルハ、政ノ末ナリ、本ヲ以テ末ヲ制スルハ善政ナリ、末ヲ以テ本ヲ傷フハ弊政ナリ、何ヲカ本ヲ傷フト云フ、譬バ、玆ニ五人扶持ノ米ニテ五人ノ家谷ヲ育ム者アランニ、其ノ食有餘ナケレ𪜈、亦不足モナシ、然ルニ、一人扶持ヲバ社倉ヘ納メ、別ニ一人扶持ヲ、他ノ富家ヨリ一割ノ利息ヲ出シ借リテ、年々ヲ経ル時ハ、未ダ五年ナラズシテ、家財蕩尽スル理ナリ、宋ノ時、王安石青苗錢ノ弊、大抵此ノ類ニテ、蘇氏兄弟、其他諸子ノ論ズル所ヲミテモ知ルベシ、是ヲ本ヲ傷フト云、六人扶持ニテ五人ヲ育ムモノ、一人扶持ヲ社倉ニ納メシムル、是レヲ末ヲ制スト云、民ノ貧福ハ、勤惰儉奢ニ由ルヿニテ、牙籌上ノ論ニハ行ザルヿ勿論ナレ𪜈、先ヅ牙籌ニテ論ジテ、然ル後牙籌ヲ廃スベシ、切ニ、初ヨリ牙籌ヲ廃スルヿナカレ、余ハ、生得ノ迂人ニテ、民産ノ事ハ一向辨ヘザレ𪜈、唯経史ニ嗜リ、古今ヲ達観スルニ、民ノ憔悴、今ノ時ヨリ甚シキハナシ、資用ノ夥多ナル、今ノ時ヨリ甚シキハナクシテ、資用ノ出所ハ、民ノ膏血ヨリ外ハナケレバナリ、井田ノ法ハ、九ケ一ノ税ナリ、今ニ比セバ、蓋シ輕シ、軍旅ノ時、車馬甲兵ヲ出スヿアレドモ、又二十受レ田、六十帰レ田、及ビ餘夫二十五畝等ヲ以テ考合スレバ實ニ甚重カラズ、皇朝孝德天皇ノ時定メ給フ租ハ、段別ノ物成禾五十束トシテ、其ノ租ハ二束二把ナレバ、二十ケ一ヨリ輕シ、且、其間免租賑恤ハ冊ニ相望ム、然ルニ古今ノ考モナク、強チニ民ヨリ穀ヲ出サセントスル、以テノ外ナル間違ヒナルベシ、當今世祿ノ士ハ、悪因トナク、上ヨリ莫大ノ穀祿ヲ頂戴スルヿ幾百十年ゾヤ、然レバ、祖宗以來ノ御洪恩ヲ報ズルノ一端ナレバ、知行ノ百分ノ一ナリ𪜈納メテ儲蓄トシ、饑饉ノ事アランニハ、貧民ヲ賑恤シタキヿナラズヤ、若シ已ムヲ得ズシテ農等ヘモ納メサスルヿナレバ、成丈ケ民ノ害ニナラザル程ニ納メサセ儲フベシ、儲蓄ノ制度ハ、此ノ篇ノ及ブ所ニ非ラズ、暫ク朱子社倉ノ法、及ビ諸家ノ論述スル所ニ委シ置ナリ、若シ夫レ倉廩ノ建處、建様、又糗粟ノ置様、各利害アルベケレバ、其人ニ付シテ詳カニ論定セシムベキ事ナリ、

倉地ノ乾濕、翳日向、又火災ニ延燒セズ、水害ニ漂沒セヌ所ト、然ラザル所ト、又大棟ニシテ倉數ヲ減ズルト、小棟ニシテ倉數ヲ多クスルト、或ハ箱、桶、俵等ニ充テ儲ル類、各ミ利害アルベク思ハル、ナリ、

自跋

中村牛莊翁善謔、昨年同在ニ江邸一、謂レ余曰、閲ニ家人書一、縷々数千言、而不レ過ニ于相思二字一而已、余斯篇儲糗二字而已、而累々数幅、不ニ特家人書一矣、因自責曰、楮毫何辜、乃徒役之爲、又自解曰、相思二字、果足ニ以悉ニ相思之意一與、礼者敬而已矣、詩則思無レ邪、三百之篇、三千之儀、聖人亦徒焉耳、不レ然、則亦何怪ニ儲糗之累々数幅一乎哉、屏居獨坐、追ニ憶往昔所レ論、作ニ儲糗話一、是爲レ跋、

（嘉永五年）壬子之秋　　松陰吉田矩方撰

此ノ儲糗話ハ、往年、余屏居シテ罪ヲ待ツ時、窃カニ感ズルヿアリテ草スル所ナリ、其ノ後、人ニ假シテ其稿ヲ失ヘリ、頃ロ野山獄ニアリ、家藏ノ故紙ヲ取寄セテ點檢スル中ニ、原稿ノ塗抹改竄セルヲ得タリ、是ヲ以テ烏有ニ附

野山雅著

センモ本意ナク思ヒ、又淨錄シテ笥底ニ藏ス、同志ノ士ヲ他日ニ待テ、其當否ヲ質サント要スルノミ、

安政二年乙卯十一月九日夜二更　　二十一回猛士識

（萩市松陰神社藏　校合濟㊞）

賞月雅艸

解題并凡例

一、安政二年、松陰野山獄に於て仲秋に値ふ、乃ち獄友と共に觀月の雅筵を敷き、席上に成つた詩歌俳諧を輯めて一卷としたのが、此の「賞月雅艸」である、吾人は「獄中俳諧」と共に此の一卷により、松陰を中心とする野山獄の或る特異な情景を想望することが出來るやうに思ふ、

一、萩市松陰神社に藏する本書の原本は、表紙には山に月を配し、裏表紙には溪流に楓葉をあしらひ、共に彩色を施し、中央より稍上方に枠取りして「賞月雅艸」と書いた美しいものである、個人別の作は夫々自筆自畫で半紙半面枠入の用紙に書かれ、俳諧は半面六行の罫紙に富永有隣の筆で連記せられてある、

一、吉田庫三編「松陰先生遺著」には本書の抜萃が載せられてゐるが、本全集には右原本をそのまゝに採錄した、尤も印刷は同號活字を用ひ連記の形をとり、繪畫は單に所在の箇所を註記するにとゞめざるを得なかつた、

一、作者名は多く雅號で表はされて居るが、その大部分の本名は、本卷中「冤魂慰草」に松陰自筆の註記があるから、參照せられむことを望む、

（委員　玖村敏雄）

題二賞月雅草一

樂之於レ人、無レ所レ不レ在、山可レ樂、水可レ樂、居可レ樂、行可レ樂、富可レ樂、貧可レ樂、生可レ樂、死可レ樂、而或欲動二於中一、蔽交二於前一、則山而求レ水、居而思レ行、貧而願レ富、死而倖レ生、亦何得レ樂焉、不二唯不レ得レ樂、又將二憂レ之不レ暇也、然則憂樂之変在レ己、而在レ物乎哉、乙卯歳（安政二年）、余在二野山獄一、値二仲秋一、初夜陰翳、既而雲霽、月色如レ晝、獄分二南北両房一、毎房六局、而余在二北房第一局一、於レ月最宜、遂與二同囚諸子一謀、作二爲詩歌一、各言二其志一、余因嘆曰、均獄舍也、而南北有レ異、一仲秋也、而陰霽有レ時、推而擴レ之、亘二古今一、達二天下一、物之得失、無レ有レ極矣、而吾豈遽変二吾憂樂一乎哉、詩歌盡成、題曰二賞月雅草一、余因序レ之、以見下吾黨在レ獄善樂、將レ無二往不一レ樂也矣、

乙卯仲秋　　松陰藤寅題

（夏窓相三見えるを添ふ）

○

夕ゝをみうらともおひくこうしより
　たのもとは月ふゝふの月影

（松陰自筆、非の繪を添ふ、口繪參照）

○

名月は　香ハ珍らしき　木の子ゝる　　松陰

○

良夜無レ塵月影清、虫聲繞砌暗愁生、醉舞二高樓一空一夢、蕭颯誰憐二獄舍情一、　五明莽

○仲秋の夜よひハくもりて
　ふけてもれゝかれハ　　大伴有ちる

まちもひし風のよにもる眞寸鏡
　ミゝき出してむ雲乃ひま〳〵

○仲秋無月といふこと戔よゝる　　藤原矩方

ゆくりなく雲農立まれゝくろゝて
　今宵の月を見でや止哉

（松陰自筆）

○仲秋

明月のもも着と芋も薄絹を
　着てハ坐敷へ打まろびさり

○中秋

良宵仰望桂開レ花、清賞無レ人唯喫レ茶、坐愛庭陰吟二蟋蟀一、更憐風外動二胡笳一、』
獄窓窺見月華明、照盡衰髮暗恨生、處々南樓興何若、誰知今夜繫囚情、』
欲レ賞二良宵一雲翳空、低三頭關下一思何窮、逢間二砧杵一淚痕溼、七歳延留繦綴中、』

瓢一房

○仲秋各詠

名月や眞もくま行沖の舟　　松齋子忠
宇治の茶乃絆かりゝ蟲の月　　和暢
名月や行脚もきてハ長咄し　　久子
きつゝひし雲ハいつこやゝふの月　　琴鳴
立かゝ流鴨の羽れとや今日の月　　蘇芳
名月や海はひとめま波乃花　　豊浦
　　城木

名月や木の葉まゝる丶玉の露　松陰
車坐ゐ酒のむ御代やゝふの月　可考
嶋ひとつ目のかきり也ゝふの月　花逸
梅檀のゐけゐらハゐりゝふの月　節洞
名月やわをれてならぬ絹かつき　谷遊
○月　越智通順
幾としか免てねしゝふの月影の
はをなく照を元ゆゐ農霜

○

住期誤被レ妬二雲霧一、物象無レ光欠二仰慕一、沽二來一醉一荅二良宵一、聊取二快眠一脫二愁寓一、
鐘柝依稀夢初成、神遊二鄉國一一時榮、江湖放レ艇波如レ砥、轂紋展レ金萬頃明、
巴調拍レ腹一百篇、吐レ氣凌レ雲淮海生、玉底氷輪兩々潔、短簫飄レ天舞二蛟鯨一、
逸興欲レ酣夢乍醒、唧々寒蛩滿二囚庭一、
時陰咫尺自翩然、萬感在レ身坐望レ天、兩歲逢レ秋如二屈蠖一、一心仍レ舊巧二詩篇一、
經更風力雲惟破、搓瘦窓間玉鏡娟、漢韵國風相共好、不レ知何處領二明年一、

（この間に松齋筆の月に菊の一頁がある）

右乙卯良夜偶成、此夜初陰後晴、因第二首及レ焉、　大伴有隣

○名月農席戔をふ巻て花廼屋大人に
巻頭ゑ句を請、撰ま任せて歌仙行　花ゑ屋社中

雅莚ゑ晴

月今宵むしも嵐の下音ゐ哉　顯龍
晴行霧に樂の穐　花逸
新米ゑ俵ま肱を打かゑて　蘇芳
兎角小供を育ゐり鬼　仝
治まる世まも鎧の威しゐへ　松陰
三味ゐ指南と書し下ケ札　仝
とうしても里ゑなほりハ捨り兼　和暢
洗むし髪を乾せる晝　陰
よほし麥蠅の集類五月晴　逸
牛吼て居る土手ゑ葉柳　仝
今度來ゝ和尙の談義珍らしゐ　陰

杖引て寄る煎シ茶の會　　豊浦陰

八景の屏風農(ウ)繪圖ハ古めゝし　　芳逸仝

何ゐしよゐハ今ハ金ゝし　　暢芳

玄伯もおとけもかりを言ており　　逸芳

木綿車ゐ下女の居眠り　　陰芳

花も今飛鳥道灌御殿山　　逸芳

春たゝかゐに蝶の幾群　　陰芳

約束茂數へて待ん出代りゐ　　逸芳

人ゐ言れぬ夕(ベ)ゐの夢占　　芳逸

神棚の榊ゐゐるゝ一ゝ志つく　　逸芳

目ゐも能くきく筑紫目藥　　陰芳

打散らす海の面ハ火の光り　　逸芳

千鳥啼ゐつ冬ゐの風　　芳逸

母親をいゐゐり申ス綿絹子　　逸芳

おか谷戴く殿の御恵ミ　　可谷

近頃も何處も芝居の流行もの　　遊逸

酒屋のむかむ肴やの店　　逸芳

淀川の夜舟ハ窓ゐ月ハ影　　陰芳

袷羽織(ヲカ)も着(カ)ても肌寒　　龍陰

むら〳〵と紅葉の散れハ鹿もなく　　子仝

辰巳ノゝゐゐゐ住し墨ミ染　　逸芳

世ハ世話を離れて孫と噺して　　蘇陰

土産ゐ貰ふゐしき繪の數　　芳浦

暖サゐ花うつくしう咲き懸り　　陰成

ゝふも長閑ゐ遊ふ永キ日　　菊

○

もよふ奇し宵のアメリカとく遁て　　久女

日本晴ハ月茂見るゐゐ

○仲秋　是夜初陰、既晴、

雖有鎧器、不如乘勢、舟楫已具、巨川可濟、勢有難易、器利鈍、持此可以論百世、

今宵探レ月々不レ見、欲レ寢未レ寢心猶レ繫、仲秋求レ晴多得レ陰、默計三二十有五歳一、強歌一曲忽擧頭、月華未レ麗聲何麗、強飲一杯又低頭、陰雲未レ霽問何霽、可レ憐器鈍當勢難、安向二古人一繼二餘裔一、苦吟夜久語益澁、憚二人悟一歎哀契々、

男兒不レ能レ駕二艨艟一驅レ鯢大究中五州之形勢上、高臥猶當下貫二古今一挾二聖賢一通中論萬世之經濟上、不レ然汲々營々亦何爲、其死其生無レ關レ世、吾曾誤失二浮レ海桴一、更陷二吏議一苦二囚繫一、々々非三復世間情一、圖書悠々度二芳歳一、今宵佳期屬三二五一、容光猶レ窺二月華麗一、四時有レ月皆可レ觀、何如秋天萬里霽、自レ古有レ月照至レ今、更自二華夏一及二荒裔一、月也有レ明無レ不レ照、天上宇中默相契、

二十一回藤寅

五明莽

五明主人

藤原久成

○

月影乃居る夜もゐり楳ゝ花

○

朝日和ゆれ色見さるをか支ほむる

○

雲ゝこゝとらひ盡して月影農

（梅の繪を添ふ）

（かきつはたの繪を添ふ）

（この間三枚半空白）

（竹に月の繪を添ふ）

（この次に源一誠筆竹に菊の繪がある）

邪魔をる松ゝさゝくゐき風

○

名月や實ゝ日の本ゝ月の本

靜修齋

（萩市松陰神社藏　校合濟㊞）

獄中俳諧

解題并凡例

一、「獄中俳諧」は松陰が野山在獄中、獄囚獄卒等と折々に集つてものした俳諧を寫し置いたのを、編者が輯めて一書としたのである、獄中では吉村善作（花廼屋）が最も俳諧を善くした、松陰は先づ吉村の指導を受けて自ら句作を試みたらしい、本書の開卷にあるのが恐らく此の初期の自作であらう、さうして後には獄を擧げて斯道に進むまでになつて來たが、本書によつて其の過程を見ることが出來るし、又獄中和樂の趣も想像せられる、

一、本書の自筆原本は殆んど全部東京の吉田家にあるが、京都の齋藤家にも斷片が保存せられてゐる所から推して、なほ他にも散佚した部分がないとは言へない、併し今後更に發見される見込もないやうである、吉田庫三編「松陰先生遺著」第一編には本書の抄錄が載せてある、

一、松陰免獄の時、獄友が寄せた「俳諧留別詠草」は關係文書篇に屬すべきであるが、こゝに置く方が意義も深いと考へて附錄した、

一、自筆原本中には編者の判讀出來ぬ文字や疑を存すべき文字があるから、その部分の寫眞を挿入して大方の教を俟つことゝした、

（委員　玖村敏雄）

○

秋ゃとてのぞけハ梅雨の晴間哉

螢火や草露あげき谷の間

弁當の匂ひは競ふや田植ゃか

田の面ニ吹風ゆおし五月晴

皐月に翅濕ふ燕ゃな

淋しさの一ちぬはをる雨蛙

葉柳や池ニさし出た涼み棚

葛水や柳の陰の懸り舟

鶯や昔なゃらの春氣色

夕涼み月ニもかして笛の聲

花の山日暮忘まて樽の酒

雪の藪見習まぬ村の飯烟

雪ハ朝隣の近き山家ゃか

（以下別紙）

のうぜんや旅人休む松の下

梅雨間の晴

螢

田植

五月晴

皐月

池亭聽蛙

葉柳

葛水

今春花鳥作邊愁といふ心をよめる

夕涼み

のうぜん

涼しみの秋ハ是なり桐一葉　森の木末風も動ゝぬ雲の峰
旅の夜の燈火消へてきり〳〵す　朝貞（貌）
朝貞やほうきめの有る庭の砂
朝貞や手水を遣て窓の先
やま窓ま寐なゝら見るや盆の月
魂送る学からけ舟や曉の風
紫の戸を開けハとまも月白し
黍の穂やゐつくも同し秋の風

二首共前文ゝり、玆ニ略ス、

○

秋の七草

巻秀　鶺鴒や流るゝ水にはむてゆく　花廼屋撰
第二　浪人の所帶は薄し秋の風　鶺鴒　谷遊
第三　露霜や葉蘭ま殘る朝の月　秋風　和暢
露霜　節洞

一九六

立秋六月廿七日

雲の峰
きり〳〵す　朝貞
同
盆の月

七月十五夜、異船相島ニ來ると聞、感ゝり

第四　名月や野ま蟲くらふの聲細し　名月　錦舟
第五　秋風や鵜の這上ル岩の上　秋風　節洞
第六　朝顔の小雨ま長き命哉　朝顔　其志
第七　淺漬耳（ヒ）煎茶の味や秋の風　秋風　烏友
第八　鶺鴒や流ハほそき小石原　鶺鴒　其風
第九　蟲の音も草まうつもる夜明哉　蟲　錦舟
第十　名月や小半分酒まむらはゝみ　名月　谷遊
第三十巻軸　見まゝろむ松ままそゐれゞふの月　名月　可考

箒めゞ庭

巻秀　朝起の身ま樂りあり初ゐらし　初嵐　其志
第二　說法の濟し御寺や秋の暮　秋の暮　久子
第三　朝寒や高瀨戔下を筏きし　朝寒　城木
第四　尼とありし訳聞く夜半や鹿の聲　鹿　其鈞
第五　夜の深々て巴蕉（芭）の聲や秋の雨　秋の雨　松陰
第六　朝寒や旅出の起ス渡し守　朝寒　谷遊

第七　山畑も野畑も白し蕎麥と花　蕎麥
第八　隣りまも豆ゐる音や秋と雨　古梅
第九　鹿なくや秋の哀も有ルゐ中　秋の雨　蘇芳
第十　別荘と碁の音高し秋の暮　鹿　谷遊
二十五卷軸書　鹿鳴くや月ハかすかま見ゆる山　秋の暮　味慶
　　鹿　錦舟

短歌行

八朔や稲穂の浪も音おしく　花廼屋
打解の話つきせぬ藪入ま　蘇芳
看板ま御用煎茶と書記し　蘇
愛敬も流石ま書きし勤の身　蘇
交易の繁昌をもる米相場　松陰
花催合戻りハ暮まちとり足　節
大平の恵のゼヽく有難さ　松
蚫ふきもる松ゐら鷹ハそきて行　逸
くつろきこまろりと徳の半分酒　蘇
一夜まさけて待ハ初月　花逸
井筒の水農清ひことおり　節洞
船のもさきまもるゝふり袖　逸
御寺ま絶へぬ念佛の鐘　逸
谷のぬるみまうゐひもるおり　蘇
おけしまゐけし弦おしの弓　松
身過きのつらた大根引業　節
都ま隣る宇治ハ名の里　松

月の夜ハ特更うきる今とんきは　逸
表替しま疊屋ハゐんまけお　逸
處々常葉の山の色の花　逸

（以下原本別紙）　○

極きゐしき　（以下細字行間書は原本には朱書になつて居る）

アレ〳〵ニアレ〳〵ニアレアレニ　蟲籠をさけてゐるくわんもく　蘇
舳先ハ扇子あるままさぬ弓　種々様々の名器名軸　松
ハラ〳〵雨カ降リ出シタリ　時知り良ま歸る雁　蘇
唐崎ま一夜の花の歌枕
聞ケハキク程〳〵　花廼屋選
鶯の聲ゐるやゐまも涯の明ケ　花　逸
見ハラシノヨヒコヨ扨々　其　苔
芽狩まもからに登る峰ハ寺　其　風
コノ樣ニ醉テ寐ルノカ極樂ヨ　可　蘭
軒端の花ま千金の春　雅　交
見晴シノ　乘物殘出て見さつさの朝ほらけ　其　釣
チラリ〳〵ト〳〵　織もさま配る娘のかをぞ糸　谷　遊
ハラ〳〵雨カ　ほつとりと山も靜ま郭公　鳥　友
アレ〳〵ニ　雛を引ゆく丹頂乃鶴　飛　入
秋モ豐カニ日出度シ〳〵　新ゐらの注連おふ宮乃氏子中　二　谷

ハラ〳〵雨カ麥蒔の間て見舞ふ嫁の郷　錦舟

平折カミチラリ〳〵ト幾群も胡蝶の遊ふもれ日和　荷璘

平折カミノ蛙なく水のあるゝ野道哉　其志

チラリ〳〵ト瀬さるゝ浅登小鮎のきし傳む　節洞

アレ〳〵ニ加賀り來ル道幅廣し野路の梅　其著

同　ゐた帆印ハ太ちた客舟　雅交

此様ニ孫子た雛と祖父の幸ひ　路芳

サア早フワケガ聞タイサア早フ夜討の飛脚到來の庭　其風

アレ〳〵ニ帆かけて沖を航ル黒船　松陰

チラリ〳〵ト いきり火の波間細き彩ミの中　木城

長折アキノミイリ遊むよき野や夕霞几巾り　谷遊

書　いきかしき日ま怠りの鳴子哉　荷璘

チラリ〳〵ト咲こちし花ま飛ふ蝶遊ふ蝶　花逸

長折　愛らしき野菊もきら岩間より　其著

平折カミノ蚊もおしす身ましむ風や後の月　路芳

アレ〳〵ニ廿六夜ま雨たうす雲　其鈞

チラリ〳〵ト盃ま散る花の香ま憎らす　路芳

書　おふゐゝハ弓た射手成る案山子哉　二谷

アレ〳〵ニ六夜夜の月と三尊のミゝ　路芳

同　雲間ま出し雪の富士ら祿　其著

外

聞ハ聞程〳〵有難神代の恩の御講訳（譯カ）　葉竹

秋モ豐カニ何所もかも祭りたらけま造り酒　味慶

アレ〳〵ニ眠る子供ま見せる三日月　德冨

サア早フ蛇目の笠をあしる女房ウ　路芳

其オウラミカ解テ舘シサ

見嘯ノホレ新宅浅自慢ま招く月の宵　全

チラリ〳〵ト夜ゐらしま柳をくゝる三日た月　可蘭

秋モ豐カニ隣ら隣へ送るはゝ母もち　錦舟

閑ハ閑程笠　近松ゟ啞とハあれと胸迫り　花廼屋
夕暮や梅まぬ間るゝ三日ぬ月　花逸

追賀

○

乍ゝ恐　九月朝日　節洞

公ぬ参勤を奉ゝ祝りて

短歌行

障りなき月明るさの秋深し　花廼屋
千代迄祝く渡來し鶴　逸
糊附の袷衣迄孫まきせ替て　松陰
拾て捨る芋くす糸くす　蘇芳
此ゝろは絶へす折々下り舟　花逸
綿子連ゝる安賣の米　松陰
一醉の夢ま世渡るみそま酒　蘇芳
冬枯なゝら話物眞似　花逸

都ニハ近頃ゐしゐ流行事　松陰
彼所ハ神社ゝは佛閣　蘇芳
晴もよし霞まうもる花と花　同
利茶の會ま客の待受（一本妾もの）　花廼屋
洗ゝる髪もゐゝゐる妾　蘇芳
散らし書なる口紅の文　花廼屋
問屋場ハ早晩もとさゝを闇ま　蘇芳
雨ゟ揚まは乾く沙道　同
人情は兎角田舍ゟ律義ニて　松陰
貸附て置者商ひ　節洞
待宵の月の催合ニ樂マレ　花逸
楓てり添ふ夕榮の空　同
懸樋ゟら水を受継臺所　蘇芳
猫の首子の鈴のから〳〵　松陰
花ハ今盛りと誰も喜ひて

青柳誘ひ謠ふ春風　琴鳴

各詠

杯の手元へ輕き新酒哉　琴鳴
落鮎は易く越あん一瀨哉　花逸
大手振て行道廣し星月夜　蘇芳
荆棘の枯てさゝくや秋の暮　谷遊
初鴨や夜々の〳〵と水の色　節洞
落栗のほかの取付袂ゟあ　城木
松杉の木立へ高し露あくまで　和暢
色を見て鴉のとまる熟柿哉　豐浦
楓もる中ニも朱の鳥井哉　久子
（一本には一番首に出て居る）
朝霜や見習ぬ嶋の五つ六つ　松陰

○

九月十六日

月入りて跡うゝ寒き思哉　顯龍
燈火伽は永き夜の詑　花逸
冬隣る籬の花の淋しゝは　蘇芳
何心なく鳥の來て鳴　松陰
孫たるてもゞへうあまて子傳歌　節洞
取出して讀む讀みゟけの本　琴鳴
降りゟゝる夕立雨のさらく〳〵と　同
所てん代二丁三文　芳洞
小かゝぎを頭ニかけゝる繫き馬　逸洞
給そら事にも狩野の一軸　芳逸
立て舉居て又舉ル花盛　陰芳
小半分酒は醉てあゝゝゟ　洞陰
何故に石の地藏の流行出し　芳洞
仕組村ゟやと書ゝ木の札　芳
綿籠固の上は木綿の五六反　洞

甲斐〳〵しさの嫁の取形　逸
逢ふ首尾の謎に背あゝを叩ゝきて　芳
風呂の煙の藪まし立　陰
てりふりを告る三日の月の影　谷遊
氣も勇ましく鳴く轡蟲　逸
老まさまこと嵯峨ま昔の跡とひて　芳
短冊にかく夕部の讀歌　陰
香ハしくみのりの庭に香ほる花　逸
垢のしつくの溫む夕榮　芳

○

弘　うら枯や只さう〳〵と夜の風　節
栗　糸車手もおざま々り秋の暮　洞
秋の暮
富　初鴨の行方哀し秋間暮　谷
河　廣野行ク吾袖寒き尾花哉　遊
尾花
岡　朝霧に跡先知まぬ繩手哉　蘇
霧

吉　圖らすも木の葉を散す秋の風　松
秋風
平　珍らしう呼まて舉る新酒哉　陰
新酒
ゆく秋　朝露にぬまる帽子や暮の秋　城
井　何思ひ鳴くのら犬や秋の雨　木
秋の雨
高　庭石の今朝のしめりや露時雨　豐
露時雨
（此次に詩がある、松陰詩集乙卯、九月十八日有憶象山先生云々ミ四字異るの外同文である）
九月廿九日短歌行　浦
久　明るサの思や今世も月と雪　和
子　手向る水まかほる茶山花　暢
ほり物の多き細工に免かれて　花
火の用心もいとふそよ風　逸
御召丈流石御馬のをとなしく　蘇
路の勞れに眠り催す　芳
すいゝらに燒穴ふとる單衣もの　花
夕立晴て跡の涼さ　逸
箒木目の立派に付し庭の面　同
松
陰
同

娘盛りの身仕舞の貌　節洞
さく花のほてりよ咲ふ山と山　花逸
春長々と鶯の歌　松陰
獨手に酌もせん茶の味に　花逸
都の巽しむる蓬生　蘇芳
掛物の繪圖は古風な狩野の筆　花逸
雨雲の間に漏るゝ日の足　松陰
鐘の音よ逢ふ首尾を又兎や角と　花逸
髪よさしよむ長ひゃんさし　蘇
羽遣ひもぬるく立舞ふ秋の蝶　花逸
桂男子（オノコ）の袖かざす影　同
門口に主も戻りてせき拂ひ　蘇
槇も炎立にふき生くど　節洞
慕ひしき花の法會の魂迎へ　花逸
迎へし石にさくすみよ草　花の屋
　　花逸

（以下右の草稿の裏にありしもの）

○

防府

天滿宮奉納

曉ほのゝぎゝゝ鳴高し冬の梅
起て手洗ふ水澗（カ）るゝ澗
清らかに卓の塵をもきのけて

○

前句發句題

旭きら〳〵ぎし登りケり
所かハれむ〳〵
よふ〳〵たつ冬あさりましさよ
評判〳〵さても評判
おをひ〳〵よ〳〵
冬の楳・時雨　寒サ

獄中俳諧

獄中俳諧

冴　木兎

ヘ　ユキノケシキ

ヘ〻フユノアシタ

限十月十一日入花貳穴

秀軸景物惣短冊

○

十月十二日芭蕉翁忌

慕ふ道はぬをた小春や翁の忌　會林

枯野まつきぬ言草の種　花逸

糸つむをひまにハ孫を遊せて　松陰

隣へ頼む時附の狀　顕龍

下し荷は蓆包ミま俵もの　花逸

立並へさる白壁の倉　蘇芳

待宵の月から晴て田舍迄　松陰

あらひ鱸の味ハ格別　龍花

表八句

着はしめの袷羽折も具合よく　龍逸

ふんと藥種の匂ふ門先　同

近頃は米の直段もかゝり勝　芳

かこゝゝの身はあたま暮して　同

菅笠に國の印のなつゝしく　同

ふつて尊き伊勢の御祓　逸

村中に聳えて高き老の松　和暢

牛をほく〳〵曳て秋寒　逸

酉さす方から直ま三日の月　同

稻は色つく千町五百町　同

世の塵にすゞ打拂ふ氣の安サ　芳

勝手を隱す細き衝立　同

寫繪に替らぬ滋賀の花盛　逸

聲も長閑に歸ルゝりゝ祢　陰

獄中俳諧　花

谷遊　逸

琴鳴　松陰

芳　龍

かき餅に晝間の勞くつろぎて　裏十四　芳逸

這ゐゝる子を抱て行姉　芳逸

髮剃は文珠四郎の二百文　同

扨あふなゝな住吉の橋　同

松蔭に田舍道者の虱ゐり　同

芝居なからも涙こほるゝ　芳顕

俄雨晴れて涼き送る風　同

茄子と胡瓜は未タ初もの　芳

旦那寺の和尚は扨も肥太り　同

猫ゞもきやら撫つさもりつ　同

此頃は別て肴も安いことあり　同

劍は鞘ま弓は袋ま　逸芳

背上々た瓦まうつる月の影　芳

隣を招て手造の酒　顕

三藏は兎角に力ま自慢きり　芳

太鼓で告る添出の舟　逸陰

薄〳〵と空東雲に押移り　逸

忍ふともきとつらい下駄音　芳

烟草入態と忘きて立戻り　同

圍爐裏の中に焚る生柴　同

追はきの出ルハ昔の事にして　同

聲高〳〵とふきる蟲賣　同

清らかあ加茂の川瀨まうかむ月　同

年貢ゆ沙汰もかるやかあ秋　逸芳

念頃な子には慈悲ある親心　同

談義ゐもむと鐘のゐう〳〵　同

散もせすさきも殘らす花の枝　陰

眞砂の上を狂ふかけろふ　陰

養父入ま子をは自慢に歩せて　同

袂に入きてめけるせんゑは　逸

夕蔦に明日の日和の受合まと　陰
　立砂のある御屋敷の門　同
酒樽の數を車力に積擧て　芳
　按摩坊主は笛吹て行　陰
溫泉の宿ハ旅とハ思ひます　龍
　國府煙草もかゐる品々　逸
鉢鐘を火鉢にしたもゐしなもの　同
　膝を崩してよるふくと汁（力）　同
念頃な中ほと無理な事をハゝ　芳
　あたな樣でも實な艶文　逸
初潮の折も殊更月はれて　同
　鰯の箭の光る網の目　同
酴醾酩の酒に醉たる秋祭　逸
　幾ッも並ふ土手の提灯　龍
狸より狐の智惠は中々ま　陰

機織をとの近き窓先　芳
裏棚ま催合井筒の催合せと　逸
　高札いまて賴もしをとる　芳
傳りの弓ハ力をこゝろみて　逸
　はらり〳〵と揚り散るなり　芳
菊農香のまた薄〳〵と宵の月　同
　新米飯ま因こよる友　龍
戰農昔話も勇ゐしく　陰
　須磨の浦邊の波のゆるやゥ　芳
たなひきし霞隱まま花さゥり　逸
　胡蝶も舞を休む水筒　芳　十四
野遊の日にうなゐるゝやつま髮　同
　肱ゥ當まはあしゐ目の中　同
からくりハ名さへ竹田の傳授事　逸
　辻ゥら〳〵へ送る拍子木　芳

ぞん〳〵と闇夜に狗の聲計り　陰
雨の旅寐は夢も結ハす　逸
振へ共蟻の四月といふらに　芳
雪ニはあらてゝきの卯の花　陰
近ひ内遊行も下向なさるけゐ　逸
草鞋八文草履十文　同
一二軒先に豆腐の布袋　芳
櫓さけなゝら鼻歌で行　同
靜なる夜を月まさへ支りなし　龍
實入となれはさゞむ高黍　同
出代りも其當分ハ客氣とり　逸
間ゝゐ透ゝな烟草輪ニふく　陰
留守の戸ま騒く鼠ハ晝中も　芳
庭ま積さる杉形の俵　逸
番頭ハ番頭たけの威光あり　陰

風呂の戻りによる料理茶屋　陰
幾千代も代らす花の打ゝほり　芳
ゝほる硯の水溫む春　逸

○

翁の忌

紅葉ちる錦を拾ふ翁の忌　陰
翁忌や香ほり慕ふ殘り菊　芳
時雨
麥蒔を半途てやゑる時雨哉　逸

○

短歌行　（安政二年秋）

酒呑ノ喉靜ナリ歳ノ暮　樗村
懸取コヌガ苦ノ中ノ樂　松陰

獄中俳諧

（東京市吉田茂子氏藏　校合濟㊞）

遠カラヌ春ノ氣シキヲ待兼テ　松陰

曉告クル庭鳥ノ聲

告豆るかけゝ八聲ゟ久堅の

天の戸ゟけて春ハ來ゟ々り

吉凶ハ只天運ニ任タリ

月ニ催スウトン新蕎麥　綿丸

武士ノ心勇マス轡蟲　久子

イツクヲ見テモ秋ノ淋シサ　松陰

酒ト茶ニ徒然シノフ草ノ庵　松陰

谷ノ流ノ水ノ清ラカ　久子

四方山ニ友ヨフ鳥モ花ニ醉ヒ

蝶ト連行ク春ノ野遊　松陰

（京都市齋藤恒藏氏藏　校合濟）

（作者不明）（附錄）　俳諧留別詠草　安政二年十二月

鴨立てゟと淋しきゝ夜明ゟ南　女　久子

相宿乃朝の別ゝや冬ゝゟ免　豐浦

見送ゟ歌をゟ寒し梅嫌　和暢

世ゟ浮ゟむ芽張柳の競哉　谷遊

一とせゝ夢ゟ別ゝの寒サゟ難　琴鳴

星冴や今宵も何の夢をミ舞　蘇芳

ゟとへ香を殘して出ゝり室乃楳　節洞

以上

（東京市吉田茂子氏藏　校合濟）

冤魂慰草

解題并凡例

一、松陰と下田踏海の事を共にした金子重輔は萩の岩倉獄に繋がれて居たが、安政二年正月十一日遂に獄中で病死した、固より罪餘の身であるから、葬儀も建碑も許されなかつた、松陰は此の不遇なる殉國青年の靈を慰めむために、諸國の知友に檄して、追悼の詩歌文章を募つた、防長兩國はもより遠い國々からも知名の人が詩歌を寄せて來た、松陰はこれに獄友の俳諧や自作の詩歌等を加へて一書を編み「冤魂慰草」と題した、

一、本書の原本は萩松陰神社にある、半紙二つ折假綴で表紙の中央に「冤魂慰草」と書き、左側下方に「松下村塾」とある、これは他筆であつて、その次に松陰自筆の標題があり、その見返しに松下塾と自署してある、漢詩は松陰常用の罫紙に、其他は普通の半紙に連記してある、この中には松陰自筆のところも幾分あるが、富永有隣の筆が最も多い、

一、本全集は右の原本に據つたが、尙ほ同神社に保存せられて居る諸家自筆の漢詩文を卷物にした「澁木子追弔詩文」なる一卷をも參照した、

一、附錄に載せた和歌と發句は東京市吉田家の短冊中から寫し取つたもので、内容上こゝに入れるを適當と考へたので添へることゝした、

（委員　玖村敏雄）

冤魂慰草

簡二諸友一爲二亡友金子生一、求二哀詞一書　乙卯

生之有レ死、物之常也、而志士之所レ不レ忘、仁人所レ不レ惜、吾豈獨於二金子生一悲レ之哉、然悲レ之不レ能レ已、乃人之至情、況如二生之死一、更有二可レ悲焉者一乎、吾於レ生最親、悲レ生最深、因爲著二行狀一、作二挽歌一、寓二不レ能レ已之悲一、且傳二諸悲レ生者一、欲下益求二其詞章一、哭中生於地下上、世之志士仁人、其亦幸悲レ之、古曰、朋友之墓、有二宿草一則不レ哭、生之死、已五月矣、其寧可レ緩哉、五月五日、乙卯（この二字朱筆）

土屋矢之介云、僕輩豈緩レ之哉、蓋生之死、固非二一紙一章之可レ慰二其魂一、將レ有下大不二朽于生一者上焉、兄其勿レ遽、浮屠默霖云、一文百三十字、字〻涙〻、知レ義之人、雖レ一二見之一、有下不レ禁二涕零一者上、況於二同レ事之人一乎、所下以簡二諸友一促中哭詩上也、此文一篇可二以代二哀辭一、唯不レ係二韻語一已、

哭澁木生

藤寅義卿

駅舍與レ君訣、匆々不レ盡レ詞、囚繫在二各所一、消息不二相知一、江海吞舟魚、徒困二半畝池一、籠鳥失二故林一、未レ忘二群飛時一、鼓角自晨暮、會見不レ知レ期、夢魂尚相逐、聞レ訃却自疑、豈計生別離、更爲二死別離一、

其二

梅也此花原絶レ倫、因レ經二艱苦一倍二精神一、何圖今日幽溪下、一片飄然忽失レ春、

肥後　丸山義質

其三

醜夷是何物、獗然縱二跳梁一、不レ審二彼狡謀一、何用二張脩一擴、澁君有レ見レ此、力事レ索二情方一、偉哉報國志、卓哉鉄石腸、天意何所在、人事亦無レ常、一朝事蹉跌、忽入二幽鬼鄉一、道阻無レ由レ弔、聊奠二此鄙章一、成敗非レ所レ論、在レ君何損レ光、幽明雖レ異レ事、生死固勤王、懸知冥々中、精魂摩二穹蒼一、願化爲二霹靂一、轟然震二外洋一、

同　今村元純

其四

海上妖氛暗、悍然驕二蛟鯨一、大氣爲壓倒、何見二天日晴一、忠憤不レ能レ已、誓欲レ爲二干城一、成敗所レ不レ顧、況亦死與レ生、疾病遂不レ起、使二人淚縱横一、天乎將時乎、反堙二竹帛名一、然正氣所レ在、何處無二感享一、爲慰天定日、海内仰二豪英一、

其五

安藝　木原藉之（廿二時松陰朱筆書入）

天下紛々漫講レ兵、誰知奇策出二書生一、單身不レ憚二風魚厄一、萬里欲レ知二戒虜情一、繫獄元非男子辱一、蓋レ棺唯要三後賢評一、與レ君半面無二相識一、猶望秋雲感淚横、（晃松陰朱筆書入）

浮居月性

其六

奮レ身航レ海計何長、事覺幽囚病且亡、知汝憤魂瞑不レ得、騎レ鯨飛渡大東洋、

杉修道

其七

弟也歸レ家幸逐レ年、何爲君獨去登仙、孤墳寂々無二人到一、朔雪寒風薄暮天、

祭二澁木烈士一文

安藝　浮居默霖

嗚呼痛哉、烈士々々、一躓誤レ趾、何其至レ此、既已知レ己、亦將レ知レ彼、深高致志、忠魂曷止、富士之雪、琵琶之水、雖二尽消渴一、曷及二吾子一、不レ果二厥志一、從容就レ死、殺レ之成レ仁、棄レ之取レ義、悒々飛魂、冥々爲レ鬼、茫々天地、亦盍二振起一、嗚呼痛哉、烈士處レ生、初謁二義卿一、質以二隆興一、告布二丹誠一、匪レ縱匪レ横、決レ策相顧、誓曰、弗レ探二夷情一、何以是懲、欲下尽二形勢一、輔中吾神兵上、八百神靈、乖二照明一焉、欲レ叫不レ嗚、付レ圄拘レ囹、嗚呼烈士、如レ是而捕、痛哉烈士、如レ是而訃、招二烈士魂一、奠二烈士墓一、祭以二余文一、爰解二其怒一、尚饗、

十月廿四日、有レ憶二亡友澁木生一　乙卯

藤寅

去年今日與レ君別、一別遂爲二永世訣一、棘垣鑰戸身儘安、宿草荒墳恨漫切、死者無レ知將有レ知、料識幽魂遂未レ滅、鄂羅議レ疏允レ所レ請、花旂求レ炭洋不レ閑、最是難レ測暎咭唎、突然貢艦來不レ絶、瓊浦豆海與二箱港一、枉附二豺狼一營二窟

穴、君逝一年事百変、生無レ可レ樂志將レ折、幽魂髣髴尚來享、酒醴維清菜盛潔、

信濃　佐久間象山（平啓子明）

題二金子生行狀尾一

金生忠義志、醵遭二盛世棄一、我亦斯人徒、命乎可レ安レ義、脫レ繫各東西、心期レ勵二初志一、利器修且藏、蠖屈待二時至一、如何不レ秀レ苗、中路零二其穀一、嘘唏豈獨今、百世足二悲淚一、

（松陰自筆）

挽二金子重輔一丁巳

久坂誠玄瑞

聞汝奇男子、布衣爲レ國憂、風濤漂二一葉一、囹圄斃二孤囚一、成敗何須レ問、忠誠本自酬、恨他無二半面一、泉下路悠々、

（松陰自筆）

追二憶澁生一

富永德有隣

白楊声歇乍三年、野草青回孤塚前、溝壑忘レ身尊二節義一、檻輿顧レ影望二山川一、沙場驅逐猶容易、平地波瀾甚艱難、又是梅花翻痛句、囚窓聞レ雪不レ能眠、

哭二澁木生一

安藝　木原籍之

邊海風雲虜氣腥、誰將二羞酌一祭二君靈一、（帶二（松陰朱筆書入）藩）泛レ槎博望嘗一、張蹇壯志窮胡地一、持レ節蘇卿報二蘇武精忠歸漢廷一、奇計（策）無レ成淪二岸獄一、英魂（沈）不レ滅滿二滄溟一、一州（有）多少文章士、知レ建二青碑刻二誌銘一、

挽二澁木生一

浪華　安藤秋里

與二徒守レ法竟無レ功、犯レ禁還求レ盡二寸忠一、投舶謀逆爲二画餅一、身後人知二他氣雄一、

同　廣瀨謙

悼二澁木生一

此心不レ遂憾如何、目断東溟萬里波、海外獄中均一死、長教二志士涕滂沱一、

（以下津川文の詩まで松陰の自筆）

京師　梅東清敬

哀二金子重輔一

一葉搜二竜窟一、雄心那慨慷、旃裘膽應レ落、肉食眼難レ明、縱致二圖犀死一、猶傳二海内名一、殷勤九草木　莫下向二塚頭一生上、

月性師爲二吉田生一募レ哭二澁木生一、此詞應レ之、

電之燁々、雷之淵々、慷慨赴レ義、長門有レ人、長門有レ人、維日本有レ士、命之在レ天、心乖レ事否、名有二音從一、人有二生死一、哭而慟レ之、非レ以二其辜一、

伊勢　土井恪

浪華　後藤松陰

読二澁木生佚事一、月性師之囑

海徼有二何事一、夷船頻窺伺、魯斯英米利、迭向二浦田一指、鷗浮又鳧沒、寢難レ安二衾被一、夷意果如何　開レ端在二互市一、有無相貿易、融通古今理、縻虜元狡黠、舐レ糠或及レ米、愼レ始在二約束一、不レ然開二釁始一、廿一回猛士、揞腕有レ慨レ此、潛附二搭蕃船一、欲レ覘二彼情僞一、從レ吾其由歟、澁生聞レ之喜、方今有二斯士一、眞足レ強二士氣一、豈圖事発覗、罪犯二國禁一似、深哀事遂白、流爲竟幽死、嗚呼今時事、只有レ堪二切齒一、澁生笑歟擊、九原不レ可レ起、

武光惟肖

弔下死二夷事一人上

我愬夷求勞二廟謀一、懷柔交戰砭二咽喉一、（戟の誤寫）（マヽ）挺レ身誤レ事功無レ見、堪レ激二趙赳奔戀儔一、

馬關　伊藤靜齋

吊二澁木亡兄一（この詩澁木子追弔詩文之中にはあるが何の故か採錄してない）

（一片赤心報國忠、惜哉壯暴誤二成功一、古今死節何論所、千載芳名有レ不レ空、）

安藝　津川文

哭二澁木重輔一

壯士休下將二繩尺一論上、奇功欲レ報二国家恩一、乘レ桴路絶波濤險、縲紲霜飛日月昏、鵬翼雖レ摧志何折、驥材未レ展骨空存、一堆黄土千秋恨、逝水滔々咽二暮門一、

須佐　小国剛藏
源武彝

悼二澁木重輔一

乘レ桴違レ策夢中新、質二諸君前一始識レ眞、欲下尽二堪輿一全中我国上、翻逢二桎梏一斃二其身一、漂レ波遺恨茫無レ跡、貫レ日精忠凛有レ神、聊賦三二詩一傷且吊（弔）、陳レ情不二是異州人一、

甲寅之歳、余在二于相陽之陣中一、一夕夢、有レ人來語曰、長州士人、吉田寅二、澁木松太、欲下駕二夷船一航中海外上事覺就レ囚、翌以二夢中所レ見、質二諸寡君一、則眞有二此事一矣、因起承及レ之、

跋二金子重輔行狀後一

右一卷、爲二金子重輔行狀一、其所レ知吉田寅二之所レ造、頃日下玄瑞、爲レ予得而示レ之、予一見歎賞、乃有二奮勵不レ能レ已之意一、因謂、嚮者寅二之被レ放而帰也、久保清太、示レ予以二其断案文一、縷々百餘言、大意謂、彼雖レ冒レ禁、而其志之忠概、乃可レ嘉、而予欲レ聞二其事之顚末一、而不レ可レ獲、其後予遊二江戸一、訪二鳥山生一、々語以二甲寅之事一、甚詳悉矣、而生之所レ知、二十七日前之事、其後乃不レ知、予猶以爲レ憾、」及二今読二此卷一、始得二大悉二其首尾一、而以爲二彼断案文、深得二其宜一、律曰、殺レ人者死、而孝子報レ讎者、不レ顧、嗚呼孰謂二廟堂無二人乎一、」顧夫廿七日之夜、海色黝黯、虜艦之立二於其間一、隱々如レ山、怒濤鯨浪、排擊抵觸、噌吰作レ聲、壯夫一齊、躍立二其軸（軸カ）一、一劍之外、又無二復所下持、當二是時一、虜魂方已褫、而天下怯夫之氣、方已蘇矣、」博浪之擧、世皆笑二其迂一、而劉項之心、未二必不下激二乎此一、」予在二江戸一、締二交列藩人士一、其知二予長人一也、則問二此二子之事一、噫寅二姑置爲、彼重輔特一輕卒耳、而憂國之念、猶能至二乎是一、其忠義之氣、豈不レ可レ稱乎、」世或謂、彼爲二寅二所下激、是由二好名一而然、蓋亦忌二人美一者之言、」今日之世、竊レ位貪レ祿、富貴揚々、自托二於無罪一、往々皆是、且彼而好レ名乎、所レ好之名、君子之名也、抑亦不レ優二夫頑鈍無レ志者一乎、雖レ然、千鈞之弩、不下爲二奚鼠一發上機、彼忠義士、輕發冒レ罪、卒以瘦死、是坡翁之所二以論二子房一、蓋可レ惜矣、而幸有二寅二者一、俱二其事一、筆二諸簡牘一、使二予輩庸懦之士、有下所二觀而感一焉、則重輔其亦可レ無レ恨、」抑予之於二重輔寅二一、生二乎聲音相聞之地一、而未二嘗相見一、鳥山生者、萬里隔レ地之人、而得二相識一、反即聽二二人之事一、蓋亦奇矣、今也重輔已死、頃聞鳥山生亦死、嗚呼二人者、不レ可二復見一、而寅二亦幽蟄、不レ獲レ見二外人一、則予於二此三人者一、殆爲二古人隔世思一、雖レ然、鳥山生既已得二一見一焉、如二寅二一、則有二清太玄瑞一、亦爲通二其消息一、則我無レ所レ憾、而重輔獨爲レ可レ悲矣、安政四年夏日、枇杷山人口羽通琦希魏書

○金子のゐるしよしゐ類所まて、過日身ほろりぬと聞て、その心おをひつゝ、あらまし、

歌ま堪ろね、各合掌して一章戔手向侍りぬ　以下十五首並係二野山獄囚徒及獄官一

惜マそよ雪耳折まし梅ゥ香戔　吉村善作

ゐゥ木さへ枝をまま々り春の雪　（この細字は松陰百年、以下作者の雅號の右肩にある氏名も亦然り）　高須氏華廼屋

吹東風耳計らに春ハ雪きえし　弘中勝之進久子

淡雪ハむゥかゐ笠のあつく哉　岡田一廸節洞

歸りぬ類魂のあゐさやタゥすミ　河野數馬琴鳴

花より愛手向乃水ハぬゐ乃ミあ家　粟屋與七花逸

咲むか戔捨てあの世へゆく雁ゥ　獄官源七谷遊

未來まてその香おく類や墓ハ梅　同政右衛門可考

水の淡と消て行衛やぬるミ川　同新右衛門政老

ゐむまさの彌增くまや春ハ雨　井上喜左衛門其風

春の雪消てのこる盤噂さ哉　志道又三郎市祐

經鳥やゆう厚蓼々うも手向こゑ　獄卒半藏豊浦

木魚ハおと耳つま類や春の雨　平川梅太郎烏友

陽炎の行衛やいつこ草ハ原　富永彌兵衛蘇芳

ち類とても香盤留めさり園ハ梅　松陰

○澁木松太郎ぬしハ予ゥをとよまハ友まハあらされと母、予友吉田うしゥ物語まるを聞に、尊　王攘夷、反始報本ハ志ゐる人ゐりと巻、去年ハ春江戸まて國々ハ友とゐと向島てふところまて伴ひし事有しゥ、其後國いへの爲耳志せし事の有々るゥ、そハ事終へにして却て罪まふ蹈りて、ひとやにゐん繫ゥれ々るま、今年睦月の中つゥゐ病まゐして身ほゥりぬと、いと憐むべ支事まなを有々る、かゝ類志ある人ハ欠ぬるこ巻いと殘り多きことなりゥし、予をとゝまを歌詞てふものは得ゐらされとも、おこの手向草

肥後藩士佐々淳二郎清堅

まをとてかく記し侍る、

心ある人は佐ちゐく村竹のう支布しの世そ頼をくゐき

○澁木松太郎ぬしおゥしゆる罪有とて、ひとやの中まをらゐれて有しゥ、何くまとゐつらひて、ゐとし正月の十一日ま身ほゥりぬと云おこせゐるを聞に、いとも〳〵くちおしさいをんゥゐあし、こゐひ弔ひいひはゥりハすとて、　同宮部鼎藏増實

心ゐハ深山お惜しをはけしきまゐたゥけて散ゐ花をしそ思ふ

おおしく、

木原閑五郎　鬼園

虚蟬のなたこのからハくちぬともそれ名盤世々まゝらさを傳へ舞

○追悼

水涸まて弘誓ハ船のゝゝ堂とを

（東京市久原房之助氏所藏本はこの草稿であらう、假名と漢字の違、假名字体の違、及二三假名の相違の外は讀み音も意味も全く同じいもの である）

○去年ハ々ふハ澁木生と同しく江戸より囚それて召下され、明木の驛まて別まを告しゝ、夫とりして余ハ此野山獄ニ繋ゝま、、生も揚屋てふ處に囚れて、互ニ音信さへ通を類事あらぬゝうへま、今年の睦月十餘り一日ま生ハ身罷りぬと聞しゝハ、其名殘いそんも更あり、實まや光陰の過るハ白駒の隙行ことく、寒風起り落葉を拂ふ折ニふまて、彌增去年ハ事を思ひつゝけゝるま、況して々ふハ生と別まを告し日あれハ、いとゝ感ま堪ゝらくして、發句脇をし、此道の宗匠なる五明莽の大人ニ請ひ、且盤此道ま志深支人ゝにも賴ミて歌仙行して手向しゝる、幽明路隔さまハ聲音こを通そさら免、思ふ誠の感せぬ理りの有ゑ支や、

入相まをゑおしを忍ぶ寒サゝか

折て手向類早咲の梅

注文の下し荷船も無夏ま來て

即花廼屋顯龍

松陰
全
龍陰

建添ふ藏もおかし白壁

雇それて月の土臼の挽仕舞

ゐむせ氣味よ支湯上りの肌

盛りまハゝら祢と菊の香を配り

南請さる山のおつゝを

蓑笠の揃ふ備の勇ましく

片寄て置くゐくの垂ゝす

紅染の醉さやうなり猿の顔

梅雨の晴間耳珍らしい月

味を宇治の新茶は格別ま

面白くミる俳偕の卷

世の中ハ事ハ時ミ變り勝

道幅廣支潰拔の跡

阿彌陀の渡りはいつま花盛り

隣り隔てま貰ふちおやもミ

冤魂慰草

花逸
陰芳
蘇洞
節
逸
龍
陰
逸
陰
逸
逸
全
全
全
全
全

養父入に手織の縞ゝ自慢して　谷遊
蒔繪は扨もさまゝ印籠　逸龍
づ（久原本）いつくても知まゝ旅籠は二百文　逸龍
波の中なる天ゝもし立　全逸
取る婿の白髪交りも勝手はく　全芳
思ひを紙まもこふ霜冴　全逸
やま壁の間ゝらもれて鶏（トマヲドリ）　芳逸
鼓太鼓まも亂舞もしまる　陰逸
燒餅まも姥の手元のせハしさハ　陰
若殿ハらも連て遠乘（の久原本）　逸
揚へ（久原本）研上ゝ劍のやうな月の晴　芳
芋栗柿も只中〳〵　逸
閑作る聲ハ最員の勝相撲　全
酒屋の株を弟まも遣る　逸
拜領といふて傳ハる陣羽織　全

竹ゝ箒にかこの塵取　獄卒民七
散し（久原本）散花ハ今も殊更嘉ハしを　錦舟
語り尽せぬ惜しむ春の日　節洞

○各詠

作るとも日陰まほそる雪佛　城木
手向火や猶光り添ふ夜の雪　豊浦
落葉ちる淋し支（き）路の思ひ哉　可孝（考の誤）
石文まも思増々り今朝の雪霜（久原本）　谷遊
飛ふ鴨の面影寒し夕間くれ　蘇芳
彼も手向添へて行のゝ寒念佛　琴鳴
おしまるゝ人の噂や霜の花　久子
舊ゝらぬ塚の哀や雪ゝ花　和暢
惜ても返らぬ松の時雨哉　花逸
枯蘆の嵐まもこし寒サ哉　陰龍
思ひ出せは袖の時雨と成まゝり　逸

○金子重輔ハ道ヨ志し深くて、近世四方ヒろミし等の我國ヨまもく〳〵來る事を愁ひておもへらく、彼國ヨりさり夷情をさくらんまハまゝしと、密ヨ其策をなまゝゝとも、事顯ヨ、因ハれと成て、終ヨ獄の中ヨ身はゝりをぬと聞くより、いと〳〵あハれヨ其志の程の慕もまて、

久保五郎左衛門　久成

異國ヨりさりもまてにわさり川ゐゝゆるしてゝ船出しつらん

○金子生は是迄同學の友まハゐら祢と母、松陰兄の物語りを聞奢ハいとゝ文武ヨ志深々れと、惜ゝゐ黄泉の旅におもむゝき々るを憐ミ〳〵て

岡田以伯　佳秋

聞度の耳まゐれや啼蛙

○追善野吟

こゝ呂屑け手向る水ハ泪きぬ先キ

吉村善作　五明莽主人

○繁之助は輕支身なれと、君を愛し國を憂ふる乃深支、早くもヒゝ心を得さり、是こ老々尓大ゐまとの男子なり鬼

富永彌兵衛　德

ゐれ名茂語きハ袖のぬるゝ哉ぬきしといもゝそれハ誰ゝ子そ

世良孫槌　利貞

○

誰ゝ世ヨ惜まさるへ支散れと猶匂ひ盤殘類梅のもつ花

○

泡雪と消まし人を佐ら尓まゝきえ返りても忍ふ々ふゝゐ

○

湊川討死可レ爲益荒男止思爾濡留我袂哉

三田尻　五十君久十郎　夷守

○澁木氏の身まか利ぬると聞て

右田　渡邊石見　敬滿

えみしらの國ヨ出さつ道かゐてとゐちゐ行そか涙しゝヒ々利

周防　鈴屋八幡宮祠官佐伯稜威雄　鞆彦

○

くもゐまとれもひしことハむなしくてこのうちゐみをは堂し都るゝ南

同西浦、松原嘉兵衛　延年

○

ちほゐそのなれるくに〳〵むけもせてもやく消ゐし身そあもれな類

宮市　尾古主計　重作

○

こゝ徐さし蹈ゝきゐこちをわさらんヨ任せぬものはあし原ヒの李

南都　東大寺候人上司主稅　重寛

○

雲とな利風ともなりてゐめ理ゝヒそら乎や魂のゆきの幣類ら舞

から船もをちかへるへきえふたぬしゝへらぬ人とゐに成ま遺舞　右田中山　阿曾沼作右衛門　敏郷

○

ま利〳〵し心のまとけやらてゐさゐる風ま露と散りゝり　右田　徳永恭平　信秀

○

さたゝつはきみゝこゝ他の常那ゝらとこ他ゝ羅こゝくやしゝ理者え　鈴木高鞆妻　子弦

○

武士ゝ思ひの堂々をはゝさゝ類ここ他やいゝゐくやしゝ理者舞　宮市　難波海四郎　津春

○

長ゝらは世のひゝ理とを成やせむゐゝらみしゝき人の堂まのを　宮市　鈴木武雄　鞆高

○

ゆつゝ尓は闕乎ゆるさぬくまく〳〵母おもひそるゝ尓天翅るら舞　長門　阿部秀伯　臣美

○

消しこそあな雄ゝし々ま玉鉾のこちのひゝりゝ末もゝ母さて　周防鹿野　彌益清九郎　芳光

○

在し世のいさほハ露ときえぬまときよたゝの名盤きえせ佐り々理

○

咲いてハ大和心やゐらゝまんわゝ木ゝゝ九らかまゝてま々理　宮市　高鞆男鈴木静枝　鞆直

○

君ゝさめいのちさへまもあゝ浪ゝきえて歸らぬ人をしそ思ふ　宮市　山崎十右衛門　訓重

○

あ那ゆゝし大和嶋根のちはめとを那るへき君盤露ときえまき　安藝　玉木和泉守　直幸

○

國のゝめお支てをさへまゝむ支遣んおをへゝあゝま大和ゐましひ　江戸　海上六郎　胤正

○

寒そ雜をいとゝ努梅の早咲もちるはとゝめぬ命なり々利　田坂四方藏　基保

○

世ゝ爲耳そはる命のいさゝしハきえてを跡まなゝ殘り々梨　山口　高橋丹波　實延

○

土むろま身盤朽ぬとも其魂のおもふ國まハ行てやあらなん　福原宇右衛門　章俊

○（前出同人の歌と同じであるから略す）　上司主税　寛重

○

上村彦兵衛　紀林

增荒雄か世耳(に)むゝるへき玉の緒のきれてもゝ歌き身と成ま々理

○澁木松太郎ぬし、ちゝきころえこしけふね

皇國まゝたり、いやあきことともけゐりけるこ

をうれたこいきゝ母りしゝ、終まゝけまとまよ

りて身まかりけるこゝを歎きて

御園

佐らてたまはゐけゝられハゝ歌しきをくまゝむくひてまかるきみハも

○

昌世

はかなくもちり果まけり梅けもあゝけ香ハ猶も世こまま殘して

○東へ旅立を類時亡友金子生をおもふとて（安政六年五月二十一日作）

矩方

箱根山けハしき道を越す時ハ過尔し友のあを思ハまん

（萩市松陰神社藏　校合濟㊞）

（附錄）

○

□目良之助（ムシ）　正俊

月ゐとる萩乃白露風すきてあたら玉をもくゝき々るゝ歌

○重輔金子氏乃病死を聞て

船木　有帆住（カ）　蘭哉（カ）

嗚呼西日籠乃うくひ壽(す)鳴き尔奈け

（東京市吉田茂子氏藏　校合濟㊞）

講孟餘話

（舊名講孟劄記）

解題并凡例

一、「講孟餘話」は孟子の各章讀後の隨感錄ともいふべき性質のものであるが、之に依り著者の人生觀、國家觀、經世策、讀書の態度等を窺ふことが出來る、松陰の著作中最も大いなるものであると共に、內容的にも主著の一つである、而も此の書の前半は野山獄に在つて獄友の爲めに、後半は幽室に於て父兄親戚の前で、孟子を講じた際に自らの感想や意見を附說した事項の手記であることを思へば、敎育敎化の見地からも不朽の價値をもつものと言はねばならぬ、

一、野山獄に於て吉村善作、河野數馬は俳諧、富永有隣は書道と唐詩選の講義、松陰は孟子や論語の講義を以て獄友の相互敎養、獄風の改善に協力した、勿論かゝる計畫はもと松陰一人の發意によつて樹てられたのである、「野山獄讀書記」(第七卷日記篇參照)によれば、松陰が孟子の講義を始めたのは安政二年四月十二日夜であつて、同年六月十日に全部を終つて居る、次いで同月十三日からは同じ孟子を獄友が輪講すること、なつてゐる、「講孟餘話」は大體此の輪講の行はれた日と同じ日附を以て次々と書きつけられてあるから、恐らく輪講の席上で附說したものであらう、さて獄中での執筆は十一月二十四日を以て萬章上篇を終つて居る、それから十二月十五日特恩により杉家の幽室に歸らしめられたが、その十七日には既に父兄親戚の前で萬章下篇の講義を始めて居る、かくて翌年六月十三日に最終講が爲され、本書はその十八日に稿を結んだのである、

一、本書の自筆本は萩市松陰神社にあるが、全五冊の内第三卷一冊が缺けて居る、表紙は漉引厚紙でその左側上方に「講孟劄記」、改名講孟餘話」と書いた短冊形白紙が貼つてある、本文は松陰常用の藍版四百字詰罫半紙二つ折に書かれ、漢文の箇處には殆んど全部句讀點を施し、返點はかなり多く、送り假名は稀に附けてある、和文の讀切も松陰か門人かが施した部分もある、松陰自らの校合を經たもので、所々に抹消訂正加筆がある、又來原良藏の批評を書いた紙片が數ヶ所に貼つてある、

一、本全集に於ては此の自筆本を原據としたが、缺本となつて居る第三卷は止むを得ず明治四年京都文求堂が「講孟劄記」と題して公刊した木版本に據つた、此の木版本は、他の卷に於て原本と對照した所によれば、相當嚴格に原本の文字を寫してゐて信頼するに足るやうである、文字はなるべく原本の通りに存したが、励・寸・浮・戔の如き略字は勵・時・義・得に直し、箚記を劄記と書いてあるが、之は異字であるから劄に改めた、欄外書は旨を記して本文中に挿入した、

一、なほ附錄に就いて一言しなくてはならぬ、萩市松陰神社には山縣太華が著はした「講孟劄記評語」が藏されてゐる、之は松陰の跋も關係文書も附けてあつて確實な資料である、然るに今回小倉市島田家で「講孟劄記評語全」なる一書を發見した、これには右松陰神社本の内容以外に太華の評語草稿、評語下、松陰の反評、默霖書撮抄などがある、唯寫本であるのが遺憾で一應は疑はざるを得なかつた、併し(一)藏書印が「久保久清文櫃之章」となつて居るが、この久保は松陰の外弟であり門下であること、(二)筆蹟は三人の手に成つて居るが、その一が久保の筆であること、(三)用紙の大部分が松陰常用、從つて又松下村塾常用の罫半紙なること、(四)文勢、思想が夫々松陰太華の他の著作のそれと一致するやうに思はれること、(五)反評中に松陰が最近讀んだと附記して引用してゐる書名、例へば「夢の代」「唐鑑」「國語」等は皆「野山獄讀書記」中のその頃に見出し得ること、(六)「野山獄讀書記」に安政三年十一月朔日了として「講孟劄記評語下一冊反評」とあるが、この反評は本書附錄第六に當ること、(七)島田家は長州吉田の舊家でその先代は幕末維新の志士とも交際があつたから恐らく確實なものとして祕藏せられたであらうことなどを理由として、この寫本は信頼してよいものと斷定したのである、本全集には松陰神社本を第一附錄とし、之に島田氏本にある松陰の行間書入を轉記した、第二附錄以下は島田氏本を採つたのであるが、編者は、讀書に見易からしめむが爲めにと思つて、便宜七目に分つて置いた、

（委員　玖村敏雄）

序

道則高矣、美矣、約也、近也、人徒見二其高且美一、以爲レ不レ可レ及、而不レ知二其約且近一其可レ親也、富貴貧賤、安樂艱難、千百變二乎前一、而我待レ之如レ一、居レ之如レ忘、豈非二約且近一乎、然天下之人方且淫二于富貴一、移二于貧賤一、耽二于安樂一、苦二于艱難一、以失二其素一、而不レ能二自拔一、宜乎其見レ道、以爲二高且美不レ可レ及也、孟子聖人之亞、其說レ道著明、使二人可レ親、世蓋無レ不レ讀、讀而得二于道一者、或鮮矣、何也、爲二富貴・貧賤・安樂・艱難・所レ累而然也、然富貴安樂順境也、貧賤艱難逆境也、境順者易レ忘、境逆者易レ勵、忘則失、勵則得、是人之常也、吾獲レ罪下レ獄、得二吉村五明・河野子忠・富永有隣三子一、相共讀レ書講レ道、往復益喜、曰、吾與二諸君一其境逆矣、可三以有二勵而得一也、遂抱二孟子書一、講究磨礱、欲三以求二其所レ謂道者一、司獄福川氏亦來會稱レ善、於レ是悠然而樂、莞然而笑、不三復知二圜牆之爲レ苦也、遂錄二其所レ得、號爲二講孟劄記一、夫孟子之說、固不レ待レ辨、然喜レ之不レ足、乃誦二之口一、誦レ之不レ足、乃筆二之紙一、亦情之所レ不レ能レ已、則劄記之作、其可レ廢哉、抑聞往年、獄中無レ政、酗酒使二氣喧豗紛爭絕無二人道一、今公即レ位、庶政更張、延及二獄中一、百弊日改、衆美竝興、蓋司獄亦與有レ力焉、今乃與二諸君一悠悠講レ學、以得レ樂二其幽囚一者、寧可レ不レ思レ所二以對揚一乎哉、安政乙卯秋日、二十一回藤寅書二諸野山獄北房第一舍一、（京本、この序は陶樂隱士靜斧の筆に成る）

講孟劄記目錄

卷之一

第一場　乙卯六月十三日……二六三
孟子序說　梁惠王上首章
第二場　十八日……二六四
梁惠王上首章　第二章　第三章
第三場　廿二日……二六七
第四章　第五章　第六章
第四場　廿七日……二七〇
第七章
第五場　七月二日……二七三
梁惠王下首章　第二章　第三章
第六場　六日……二七五
第四章　第五章　第六章

第七場　十七日……二七八
第七章　第八章　第九章　第十章　第十一章
第八九場　十九日……二八〇
第十二章　第十三章　第十四章　第十五章　第十六章
卷之二
第九場　廿二日……二八五
公孫丑上首章
第十場　廿六日……二八七
第二章
第十一場　廿九日……二八九
第三章　第四章　第五章　第六章　第七章　第八章　第九章
第十二場　八月三日……二九四
公孫丑下首章　第二章　第三章　第四章
第十三場　六日……二九六
第五章　第六章　第七章　第八章　第九章　第十章　第十一章
第十四場　上　九日……三〇〇
第十二章　第十三章　第十四章
第十四場　下　同日……三〇四
滕文公上首章　第二章
第十五場　十二日……三〇六
第三章
第十六場　十六日……三〇七
第四章　第五章
第十七場　八月廿一日……三一四
滕文公下首章　第二章　第三章　第四章　第五章　第六章
第十八場　廿六日……三一八
第七章　第八章　第九章　第十章
卷之三上
第十九場　廿九日……三二三
離婁上首章　第二章　第三章　第四章　第五章　第六章　第七章

第二十場　九月三日……三三七
第八章　第九章　第十章　第十一章　第十二章　第十三章　第十四章　第十五章　第十六章
第十七章　第十八章
第二十一場　上　七日……三三三
第十九章　第二十章　第二十一章　第二十二章　第二十三章　第二十四章　第二十五章
第二十六章　第二十七章　第二十八章
第二十一場　下　同日……三三八
離婁下首章　第二章　第三章
十一月十一日……三三九
第四章　第五章　第六章　第七章　第八章
十一月十二日……三四一
第九章　第十章　第十一章　第十二章　第十三章
十一月十三日……三四三
第十四章　第十五章　第十六章　第十七章　第十八章
十一月十四日……三四四
第十九章　第二十章　第二十一章　第二十二章　第二十三章
十一月十七日……三四七
第二十四章　第二十五章　第二十六章　第二十七章　第二十八章
十一月十八日……三四九
第二十九章　第三十章　第三十一章　第三十二章　第三十三章
十一月二十日……三五三

卷之三下

萬章上首章　第二章
十一月二十一日……三五五
第三章　第四章
十一月二十二日……三五七
第五章　第六章
十一月二十四日……三五八
第七章　第八章　第九章
十二月二十四日……三六一

萬章下首章　第二章　第三章　第四章　第五章　第六章　第七章　第八章　末章

卷之四上

三月廿一日……三七三
告子上篇首章　第二章　第三章
三月廿二日……三七五
第四章　第五章　第六章
三月廿三日……三七七
第七章　第八章
三月廿五日……三八一
第九章　第十一章（衍字）
三月廿六日……三八四
（第十一章）第十二章　第十三章　第十四章　第十五章
三月廿八日……三八七
第十六章　第十七章　第十八章　第十九章　第二十章
四月三日……三九一
告子下篇首章　第二章　第三章　第四章　第五章
四月七日……三九六
第六章　第七章
四月十五日……四〇一
第八章　第九章　第十章　第十一章　第十二章　第十三章　第十四章　第十五章　末章

卷之四中

五月十四夜……四一三
盡心上首章　第二章　第三章　第四章　第五章　第六章　第七章
五月十七夜……四一一
第八章　第九章　第十章　第十一章　第十二章　第十三章　第十四章　第十五章
五月二十夜……四一七
第十六章　第十七章　第十八章　第十九章　第二十章　第二十一章　第二十二章
五月二十三夜……四二三
第二十三章　第二十四章　第二十五章　第二十六章　第二十七章　第二十八章　第二十九章
第三十章　第三十一章

五月廿六夜……四二八
第三十二章　第三十三章　第三十四章　第三十五章　第三十六章　第三十七章　第三十八章
第三十九章
五月二十九夜……四四二
第四十章　第四十一章　第四十二章　第四十三章　第四十四章　第四十五章　末章

卷之四下

六月初四夜……四五三
尽心下首章　第二章　第三章　第四章　第五章　第六章　第七章　第八章　第九章　第十章
第十一章　第十二章　第十三章　第十四章　第十五章
六月初七夜……四六三
第十六章　第十七章　第十八章　第十九章　第二十章　第廿一章　第廿二章　第廿三章
第廿四章　第廿五章　第廿六章　第廿七章
六月十夜……四七二
第廿八章　第廿九章　第卅章　第卅一章　第卅二章　第卅三章　第卅四章　第卅五章　第卅六章
六月仲三夜……四八一
第三十七章　第三十八章
讀保建天記一條……四八九
跋……四九一
土屋松如跋……四九一
附錄（山縣太華の評語、松陰の反評）……四九三

講孟劄記 卷之一

第一場　乙卯六月十三日

孟子序說

孟軻騶人也、游二事齊宣王梁惠王一、

経書ヲ読ムノ第一義ハ、聖賢ニ阿チラヌヿ要ナリ、若少シニテモ阿ル所アレハ、道明ナラズ、学フ(テ)益ナクシ害アリ、孔孟生国ヲ離レテ、他国ニ事ヘ給フヿ(マヌ)済ムヿナリ、(凡ソ)君ト父トハ其義一ナリ、我君ヲ愚ナリ昏ナリトシテ、生国ヲ去テ他ニ往キ、君ヲ求ルハ、我父ヲ頑愚トシテ家ヲ出テ隣家ノ翁ヲ父トスルニ斉シ、孔孟此義ヲ失ヒ給フヿ、如何ニモ辨スヘキ様ナシ、或曰孔孟ノ道大ナリ、兼テ天下ヲ善クセント欲ス、何ゾ自国ヲ必ズトセン、且明君賢主ヲ得、我道ヲ行フ時ハ、天下共ニ其沢ヲ蒙ルベケレバ、我生国モ固ヨリ其外ニ在ラズ、

曰ク、天下ヲ善セント欲ゾ我国ヲ去ルハ、国ヲ治メント欲ゾ身ヲ脩メサルト同シ、修身斉家治国平天下ハ大学ノ序、決ゾ乱ルベキニ非ズ、若シ身家ヲ捨テ国天下ヲ治平ストモ管晏ノスル所ニシテ、詭遇シテ禽ヲ獲ト云者ナリ、世ノ君ニ事ルヿヲ論スル者謂ラク功業立サレバ国家ニ益ナシト、是大ニ誤ル、道ヲ明ニシテ功ヲ計ラズ、義ヲ正シテ利ヲ計ラズトコソ云ヘ、君ニ事ヘテ遇ハサル時ハ、諫死スルモ可ナリ、幽囚スルモ可ナリ、饑餓スルモ可ル、是等ノ事ニ遇ヘハ其身ハ功業モ名誉モ無キ如クナレ𪜈、人臣ノ道ヲ失ワズ、永ク後世ノ模範トナリ、必ズ其風ヲ観感シテ

興起スル者アリ、遂ニハ其国風一定シテ、賢愚昔賤ナヘテ節義ヲ崇尚スル如クナルナリ、然レハ其身ニ於テ功業名譽ナキ如クナレ𪜈、千百歳ヘカケテ其忠タル、豈擧テ数フケンヤ、是ヲ大忠ト云ナリ、然𪜈此論是レ国体上ヨリ出テ來ル所ナリ、漢土ニ在テハ君道自ラ別ナリ、大氐聰明睿智億兆ノ上ニ傑出スル者其君長トナルヲ故ニ堯舜ハ其位ヲ他人ニ讓リ、湯武ハ其主ヲ放伐スレ𪜈聖人ニ害ナシトス、我邦ハ上　天朝ヨリ下列藩ニ至ル迄、千万世ヽ襲シテ絶サルヿ中ヽ漢土ナトノ比スヘキニ非ズ、故ニ漢土ノ臣ハ縱ハ半季渡リノ奴婢ノ如シ、其主ノ善悪ヲ擇ンテ轉移スルヿ固其所ナリ、我邦ノ臣ハ譜第ノ臣ナレハ、主人ト死生休戚ヲ同フシ、死ニ至ルト雖𪜈主ヲ棄テ去ルヘキノ道絶テナシ、嗚呼我父母ハ何国ノ人ゾ、我衣食ハ何国ノ物ゾ、書ヲ讀、道ヲ知ル、亦誰ガ恩ゾ、今少シク主ニ遇ハザルヲ以テ、忽然トシテ是ヲ去ル、人心ニ於テ如何ゾヤ、我レ孔孟ヲ起シテ、與ニ此義ヲ論セント欲ス、

聞ク近世海外ノ諸蛮、各其賢智ヲ推擧シ、其政治ヲ革新シ、駸ヽ然トソ　上國ヲ凌侮スルノ勢アリ、我何ヲ以テカ是ヲ制セン、他ナシ、前ニ論スル所ノ我国体ノ外国ト異ナル所以ノ大義ヲ明ニシ、闔国ノ人ハ闔国ノ爲メニ死シ、闔藩ノ人ハ闔藩ノ爲メニ死シ、臣ハ君ノ爲メニ死シ、子ハ父ノ爲メニ死スルノ志確乎タラハ、何ゾ諸蛮ヲ畏レンヤ、願クハ諸君ト玆ニ從事セン、

第二場　六月十八日

梁惠王上

首章

王何必曰レ利、亦有二仁義一而已矣、

案スルニ魏ノ武侯二年安邑ニ築ク、其子惠王三十一年、秦商君ヲ用ヒ、東ニ侵シ河水ニ至ル、安邑ハ秦ニ近キ故、徙テ大梁ニ治ス、三十五年礼ヲ卑フシ幣ヲ厚フシ、以テ賢者ヲ招ク、而シテ孟子梁ニ至ル、魏ノ時事大畧斯ノ如シ、此時惠王首トシテ国ヲ利スルヿヲ問フ、亦志アリト云ヘシ、而シテ孟子是ヲ挫ク者ハ何ソヤ、且功効ヲ主ト蓋シ仁義ハ道理ノナスヘキ所ナリ、利ハ功效ノ期スヘキ所ナリ、道理ヲ主トスレハ功效ハ期セズシテ自ラ至ル、功效ヲ主トスレハ道理ヲ失フニ至ルヿ少カラズ、且功效ヲ主トスル者ハ、事皆苟且ニシテ成遂スル所アルヿ少シ、假令少シク成遂スル所アレ𪜈永久ヲ保スルニ足ラズ、永久ノ良圖ヲ捨テ目前ノ近效ニ從フ、其害言フニ堪ベカラズ、苟モ能ク一向ニ義理ノ當然ヲ求メ、終始ナク作輟ナキ時ハ、又何ゾ事ノ成サルヲ憂ヘン、孟子惠王ノ利心ヲ挫クモ亦是ガ爲ナリ、是諸葛武侯ノ所謂鞠躬尽レ力死而後已、至二成敗利鈍一則非二臣之明所一能逆覩一也ノ義ナリ、是レ道学ノ根元、先賢ノ論スル所備レリ、今必シモ贅セズ、今且諸君ト獄中ニ在テ学ヲ講スルノ意ヲ論ゼン、俗情ヲ以テ論スル時ハ、今已ニ囚奴ト成ル、復タ人界ニ接シ天日ヲ拜スルノ望アルヿナシ、講学切劘シテ成就スル所アリト雖𪜈何ノ功效カアラント云ハヽ、是レ所レ謂利ノ說ナリ、仁義ノ說ニ至テハ然ラズ、人心ノ固有スル所事理ノ當然ナル所、一トシテ爲サル所ナシ、人ト生レテ人ノ道ヲ知ラズ、臣ト生レテ臣ノ道ヲ知ラズ、子ト生レテ子ノ道ヲ知ラズ、士ト生レテ士ノ道ヲ知ラズ、豈恥ツヘキノ至リナラズ、若シ是ヲ恥ルノ心アラバ、書ヲ読道ヲ学ブノ外術アルヿナシ、已ニ其数箇ノ道ヲ知ルニ至ラハ、我心ニ於テ豈悅バシカラサランヤ、朝聞レ道夕死可矣ト云ハ是ナリ、亦何ゾ更ニ功效ヲ論スルニ足

ンヤ、諸君若シ茲ニ志アラハ、初テ孟子ノ徒タルヿヲ得ン、抑近世文教日ニ隆盛、士大夫書ヲ挾ミ師ヲ求メ、兀々孜々タラサルハナシ、其風懿美ト云ベシ、吾輩、獄中ノ賤囚、何ゾ喙ヲ其間ニ容ルヿヲ得ンヤ、然共今ノ士大夫、学ヲ勤ムル者、若其志ヲ論セバ、名ヲ得ンカ爲ト、官ヲ得ンカ爲トニ過ズ、然レハ功效ヲ主トスル者ニシテ、殆ント義理ヲ主トスル者ト異ナリ、可レ不レ思哉、嗚呼、世ニ読書ノ人多クシテ、眞ノ学者ナキ者ハ、学ヲ爲スノ初、其志已ニ誤レハナリ、精ヲ勵スノ主多クシテ、眞ノ明主ナキ者ハ、治ヲ求ムルノ初、其志已ニ誤レハナリ、眞学者眞明主出ツルニ非レハ、僅ニ順境ヲ語ルヘクシテ、未タ逆境ヲ語ルヘカラズ、吾輩逆境ノ人、乃チ善ク逆境ヲ說クヿヲ得ルノミ

癸丑（嘉永六年）、甲寅（安政元年）曩魯ノ変、皇国ノ大体ヲ屈シテ陋夷ノ小醜ニ從フニ至ル者ハ何ソヤ、朝野ノ論、戰ノ必勝ナク、轉シテ変故ヲ滋出センヿヲ恐ルヽニ過ギズ、是亦義理ヲ捨テヽ、功效ヲ論スルノ弊、與共ニ逆境ヲ語ルヘカラサル者ニ非ズヤ、世道名教ニ志アル者、再思セヨ三思セヨ、

第二章

賢者而後樂レ此、不賢者雖レ有レ此不レ樂也、

此章ニ於テ樂ト云フヿヲ発明スベシ、文王ノ樂ハ臺池鳥獸ヲ樂ムニ非ズ、民ノ樂ムヲ樂ムナリ、民ノ樂モ亦臺池鳥獸ヲ樂ムニ非ズ、乃チ文王ノ樂ムヲ樂ムナリ、君民上下互ニ其樂ヲ樂ム、是ヲ偕ニ樂ムト云、桀ノ樂ミハ是ニ反ス、其樂ムヿ臺池鳥獸ニアリテ、民ト偕ニセズ、故ニ獨樂ト云、今人酒ヲ樂ム者アリ、色ヲ樂ム者アリ、奕ヲ樂ム者アリ、茶ヲ樂ム者アリ、其他百千ノ樂ム所枚擧ニ暇アラズ、是皆桀ノ徒ナリ、苟モ文王ノ樂ヲ樂ントナラハ、父子相樂ミ、君臣相樂ミ、兄弟親族朋友鄕黨相樂ムノ境ヲ自得セハ、豈樂カラズヤ、然ル今諸君ト獄ニ繫ガレ、此樂ミ萬ト望ミナシ、但相共ニ斯道ヲ研究シ、縲紲牢獄何物タルヲ知ラサルニ至ラバ、豈樂ノ樂ニ非ズヤ、願クハ諸君ト偕ニ是ヲ樂マン、

第三章

穀與ニ魚鼈一不レ可ニ勝食一、材木不レ可ニ勝用一、　七十者衣レ帛食レ肉、黎民不レ飢不レ寒、

九政ハ戸口ヲ增スヲ主トス、米穀魚鼈材木ハ乃チ戸口ニ奉スル所以ノ物ナリ、提封百里ト云ヒ、七十里ト云、同シト雖ヒ、戸口米穀魚鼈材木ニ至テハ、相倍蓰伍什スル者アリ、土地ハ廣メントスルモ得ベカラズ、故ニ土地上ニ生スル者ヲ殷盛ニスルヿ甚便トス、然ルニ昇平日久シキ時ハ戸口ハ自ラ增スト雖ヒ、米穀諸物却テ大ニ減耗シ、國力從テ困屈シ、其甚シキニ至テハ、遂ニ国中ノ人民衆多ナルヲ憂ヒ、是ヲ養フヿ能ハサルニ至ル、豈一大怪異ノ事ニ非ズヤ、帛ヲ衣肉ヲ食ヒ飢ヘズ寒ヘズ等ノ事ニ至テハ、亦自ラ當今ニ切実ナル措置幾多モアルベシ、其說甚タ長シ、今敢テ贅セズ、

第四場　六月廿二日

第四章

民父母　再案スルニ上下一心ナルヲ以テ民父母ト云ヿモアリ、下篇第七章ノ民父母ノ如キ是ナリ、大学ノ民父母モ亦此義ナリ、

民父母ノ義蓋シ康誥ニ所レ謂如レ保ニ赤子一ニ原ツク、大学ニモ是ヲ謂フ、孟子ニ至リ益ミ是ヲ謂フ、蓋シ父母ノ子ニ

於ケル、已ニ是ヲ愛養シ、又是ヲ教訓ス、是ニ於テ人ノ父母タルニ負カズ、苟クモ養テ教ヘズ、教ヘテ養ハズ、父母ノ道ニ於テ何トカ謂ン、君道モ亦然リ、其要已ニ第三章及ビ第七章ニ説明スル如シ、下章仁政王政等ト云者、其義亦皆是ニ準ス、又論語庶富教ト併セ観ルベシ、

第五章

施二仁政於民一、可レ使二制レ挺以撻二秦楚之堅甲利兵一矣、　勿レ疑、

魏ノ国タルヤ、西ハ秦ニ壓サレ、南ハ楚ニ逼ラレ、東ハ斉ニ窺ハル、其自立ノ難キ、言ヲ待タズ、魏ノ爲メニ策スル者、宜シク兵械ヲ修メ、糧餉ヲ儲ヘ、卒伍ヲ練リ將領ヲ撰フナト云ベシ、然ルニ孟子ハ則然ラズ、唯仁政ト言ノミ、挺ヲ制シ秦楚ヲ撻ツト云フノミ、宜ナルカナ當時トスルヿ、然ル是大ニ事情ニ切ナル者アリ、深察セサルノミ、吾試ニ孟子ノ策ノ本末ヲ論セン、仁政ヲ民ニ施シ、刑罰ヲ省キ、税歛ヲ薄フスル、是其第一下手ノ處ニシテ、夫ヨリ封疆ノ諸城ヲ撤シ、兵ハ悉ク農ニ帰シ、天下ノ費、兵ヨリ甚シキハナシ、兵ヲ省カズンハ何ヲ以テ税歛ヲ薄センヤ、政ノ民ニ便ナル者ハ、難易ヲ論セズ、必ズ擧行シ、士ノ民ヲ治ムルニ堪ユル者ハ、遠近親疎ヲ論セズ、必ズ擢用シ、務メテ民ト休息シ、民ヲシテ我ヲ信戴シテ休サラシム、若シ一旦三国兵ヲ以テ來侵スルヿアラハ、大ニ国中ニ令シテ云ク、我方ニ斯民ヲ愛育セント欲ス、如何セン隣国ノ逼迫トナリ、却テ斯民ヲ苦惱セシムルニ至ル、哀ムニ堪ヘズ、民等意ニ任セテ出降リ其性命ヲ全フスベシ、我已ニ此国ニ主タリ、一死社稷ノ爲ニスルアルノミ、敢テ寸歩ヲ退避セズト、果シテ斯ノ如クンハ、四方忠義ノ士、豈感慨シテ興起セサランヤ、誠ニ斯ノ如クナレハ、誰カ其国ヲ奪フヿヲ得ンヤ、況ヤ此時秦楚斉ノ諸国国富ミ兵強ク將能ナリト雖モ、原ト民ヲ安スルヲ以テ心トスル者アルヿナケレハ、数月ナラズシテ潰走スルコト必セリ、且燕斉ノ事ヲ以テ是ヲ證セン、燕王噲国ヲ其相子之ニ讓テ国大ニ乱ル、斉ノ宣王是ヲ撃ツ、燕士卒戰ハズ、城門閉チズ、五旬ニシテ是ヲ擧ク、其後二年燕人太子平ヲ立テ王トシ、其国ヲ復ス、是ヲ昭王トス、昭王既ニ位ニ即キ、身ヲ卑フシ幣ヲ厚フシ賢者ヲ招ク、遂ニ秦楚三晋ト謀ヲ合セテ斉ヲ伐是ヲ敗リ、七十餘城皆下ル、斉城ノ下ラサル者聊莒即墨ノミ、餘ハ皆燕ニ屬ス、斉ノ湣王出走ス、田單乃チ即墨ヲ以テ大ニ燕軍ヲ敗リ、七十餘城ヲ復シ、襄王ヲ莒ニ迎ヘテ斉国旧ニ復ス、夫レ燕噲斉湣ハ昏愚ノ極ナル者ナリ、仁政ヲ民ニ施スヿ絶テ無シ、然モ昭王襄王ニ至リ、能ク国ヲ復シ讎ヲ報スルヿヲ得ル者ハ他ナシ、斉燕皆魏然タル大国ニシテ、而モ祖先以來国ヲ有スルノ日久シ、民心ヲ得ルヿ深シ、故ニ一旦破潰ストモ雖モ遂ニ滅絶スルヿ能ハズ、況ヤ之ニ加フルニ仁政ヲ以テスル者、武備ヲ設ケズト雖モ孰カ之ヲ取ルヿヲ得ンヤ、且兵畧ヲ以テ是ヲ論スルニ、屈伸ノ利ニ通スルニ非レハ奇勝ヲ制スルヿ能ハズ、封疆ヲ守ルニ城砦ヲ以テシ、重兵ヲ置テ之ニ鎮スルハ、徒ニ伸ヲ知リテ屈ヲ以テ伸トスルヿヲ知ラサルト云ベシ、敵兵ノ來ル封疆禦カズ、郊野戰ハサレバ敵初メヤ必ズ疑テ敢テ進マス、我靜ニシテ動カズ、是ヲ屈トス、久シテ敵必ズ侮テ進ム、我尚靜ニシテ動カズ、是ヲ屈トス、敵進テ戰フヿヲ得ズ、退テ食ヲ得ル所ナシ、必ズ四出侵掠ス、是ニ於テ我国ノ民心益〻服セズ、敢テ敵ノ用トナランヤ、斯ノ如キヿ経年、韓白ノ將ト雖モ何ノ術ヲカ施サン、潰ヘスシテ何ヲカ待タン、況ヤ闔国ノ義士民、期セスシテ來援スル者雲霞ノ如キヿ疑ナシ、是ニ於テ始テ大ニ一伸シ、永ク隣寇ヲ懲スルニ足ル、然ラスンバ封疆ノ攻守、郊野ノ戰爭、一勝一負何ソ数ルニ足ンヤ、然レモ此策是大決断大堅忍ノ人ニ非レハ必ズ遂ルヿ

能ハズ、若初メ少シク是ヲ行フニ意アリテ、半途ニシテ又廃スル時ハ、其害殆ント言ニ堪ユベカラズ、故ニ疑フ勿レヲ以テ是ヲ終フ、勿レ疑ノ義功利者流ノ知ル所ニ非ス、故余梁王此策ヲ用ユル能ハサルヲ惜マズ、切ニ今人ノ用ヒサルヲ惜ム、併セテ後人ノ用ヒンコトヲ望ムナリ、其詳獄舎問答ニ論ズ願クハ就テ見給ヘ、

第六章

孟子見ニ梁襄王一、卒然問曰、天下悪乎定、

梁ノ襄王ノ暗愚固ヨリ論ヲ待タズ、但其尤モ暗愚ヲ見ルベキ者果シテ何レニアリヤ、曰ク天下悪乎定ノ一句ニアリ、此時梁国四方難多シ、已ニ前章ニ云カ如シ、然ルニ襄王一モ憂勤惕厲ノ色アルコトナシ、其天下悪乎定ト云ハ世上話ナリ、カヽル旧別(タワケ)者安ンゾ與ニ語ルニ足ラン、蓋シ此章ヲ擧テ孟子梁ヲ去ル所以ヲ示スナリ、抑有志ノ人言語自ラ別ナリ、心身家国切実ノ事務ヲ以テ世上話トナス者、取ルニ足ル者有ルコトナシ、是人ヲ知ルノ眞訣ナリ、然モ是ヲ以テ人ヲ知ルノ訣トスルモ亦世上話ノ類ノミ、宜シク親切反省スベシ、辞ヲ修メ誠ヲ立ル是レ君子ノ学ナリ、

第四場　六月廿七日

第七章

無ニ恒産一而有ニ恒心一者惟士爲レ能、

此章明白雄偉、読者自ラ其旨ヲ了シ、且興起スルコトヲ知ラサルハナシ、中間、保レ民而王、仁術、百姓之不レ見レ保、爲レ不レ用レ恩焉、不レ爲者與ニ不レ能者一之形、善推ニ其所レ爲、心爲レ甚、反ニ其本一焉、有ニ仁人在レ位、罔レ民而可レ爲也、制ニ民之産一等ノ義皆深ク味テ自得スベシ、今必シモ呶々セズ、但吾徒心身上ニ於テ猛省スベキコト、国家政治上ニ於テ極論スヘキコトアリ、吾豈默止スベケンヤ、何ヲカ政治上ニ於テ極論スヘキト云、曰ク、使下天下仕者皆欲レ立ニ於王之朝一以下五条是ナリ、是レ孟子政ヲ発シ仁ヲ施スノ效驗ヲ説クナリ、方今　君公賢明相臣勤厲庶事擧ケサル者ナシ、古ノ治国ト雖モ以テ尚フルコトナシ、而メ未タ五条ノ效驗ヲ見サル者ハ他ナシ、民ヲ恵ムノ美声アリト雖モ民ニ及フノ実恵ナシ、故ニ耕者商賈行旅ノ欲スル所未タ茲ニ至ラサルノミ、故ニ余常ニ民産ヲ制シ、鰥寡(孤)孤独ヲ先ニシ、救レ貧恤レ病育レ幼ノ政ヲ興シ、庠序学校ノ教ヲ謹ム等ノ事ニ於テ、最モ緩ミタリ、是ヲ政ノ先務トシテ、更ニ極論スベキハ、仕者、疾ニ其君一者、ノ欲スル所ナリ、方今當路ノ人ヲ見ルニ、大氏規模狭隘ニシテ人ヲ容ルヽノ量ナシ、故ニ才学伎能ノ士アリト雖モ、藩内ノ人ニ非サレハ断シテ延見セズ、況ヤ敢テ草廬ヲ顧ミ傲睨逡ヲ捫スルノ談ヲ聞ンヤ、故ニ天下ノ仕者吾朝ニ立ントス欲ルアリト雖モ、遂ニ其入ランコトヲ欲シテ門戸ヲ閉ルカ如キノミ、且艱難憂懼国トシテ是ナキハナシ、或ハ国主徳ヲ失ヒ、奸臣路ニ當ル如キ、是ガ忠臣義士タル者、日夜感慨悲憤セサルハナシ、吾苟モ自ラ治メ餘リアル時ハ、宜シク殷湯ノ葛伯ニ於ル如ク、他国ノ非義無道ハ且諭シ且誡シメ、奸臣害ヲナス如キハ爲メニ是ヲ誅除シ、務メテ其国忠臣義士ノ憂鬱ヲ伸シムベシ、吾常ニ謂ラク、今相臣天下ヲ兼善スルノ誠志、宇内ヲ包擧スルノ宏量アリテ、先、懐ヲ開キ天下ノ士ヲ萩下ニ招集シ、技藝アル者才能アル者学識アル者、悉ク皆收羅セハ、三五年ヲ出スシテ、萩下ノ人才天下比ナキニ至ラン、加之他国ノ非義無道ヲ諭誡シ、忠臣義士ノ憂鬱ヲ伸ヘシメハ、四方孰カ吾藩ヲ仰望セサランヤ、於レ是列藩ト心ヲ協ヘ、幕府ヲ尊崇シ、上ハ　天朝ニ奉事シ、

下ハ封疆ヲ守リ、内ハ萬民ヲ愛養シ、外ハ夷狄ヲ威服セシメハ、其偉功盛烈孰カ是ニ如ンヤ、堂ミタル長防赫ミタル祖業、上明君相アリ下賢士才臣アリ、而シテ此事爲スヘカラズト云者アラバ、吾則曰ク、非レ不レ能也、不レ爲也、一羽ヲ擧、輿薪ヲ見、枝ヲ折ルノ類ナリ、然レトモ是レ事体重大囚奴ノ云ミスヘキニ非ズ、請フ心身上ニ於テ猛省スヘキ者ヲ說ン、無二恒産一而有二恒心一者、惟士爲レ能ト、此一句ニテ士道ヲ悟ルベシ、諺ニ云、武士ハ食ヲド高楊枝ト又此意ナリ、然トモ是レ武士ヘノ教ト云ニハ非ズ、武士ノ有様ナリ、武士ト云者ハ、飢テモ寒テモ、吾ガ持前ノ心懸ヲ失ワヌ程ノ事ハ申マテモナキコトニテ、教ト云ニハ足ラヌコトナリ、特ニ 本邦ニテハ武義ヲ以テ本トシ、中世以來武門武士ト唱ヘ、專ラ武道武義ヲ勵ムコトナレバ、是程ノ事ハ三歳ノ小兒モ辨ヘ知ルコトナルヘケレハ、今更教ト云ニ及バヌコトナリ、但シ吾徒原ト是レ士藉ヲ汚スト雖トモ、其士道ニ合セザルヲ以テ、今黥辱セラレテ囚奴トナリ、復タ士林ニ齒スルコトヲ得サルニ至ル、然レトモ世ノ眞ノ武士ヨリ吾徒ヲ見ハ、復タ士道アルコトナシトセンモ當然ナリ、然レトモ汝ハ汝タリ我ハ我タリ、人コソ如何トモ謂ヘ、吾願クハ諸君ト志ヲ勵マシ、士道ヲ講究シ、恒心ヲ錬磨シ、其武道武義ヲシテ武門武士ノ名ニ負クコトナカラシメハ、滅死スト雖トモ万ミ遺憾アルコトナシ、豈愉快ノ甚シキニ非スヤ、是所レ謂心身上ニ於テ猛省スヘキ者ナリ、此事實ニ吾一心身上ニアルコトナレハ、人ノ力ヲ借ラズ、人ノ財ヲ費スシテ、自在ニ成シ得ヘキコトナリ、若得スト云者アラハ、亦是レ非レ不レ能也、不レ爲也、一羽ヲ擧、輿薪ヲ見、枝ヲ折ルノ類ナリ、知ラズ、諸君此說ヲ以テ是トセンカ、非トセンカ、

第五場　七月二日

梁惠王下篇

第一章

今之樂由二古之樂一也、　臣請爲レ王言レ樂、

或疑フ今之樂由二古之樂一也トイヘハ、孔子ノ樂則韶舞ト云ヒ、放二鄭声一ト云、皆非カ、且臣請爲レ王言レ樂ト云テ、鼓樂ノ事ノミナラズ、田獵ノ事ニモ及フハ何ソヤ、荅曰、今之樂由二古之樂一也ト云ハ、大區別ヲ云ヘ、大區別トハ民ト樂ヲ同フスルト樂ヲ同フセサルトノ區別ナリ、故ニ民ト樂ヲ同フスル時ハ韶濩ニテモ鄭衛ニテモ皆可ナリ、樂ヲ同フセサル時ハ韶護ニテモ鄭衛ニテモ皆不可ナリト云意ニテ、此章ハ樂ノ善悪ハ姑ク置テ、樂ヲ同フスルト同フセサルトノ善悪ヲ區別スルナリ、若シ孟子ヲシテ細カニ樂ノ善悪ヲ論セシメハ、固亦孔子ノ論ノ如キノミ、然トモ其実ハ樂ハ樂ナリ、和樂ヲ本トス、故ニ爲レ王言レ樂ト云モ樂ノ本ヲ論スルナリ、鼓樂ニモセヨ、田獵ニモセヨ、民心、上ノスル所ヲ樂ムニテコソ樂ノ本ナレ、乃チ上篇第二章ノ文王麋鹿魚鼈ノ如キ皆眞ノ樂ト云ヘシ、此意ヲ知テ此章ヲ読ム時ハ何ノ疑カアラン、今是カ爲メニ一ツノ切當ナル譬喩ヲ得タリ、學問ノ術固ヨリ端緒多シ、訓詁ノ学アリ、詞章ノ学アリ、考據ノ学アリ、老佛ノ学アリ、是ヲ皆曲学トス、樂ニ世俗ノ樂アルカ如シ、吾党ノ志トスル義理經濟ノ正学ト異ナリ、義理經濟ノ学ハ譬ハ古ノ樂ノ如シ、故ニ樂ノ善悪ヲ論セハ、古樂ヲ貴テ俗樂ヲ賤シメ、学ノ善悪ヲ論セハ、正学ヲ崇ンテ曲学ヲ排スルハ固リナリ、然トモ今茲ニ一人ナリ、眞ニ志ヲ立テ己ヲ益シ人ニ益セントノ心ニテ、偶々正學知ラズ、曲學ヲ主トスル者アラバ、豈一概ニ是ヲ非トスルヲ得ンヤ、又其学フ所正学ニ似タレトモ、

其志却テ名ノ爲メニシ利ノ爲ニスル者ナラハ、亦豈一概ニ是ヲ是トスルヲ得ンヤ、然レハ学ヲ言ハ志ヲ主トス、其曲ト正トニ至テハ第二義ニ落ルナリ、是孟子古樂俗樂ノ説ナリ、今ヤ文教興隆、正学世ニ明ナリ、士孔孟ノ言ニ非レハ口ニ称セズ、五尺ノ童子モ管晏ヲ言フヿヲ耻ツ、吾諸君ト此世ニ生レ、正宝ニ從事スルヿヲ得、実ニ大幸ト云ベシ、然ルモ志ヲ立ルヿ眞ナラサレハ、名ハ正學ナレモ実ハ曲学ニモ劣ルヘシ、事旧タレモ、子トシテハ孝ニ死シ、臣トシテハ忠ニ死シ、仰テハ　皇國ノ大恩ニ報シ、俯シテハ一身ノ職分ヲ尽サント、日夜ニ志ヲ勵マシテ学ヲ勤メハ、其正学タルニ負カズト云ヘシ、孟子嘗テ云ク、五穀モ熟セサレハ荑稗ニ如カズト、思ハサルベケンヤ、抑志サヘ眞ナレハ曲学ニテモ一概ニ非トスベカラズトハ雖モ、世ニ志アリテ曲学ニ陷ル者アラハ、吾固ヨリ手ヲ把テ正学ノ途ニ進メント欲スルハ固ナリ、是ヲ以テ又孟子樂ヲ論スル言外ノ旨ヲ領スベシ、

第二章

殺二其麋鹿一者、如二殺レ人之罪一、

此章亦民ト同フスルヿヲ云、就中麋鹿ヲ殺ス者、人ヲ殺スノ罪ノ如シト云ヿ、仁人ノ深ク痛ム所ナリ、禽獸ノ微ヲ以テ、万物ノ靈タル人ヲ殺スヿ、類ヲ知ラサルノ甚シキ者ナリ、聖人ノ心ハ親ヲ親シミ民ヲ仁シ物ヲ愛ス、皆類ヲ以テ推スナリ、假リニモ此序ヲ乱ルベカラズ、日用万事ニ付ケテ熟考スベシ、其親ヲ愛敬セズシテ他人ヲ愛敬スル者ヲ、孝経ニハ悖德悖礼ト云、而ルニ世ニハ狗馬ヲ愛シテ賢才ヲ棄テ、生民ヲ剝シテ戎狄ヲ養フ者アリ、是亦如何ソヤ、

第三章

此章大議論ナリ、畧其端緒ヲ論セン、隣國ニ交ル原ト是レ諸侯近隣諸国ト交ルノ道ヲ論ス、然ルニ昆夷玁狁ノ事ヲ引クヲ以テ、或ハ錯誤テ夷狄ヲ待ツノ道トシ、遂ニ夷狄ニ事ルヲ以テ仁智ノ事トセンヿヲ恐ル、是細論セスンハアルヘカラズ、凡ソ隣国ニ交ニハ親睦ヲ以テ主トス、故ニ力德義三ツノ者我ニ優レル者ニ在テハ、固ヨリ奉事スベシ、或ハ力ヲ恃ンテ强梁ナル者アリモ、成丈ハ寛假シテ敢テ鋒ヲ爭ハサルベシ、若又小国ノ如キハ愛護シテ其他国ノ侵陵ヲ免レシムベシ、凡ソ夷狄ノ陵侮ヲ受ケ、生民ノ塗炭トナルハ、多クハ国内相爭フニ因ル、世道ニ志アル者、最モ意ヲ留ムヘキ事ナリ、本藩人或ハ皆謂ラク、安藝ハ吾ガ旧国、宜シク時ニ乘シ奪ヒ復シ、遂ニ十州ノ旧業ヲ按シ、天下ト衡ヲ爭フベシト、此論余カ深ク痛心スル所ナリ、凡ソ七道ノ諸藩、孰カ　天子ノ命ヲ奉シ、幕府ノ令ニ從フ者ニ非スヤ、相共ニ心ヲ協ヘ力ヲ合セ、　天朝幕府ニ奉事スヘキハ固其職ナリ、若シ其力德義、上　天朝ニ達シ、下諸邦ニ爭アラハ、天下ノ柄求メスシテ自ラ得ベシ、是ニ於テ必ズ已ムヿヲ得スンバ、文王武王ノ勇ヲ奮ヒ無道ノ国ヲ誅セハ、孰カ敢テ是ヲ禦カン、然レモ是レ好ムヘキヿニ非ズ、其他自ラ治メスシテ衡ヲ爭トスルハ、徒ニ自ラ弊シテ釁ヲ啓クノミ、況ヤ方今外夷四面ヨリ我ガ釁隙ヲ伺フ、此時ニ當テ六十州ノ人心ヲ一塊石トナシ、以テ彼小醜ヲ懲ラシ、海波ヲ清メンヿ尤モ願フ所ナリ、抑古ノ仁智ノ君、強暴ノ敵ヲ待ツ、志ヲ存スルヿ甚タ久遠、敢テ一旦ノ利害ヲ較セズ、一時ノ屈伸ヲ論セズ、遂ニ善ク大仇ヲ斃シ、大功ヲ建ル、実ニ欣慕ニ餘リアリ、後世ノ人智慮短浅、一旦敗衂スレハ、志氣頓ニ沮喪シ、復タ能ク爲スヿナシ、哀ヘキカナ、憂フヘキカナ、

第六場　七月六日

第四章

樂以天下憂以天下、

樂以天下憂以天下ト、是聖学ノ骨子ナリ、凡ソ聖学ノ主トスル所、修レ己治レ人ノ二途ニ過キズ、故ニ志ニ伊尹之所ヒ志、学ニ顔淵之所ヒ学ト云、又立志以ニ明道希文一爲ニ主本一ト云モ此義ニテ、顔淵・程明道皆聖人トナランヿヲ学フ人ナリ、（是修己ノ学ナリ、伊尹・范希文ハ皆天下ヲ以テ任トスル人ナリ、）是治レ人ノ学ナリ、凡ソ人ト生レ書ヲ読ミ道ヲ聞カサレハ詮方ナキヿナレ𪜈、苟モ已ニ書ヲ読ミ道ヲ聞クヲ得ハ、此学ヲ勤メ此志ヲ勵マザルベケンヤ、今諸君ト幽囚ニ辱シメラル、ト雖𪜈、幸ニ孟子ノ書ヲ講スルヲ得、何幸カ是ニ加ヘン、若シ天下ヲ以テ任トセントナラハ如何、先一心ヲ正シ、人倫ノ重キヲ思ヒ、皇国ノ尊キヲ思ヒ、夷狄ノ禍ヲ思ヒ、事ニ就キ類ニ觸レ、相共ニ切磋講究シ、死ニ至ル迄他念ナク、片言隻語モ是ヲ離ル、ヿナクンバ、縱令幽囚ニ死スト雖𪜈、天下後世必ズ吾志ヲ継キ成ス者アラン、是レ聖人ノ志ト学トナリ、其他ノ栄辱窮達毀譽得喪ニ至テハ、命ノミ天ノミ、吾カ顧ル所ニ非サルナリ、

第五章

前章ノ論雪宮ヨリ起ル、此章ノ論明堂ヨリ起ル、並ニ題小ニメ論大ナリ、孟子満腹尽ク是レ王政、尽ク是レ天下ト憂樂ヲ同フス、故ニ何事ニ觸レテモ必ズ発露スルヿ斯ノ如シ、抑今人孟子ノ大論ヲ聞ケ𪜈、毫毛モ心ニ徹スル所ナキハ何事ソヤ、」世禄ノ事ハ先輩宝鳩巣是ヲ論スルヿ詳ナリ、就テ見ルベシ、」鰥寡孤獨ノ事余ガ縱ヽタル所ナリ、曾テ西洋人ノ清国ノ事ヲ記スルヲ見ルニ云ヘル事アリ、支那國内ニハ人民繁衍スルヿ極テ盛ナリトイヘ𪜈、貧困ノ徒最モ夥シ、其窮迫甚シキハ愍然トメ視ルニ忍ヒサル者アリ、冬月酷寒ノ時ニ至テハ、夜間貧民相聚リ、互ニ重案シ、或ハ終夜篝火ヲ焼テ、其冱死ヲ防ク、惟其病夫老婦ハ時トメ凍死ス、土人其屍ヲ取リテ、橋下堤側中ニ投入ス、然レ𪜈官吏之ヲ詰問セズ、又曰ク支那ニテハ、乞食ヲ殺害メ弃ツルヿ頗ル多シ、又痾者殘廃者ノ如キハ道路ニ立テ錢ヲ往還ノ人ニ乞フ、又曰ク貧者路傍ヲ徘徊メ、食ヲ他人ニ乞フ時ハ、或ハ腹痛堪フベカラザル景狀ヲナシ、或ハ手足殘廃メ歩行屈伸ヲナスベカラサル狀ヲナシ、其最モ猾ナル者ハ故ラニ其女ノ眼目ヲ損シ、其母自ラ之ヲ携ヘ哀愍ノ情ヲ切ニシテ多錢ヲ乞フ者アリ、又ハ其愛子ヲ宮中ニ賣ンガ爲メニ、男根ヲ剪リ弃テ之ヲ閹官トナシテ、其身ノ榮ヲ謀ル者アリ、此悪風ノ起リハ州内ニ病院ノ設ケナキカ故ナリ、又州内ニ幼院ナキヲ以テ貧者其子ヲ養育スルヿ能ハズ、其稚子ヲ道路ニ弃ツル者アリ、北京府ノ清國ノ都ノ如キハ、一年捨ツル所ノ兒数ヲ記載スル片ハ、大約九千人ニ下ラズト云、然レハ漢土聖人ノ典籍具ニ存スト雖𪜈、王政已ニ地ヲ掃フ、遂ニ西洋夷輩ノ非議ヲ招クニ至ル、亦悲ムヘキノミ、

（以上二行は欄外に朱書してある）

本朝ノ古制病ヲ養フニ施薬院アリ、骸ヲ掩フニ悲田院アリ、唐ノ制京城ニ悲田病坊アリ、宋代ニ安濟坊、養濟院、漏澤園ノ名アリ、明ニ義塚ノ号アリ、皆窮民ノ無告ヲ恤ム所以ニ、擧テ是ヲ今時ニ用ヒントナラハ豈其策ナカランヤ、

第六章

友ノ詫（託カ）ヲ受ケナガラ、其妻子ヲ凍餒セシムルハ、人情ヲ忘ルヽナリ、士師士ヲ治ムル能ハサルハ、職分ヲ棄ルナリ、而シテ国君天ノ詫（託カ）ヲ受ケ万民ヲ養フ、而ルニ却テ是ヲ凍餒セシム、豈徒ニ友人ノ妻子ヲ凍餒スルノミナランヤ、天ノ命ヲ

奉シテ万民ヲ治ム、而ルニ却テ是ヲ擾乱セシム、豈徒ニ士師ノ士ヲ治ル能ハサルノミナランヤ、誠ニ人情ヲ思ヒ職分ヲ思ヒ、内ニ自ラ省スルアラバ、固ヨリ面低レテ言ナカルヘシ、今王ハ則左右ヲ顧ミテ他ヲ言フ、吾レ千歳ノ後ニ生レ、書ヲ読弦ニ至リ、直ニ唾罵セント欲ス、但宣王ノ骨朽ルヿ已ニ久シ、論スル共益ナシ、吾徒事ニ臨ム毎ニ、且ハ職分ヲ思ヒ、且ハ人情ヲ思フ時ハ、過擧ナキニ庶幾カランカ、

第七場　七月十七日

第七章

此章賢ヲ進ムルノ道ヲ論スルヿ甚尽セリ、凡ソ古ハ黜陟賞罰皆衆論ノ公ヲ取ル、後世ハ則然ラズ、故ニ往〻請詒賄（託カ）賂ノ私アルニ至ル、明君賢相苟モ是ニ察スルヿアリテ、廣廷ノ二十二臣ヲ命スル如ク、朝堂ニ大會シテ是ヲ議セハ、公議因テ伸ルヿヲ得ン、但シ最モ舎ヲ道邊ニ作ル三年成ラズト云ヘハ、已ニ遍ク衆議ヲ聞ク上ハ、自ラ察シ其賢ト不可トヲ見ルヿ最モ要トス、抑周代ハ世祿ノ制ナレ𪜈、戰国ニ降リ已ニ頽壊シ、斉国ノ大ニテモ世臣ナキニ至ル、本朝世祿ノ制、其優厚周制ノ比スヘキニ非ズ、然レハ我朝ノ今日ニ生レ、祿ヲ世〻スル者ハ、大小上下ニ限ラズ皆世臣ナリ、然レ𪜈世臣ト云モ徒ニ祿ヲ世〻スルヲ云ニ非ズ、註ニ云如ク與レ国同ニ休戚ノ者ナレハ、凡ソ今日ニ生レ世祿ノ澤ニ浴スル者ハ、一身ノ憂樂ヲ捨テ、国家ノ休戚ヲ以テ吾ガ休戚トナスヘキヿ論ヲ待タズ、苟モ此志ナキ者ハ人ニ非サルナリ、

第八章

湯武放伐ノ事ハ前賢ノ論具ハレリ、然𪜈試ニ見ル所ヲ陳セン、凡漢土ノ流ハ皇天下民ヲ降シテ、是カ君師ナケレハ治ラズ、故ニ必ズ億兆ノ中ニ択テ是ヲ命ス、堯舜湯武ノ如キ其人ナリ、故ニ其人職ニ称ハズ、億兆ヲ治ムルヿ能ハサレハ、天亦必ズ是ヲ廃ス、桀紂幽厲ノ如キ其人ナリ、故ニ天ノ命スル所ヲ以テ天ノ廃スル所ヲ討ツ、何ソ放伐ニ疑ハンヤ、本邦ハ則チ然ラズ、　天日嗣永ク天壤ト無窮ナル者ニテ、此大八州ハ、　天日ノ開キ給ヘル所ニシテ、　日嗣ノ永ク守リ給ヘル者ナリ、故ニ億兆ノ宜シク　日嗣ト休戚ヲ同シテ、復タ他念アルベカラズ、若シ夫征夷大將軍ノ類ハ、　天朝ノ命スル所ニシテ其職ニ称フ者ノミ是ニ居ルヿヲ得、故ニ征夷ヲシテ足利氏ノ贋職ノ如クナラシメハ、直ニ是ヲ廃スルモ可ナリ、是レ漢土君師ノ義ト甚タ相類ス、然レ𪜈湯武ノ如キハ、義ニ依リ賊ヲ討ス、命ヲ天ニ承クト称ス、本邦ニ在テハ然ラズ、赫〻タル　天朝、天日ノ嗣宇内ニ照臨マシマスニ、　天朝ノ命セスシテ（ヲ奉）、擅ニ征夷ノ贋職ヲ問ントナラハ、所謂以レ燕伐レ燕者ナリ、所レ謂春秋無義戰ニテ敵国相征スルハ何程ノ正義ニ依ルト云モ義戰ニ非ス　故ニ此章ヲ読ム者、審ニ辨ヲ致サヾレハ、適ニ以テ奸賊ノ心ヲ啓クニ足ルノミ、

第九章

此章二喩、前喩ノ如クナレハ国家ヲ視ルヿ、巨室ニ如カサルナリ、後喩ノ如クナレハ、国家ヲ視ルヿ璞玉ニ如カサルナリ、輕重ヲ失ヒ本末ヲ忘ル、亦甚シト云ベシ、其故何ソヤ從我ノ二字ニ過キズ、從我ノ心ハ何ヨリ起ルト尋ルニ、私欲ノミ、故ニ私欲ノ念能ク人ヲシテ国家ヲ視ルヿ巨室璞玉ニモ及ハサラシム、類ヲ以テ是ヲ推セハ、人間今日ノ事、斯ノ如キ者甚衆シ、畏ルヘキカナ慎ムヘキカナ、

第十章

古語ニモ戰勝ハ易ク、勝ヲ守ルハ難シト云如ク、燕ヲ取ルノ難キニ非ズ、燕ヲ守ルノ難キナリ、但民心ヲ得ル者ハ善ク守ルヲ得ルナリ、然ラスンバ亦運而已矣、然レハ大業ヲ興サントナラハ、征伐ノ日ニ在ラズシテ、昇平無事ノ日ニアリ、昇平無事ノ政、眞ニ民心ヲ得ルニ足ラハ、其餘亦何ソ多言セン、世ノ輕鋭浮薄ノ徒、此義ヲ思ハスシテ徒ニ遠略ニ志スハ、吾ガ甚タ懼ル、所ナリ、

第十一章

未聞下以三千里一畏人者上也ノ一語胸ヲ刺スカ如シ、　皇國東蝦夷ニ起リ、西琉球ニ至ル、亦小トスヘカラズ、魯西亞・米利堅大ト雖モ亦何ソ畏ル、足ン、況ヤ暎咭唎・拂郎察ノ小ヲヤ、若シ尙恐ル、所アラハ、内政教ヲ修メ、外强暴ヲ平グルヿ、殷湯ノ如クンバ天下誰カ敢テ吾ヲ忤視センヤ、今ハ則チ然ラズ、惴〻焉トシテ奉承ノ至ラザランヿヲ恐ル、孟子ヲシテ我ガ今日ヲ目セシメハ、其レ何トカ云ン、在上ノ君子読テ此章ニ至ラハ亦何ノ面目カアル、

第八九場　七月十九日

第十二章

聞ハ鬨声也ト註セリ、蓋シ鄒魯ノ兩軍相逼リ、未タ兵刃相接スルニ至ラズ、鯨波嘩ト起リタルニテ、鄒軍一散ニ潰走シ將吏三十三人潰兵ノ跡ニ殘リテ擊殺サル、ナリ、固ヨリ力戰シテ死スルニ非ズ、若シ兵家ヲシテ是ヲ議セシメハ必ズ云ン、操練熟セス節制整ハスシテ是ニ至ルト、是本ヲ知ラサルノ論ナリ、故ニ孟子曰、君行仁政、斯民親ニ其上、死ニ其長ニ矣、蓋シ民心上ヲ親ム、故ニ上ノ令ニ從フヿ臂ノ指ヲ使フカ如シ、長ニ死スル故ニ水火ノ中ヲ避ケズ、果シテ然ラハ我兵一塊石ノ如シ、此一塊石ノ兵ヲ以テ敵ニ當ル、克タサル所ナシ、所レ謂操練節制論セズ〆固ヨリ其中ニ存ス、孟子ノ言豈虛ナランヤ、

又案スルニ古來名將ノ勝ツ所以ヲ觀ルニ、大抵將吏、身士卒ニ先ンジ、堅陣強敵ヘ驀然ト驅入ル、士卒等大將ヲ討セテハト皆我先ニ衝蒐ル、是ニ因テ勢声猛烈ニシテ斉一、向フ所敵ナシ、是ヲ以テ上ヲ親ミ長ニ死スルノ兵ニ非サレハ用ベカラス、後世是ヲ知ラズシテ、勝ヲ器械節制ノ末ニ求ム、我其何ノ意ナルヲ知ラズ、

第十三章

此章ノ義熟味スヘシ、小国ヲ以テ両大国ノ間ニ挾マル、是大難事ナリ、楚ニ事レハ斉怒リ、齊ニ事レハ楚怒ル、利害シキ所ナシ、是レ文公ノ問ナリ、孟子對フ、是諜非ニ吾所ニ能及一也ト、是徒ラニ推諉ノ言ヲ爲スニ非ス、此事ハ実ニ文公ノ決心ヨリ出ルニ非レハ、他人ノ智慧ヲ借テ行フ様ノ事ニテ遂クヘキニ非ズ、然レモ聞ント欲スルノ心親切ニシテ無已ニ至テハ、亦以テ一説ヲ発スベシ、鑿斯池一也、築斯城一也トハ、茫然手ヲ拱シテ備ヘサルニ非ズ、防禦ノ手段ヲ尽シテ、不意ノ伺フヘキナカラシムルナリ、與レ民守レ之トハ、上下一致シ君臣相親ミテ高城深池ヲ守ルナリ、效レ死而民弗レ去トハ、萬一事敗レ城池モ人ニ奪ル、ニ至ラハ、君民上下城ヲ枕ニシテ切腹ト覚悟ヲ究ルヿナリ、果〆如レ是ナレハ是可レ爲也トテ、斉ニ事ルヿモ爲スベシ、楚ニ事ルヿモ爲スベシ、斉楚共ニ事ヘザルヿモナスベシ、是ニ於テ事ルモ事ヘサルモ、其權我カ掌握ニアルナリ、兵家ニ籠城ノ大將心定ヲ説テ籠城致ス上ハ、負バ

必ズ切腹ト思ヒ可レ定ト云モ亦此義ナリ、

是謀非ニ吾所ニ能及一也ニ於テモ亦感アリ、癸丑、亞美理駕使船ノ來ル、国書ヲ　幕府ニ呈ス、幕府乃チ遍ク諸藩ニ示シ、和戰ノ得失ヲ問フ、時ニ劒客齊藤彌九郎曰ク、　幕府ノ和議已ニ決ス、凡ソ和戰ノ決ハ大將軍ノ方寸ニアルベシ、　幕府眞ニ戰ント欲セハ、必ズ大號ヲ降シテ云ン、亞美理駕ノ無禮斯ノ如シ、吾レ旗下ノ衆ヲ提ケ、以テ其罪ヲ討セントス、天下志ヲ同フスル者ハ來テ力ヲ戮スベシト、果シテ然ラハ和戰ノ二字一朝ニシテ決スベシ、何ゾ小田原評諚ヲ以テセン、今則然ラズ、幕府和議已ニ決ス、尙天下是ヲ非スル者アランヿヲ恐レ、徐ニ夷書ヲ頒示シテ其意ヲ料ルノミト、已ニシテ甲寅ノ春夷船再ヒ來ル、和議果シテ成ル、余彌九郎ガ卓識ニ服ス、古語ニモ我カ志先ツ定リテ、詢謀スルニ皆同シ、鬼神其倚(リ)龜筮協ヒ祐クト、然レハ志ノ定ルト定ラヌト、自ラ斷スルニ在ノミ、孟子非ニ吾所一及也ノ意蓋シ斯ノ如シ、

第十四章

齊人將レ築レ薛、

城ニ二樣アリ、城ヲ築テ人ヲ衛ル一ナリ、国々ノ本城ハ大抵然リ、城ヲ築テ地ヲ守ル二ナリ、境目城ノ類是ナリ、薛ハ滕ト甚近シ、而シテ臨蓾齊ノ都ヨリハ稍遠シ、故ニ薛取ルト雖モ城ヲ築キ戍兵ヲ置カサレハ其地ヲ守ルヿ能ハズ、故ニ齊人薛ニ築クハ境目城ノ類ニシテ、已ニ其地ヲ守リ足溜ヲ拵ヘ、漸ミニ滕ニ逼ントスルナリ、滕人豈恐サルヿヲ得ンヤ、抑下田箱舘ノ地、滕ノ薛ニ於ケル於ケルトト如何ソヤ、吾甚疑フ

創レ業垂レ統、爲レ可レ繼也、

業ヲ創メ統ヲ垂ルヽニハ繼ヘキ爲ヲスト云フヿ最モ心ヲ付ヘシ、當今藩国ヲ以テ云フニ、　天朝ヲ尊ヒ　幕府ヲ敬ヒ、祖法ニ則リ、多士ヲ養ヒ、萬民ヲ愛シ、賢才ヲ招キ武備ヲ修ムルノ類、皆繼クヘキノ事ナリ、

君如レ彼何哉、

此言亦深思スベシ、兎角敵國ノ事ハ、我心ニ任セヌ事ナレハ、我ハ我ガ彊ムヘキ所ヲ彊ムルヿ肝要ナリ、然ルニ敵ヲ弱カレト思ヒ衰ヘカシト思フハ、皆愚痴ノ甚シキナリ、吾盛ナレハ何ソ敵ノ盛ヲ恐レン、我強ナレハ何ソ敵ノ強ヲ畏レン、吾盛強ヲ勉メスシテ人ノ衰弱ヲ願フ、是今人ノ見ナリ、悲カナ、悲カナ

第十五章

此章両說ヲ設クト云ヒ、主意效レ死勿レ去ノ上ニアリ、第十三章ト同シ、但シ大王ノ一說人多ク了解セズ、蓋シ狄人ノ初テ來侵スヤ、大王ノ胸中已ニ定算アリ、謂ラク狄人ノ勢正ニ盛強ナリ、宜シク驕セテ後是ヲ制スベシ、故ニ皮幣犬馬珠玉ヲ以テ事ル至ラサル所ナシ、遂ニ土地ヲ擧テ是ニ與フルニ至ル、狄人ノ心益ミ驕ル、而シテ我民ノ心ハ愈ミ我カ仁心ニ服ス、是ヲ以テ去テ岐ニ往キ邑ヲナシ、終ニ周家大業ノ基ヲ開クヿヲ得ルナリ、是皆大王ノ定算ニシテ彼ヲ審ニシ己ヲ審ニシ、宏量偉度ノ人ニ非サレハ及ヘキニ非ス、豈滕文輩ノ能ク與リ知ル所ナランヤ、然此大(氏)志ナクンハ、區ミノ小成敗ニ頓着シテ、遂ニ自ラ喪亡センノミ、

第十六章

吾之不レ遇ニ魯侯一天也、

此一語是レ孟子自ラ決心シテ天ニ誓フ所ナリ、故ニ時ニ遇フモ遇ヌモ皆天ニ任ミズ(セテ)顧ミズ、我ニ在テハ道ヲ明ニシ義ヲ正フシ、言ヘキヲ言、爲スヘキヲ爲スノミ、是ヲ以テ孔孟終身世ニ遇ズシテ、道路ニ老死スレ𪜈、是カ爲メニ少シモ愧ルコナク倦ムコナシ、今吾輩ノ幽囚ニ陷リテ孟子ヲ読ム、宜シク深ク此義ヲ知ルベシ、

梁惠王通篇、仁政ヲ説ク、末第十三章第十四章第十五章ニ至テハ、皆己ノ彊ムヘキ分ヲ尽シ、成敗ハ天ニ任スルヲ云、末章ニ至テハ、孟子自ラ過不遇ハ天ニ任セテ斯道ヲ明ニスルノ本志ヲ云、並ニ皆首章仁義ヲ先ニシテ利ヲ後ニスルノ論ニ照應スルナリ、

講孟劄記卷之一終

講孟劄記　卷之二

第十九場　七月廿二日

公孫丑上

首

第一章

功烈如レ彼、其卑也、

管仲ノ桓公ヲ助ル、王道ヲ知ズシテ覇術ヲ行フト云ヘリ、王覇ノ辨、孟子以下古今名賢ノ論備レリ、然𪜈予モ亦一説アリ、王道ハ大学ニ云如ク、格物、致知、誠意、正心、修身、齊家ヨリ、治国、平天下ニ至ルノ次序ヲ失ワヌ〻〻、覇術ハ是ニ反ス、桓公ノ君タル内嬖夫人ノ如キ者数人、又外嬖・豎刁・易牙・開方三子ノ如キ者アリ、是ヲ以テ一旦桓公ノ歿スル五公子立ツコトヲ爭ヒ、公骸骨葬ルヲ得ズ、尸腐爛ノ蟲ヲ生ス、数年ノ間斉国禍乱相継キ、寧歳ナキニ至ル、管仲ノ臣タル樹シテ門ヲ塞キ、三歸反坫皆僭シテ邦君ノ爲ス所ヲ爲ス、是ヲ以テ言フニ、斉ノ君臣九合一匡ノ功アリト云𪜈、修身齊家ノ道ニ於テ一モ得ル所ナシ、故ニ桓公管仲一タヒ目ヲ瞑スレハ、国事潰敗シテ復タ收ムヘカラズ、是曾西ガ管仲ノ功烈ヲ卑トスル所以〻、是ヲ以テ王者ノ政ヲナスハ、身ヲ治(修)メ家ヲ齊ルヲ以テ先務トス、身ヲ治(修)メ家ヲ齊ルヲ先務トスルハ、事迂濶ナル如ナレ𪜈、其法子孫ニ傳リ、幾世ヲ經テモ動揺セザルノミナラズ、益〻興隆スル者ナリ、創レ業垂レ統爲レ可レ継ト云モ此事ナリ、豐公ノ如キ非常ノ大豪傑ニテ、一世ヲ鼓舞スレ

ド、其後嗣彼カ如シ、恐多キヿナレド、本藩ノ如キハ、洞春公以來大義ヲ重ンシ懿親ヲ敦フシ、以テ今ニ至ル、長防福小ト雖、萬世ノ基業動搖スルヿナシ、是此ヲ以テ彼ニ比セハ、孰レカ優レル、孰レカ劣レル、曾西ノ才管仲ニ及ハスト云ド、管仲ニ比スルヿヲ欲セザルハ是ヲ以テノミ、噫是王霸ノ辨ゝ、

（以下七行は前頁の欄外に朱書してある）戰国ノ時趙ノ武靈王、胡服騎射、以テ国人ニ敎ヘ、及ヒ詐テ自ラ使者トナリ、秦ニ入リ、秦ノ地形ト、秦王ノ人トナリヲ觀ルカ如キ、非常ノ英傑ニテ、中々只人ニアラズ、然ド脩身斉家ノ工夫ナキ故、其臣下ノ囲ムトナリ、食ヲ得ス、雀兒ヲ探テ是ヲ食ヒ、三月餘ニシテ沙丘宮ニ餓死ス、淺猿シキ事共ナリ、其禍源ヲ尋ヌルニ、武靈王初メ長子章ヲ以テ太子トス、後吳廣ノ女孟姚ヲ得テ之ヲ愛シ、爲メニ外ニ出テサルヿ數歳ニ〆子何ヲ生ム、乃チ太子章ヲ廃シテ、何ヲ立ツ、其後、吳孟姚死シ、何カ愛衰フ、且故太子ヲ憐ミ両ナカラ之ヲ王トセント欲ス、猶豫〆未タ決セス、故ニ乱起リシトソ、是亦桓公君臣ノ咲フ所ナリ、又按スルニ両ナカラ之ヲ王トスルハ、大ニ我カ上杉謙信ノ末路ニ似タリ、是皆英雄ノ失策、已ムヲ得サルニ出ル者ニシテ亦悲ムヘキノミ、

故家、遺俗、流風、善政、

故家ハ註ニ云旧臣家ノ家ゝ、遺俗ハ殘リタル風俗ナリ、流風ハ上ヨリ下ミヘ流レ下ル風ナリ、善政ハヨキ仕置ゝ、三代聖人ノ世ハ、何レモ故家、遺俗、流風、善政ノ四ツノ者ハ必ズ有ルヿナレド、殷ノ政ハ特ニ質朴ヲ尚ヒ、文飾ヲ事トセズ、且湯王以來大甲・大戊・祖乙・盤庚・武丁ノ如ク、賢聖ノ君多ク出玉ヒタル故、別シテ四者盛ニ〆觀ルヘキナリ、抑国ノ治安長久ナルハ、地廣キニモ在ラズ、民衆キニモ在ラズ、惟但賴ミトスヘキ者ハ此四者ニシクハナシ、

然レハ政ヲ爲ス者茲ニ心ヲ用ヒスンハアルベカラズ、是ヲ知ラズシテ妄ニ祖宗ノ成法ヲ変シ、国家ノ美俗ヲ易ユル者ハ、国賊ト云ベシ、今吾輩至賤ト云ド苟モ国ノ爲ニセンヿヲ思ハヽ、亦茲ニ心ヲ用ユベシ、我家先代ノ事ヲ考ヘ、又君家祖宗ノ業ヲ稽ヘ、次ハ大臣其他勲旧ノ家ノ傳記ヲ尋チ、古來ノ制度風俗等ニ至ル迄悉ク考究シテ、湮沒ヲ著シ晦昧ヲ顯シ、務メテ古ヲ存スル如ク心掛ベシ、心ヲ用ルノ深ク、功ヲ積ムノ久シクシテ、遂ニ一大撰述ヲ成シ、遍ク世ニ傳ヘ、故家遺俗流風善政益〻盛ニ益〻明ナラシメハ、是亦国ノ爲ナリ、是学者最モ務ムヘキヿゝ、余常ニ茲ニ志アリ、而〆未タ及フヿ能ハズ、今此章ヲ読テ益〻憤発ス、願クハ徐ニ諸君ト是ヲ謀ラン、

第二章　第十一場　七月廿六日

孟施舍之所レ養レ勇也

此章浩然ノ氣ヲ論ス、其論甚盛大雄偉ゝ、北宮黝・孟施舍ノ勇ノ如キハ固ヨリ言フニ足ラズ、但孟施舍ノ勇ハ、武士戰場ニ向フ時ハ角（カク）コソ有度ヿナリ、因テ其畧ヲ言ン、無懼ノ二字是主ナリ、勇氣敵ヲ呑ムト云如ク、百萬ノ大敵目ニ餘ルト雖ド、屑トモセヌヿナリ、死ヲ知レハ必ズ勇ト云ヘハ、打死ト覚悟サヘ定リタレハ、大敵猛勢モ畏ル、ニ足ルヿナシ、然レド此勇ヲ養ヒテ大ニナサヽレハ、假令覚悟定リタレド、勇氣敵ヲ呑ム所ナシ、未タ孟施舍ノ勇ヲ語ルニ足ラズ、孟施舍ノ如キ者一人陣中ニアレハ、惣軍ノ氣是カ爲ニ大ニ增盛シ、敗軍モ轉シテ勝軍トナル者ナリ、此人一人国中ニアレハ、闔国ノ氣是カ爲ニ增盛シ、弱国モ轉〆强国トナル者ナリ、況ヤ此人ヲ擧テ將帥ノ任ト

ナスニ於テヲヤ、強將ノ下弱兵ナキヿ必セリ、士安ゾ玆ニ志サ、ルベケンヤ、

至大至剛、以レ直養、而無レ害、則塞二乎天地之間一、

此一節最モ詳ニ読ムベシ、至大トハ浩然ノ氣ノ形狀ナリ、推レ恩足ニ以保二四海一ト云モ卽此氣ゝ、此氣ノ蓋フ所、四海ノ廣キ万民ノ衆キト云ヒ及ハサル所ナシ、豈大ナラズヤ、然ヒ此氣ヲ養ハサル時ハ、一人ニ對シテモ忸怩トシテ容サル如シ、況ヤ十數人ニ對スルヲヤ、況ヤ千万人ヲヤ、蓋シ此氣養テ是ヲ大ニスレハ其大極リナシ、餒シテ是ヲ小ニスレハ其小亦極リナシ、浩然ハ大ノ至レル者ナリ、至剛トハ浩然ノ氣ノ模樣ナリ、富貴不レ能レ淫、貧賤不レ能レ移、威武不レ能レ屈、ト云卽此氣ナリ、此氣ノ凝ル所、火ニモ燒ケス水ニモ流レス、忠臣義士ノ節操ヲ立ル、頭ヲ刎ハラレテモ、腰ハ斬ラレテモ、操ハ遂ニ変セズ、高官厚祿ヲ與ヘテモ、美女淫声ヲ陳テモ、節ハ遂ニ換ヘス、亦剛ナラズヤ、凡ソ金鏃剛ト云ヒ烈火以テ鎔スベシ、玉石堅ト雖ヒ鉄鑿以テ碎クベシ、唯此氣獨リ然ラズ、天地ニ通シ、古今ヲ貫キ、形骸ノ外ニ於テ、獨リ存スル者、剛ノ至ニ非スヤ、至大至剛ハ氣ノ形狀模樣ニシテ、以レ直養而無レ害ハ、卽持二其志一無レ暴二其氣一ノ義ニシテ、浩然ノ氣ヲ養ノ道ナリ、其志ヲ持ト云ハ、吾カ聖賢ヲ学ハントスルノ志ヲ持詰テ、片時モ緩カセナクスルヿナリ、学問ノ大禁忌ハ作輟ナリ、或ハ作シ或ハ輟ムルヿアリテハ、遂ニ成就スルヿナシ、故ニ片時モ此志ヲ緩カセナクスルヲ持二其志一ト云、（〔〕この割書は欄外にある）余学女ノ歳初テ象山翁ヲ見ル、翁漢学蘭学各日ノ半ヲ以テ修学スヘキヿヲ教ヘ、因テ作輟スルヿ是其大禁忌ナリト云ヘリ、是常言ト云ヘヒ、余深ク耳底ニ存シテ、今ニ至ルマテ象山ヲ憶ノ毎ニ、必ズ此言ヲ思フヲ以テ、偶然此如ニ発セシナリ、（マヽ）以レ直養ト云モ同シ工夫ニテ、平日スル所悉ク直道ニ外ルヽヿナクシテ、是ヲ以テ此氣ヲ養育スルヿゝ、無レ暴二其氣一ト云ハ、卽チ無レ害ト云ト同シ、害スルト云、暴フト云ニ二樣アリ、一ハ私欲ヲ肆ニシ、直道ヲ以テ志ヲ持スルヿヲ忘ル、時ハ、自ラ省ミテ愧ル所アリ、大ニ氣ヲ暴ヒ害スルゝ、是卽チ下節ノ所レ謂不レ耘レ苗者也、二ハ浩然ノ氣ノ至大至剛ハ、爲ス所道義ニ合フヨリシテ自ラ生スル者ナリ、然ルニ道義ニ合フト合ヌヲモ考ヘズ、向見ズニ大ト剛トヲナサントスル時ハ、一時ハ我慢血氣ニテ狂暴粗豪ヲ以テ剛モ大モナスベケレヒ、遂ニハ愈ゝ自ラ省ミテ愧ル所アリ、武田信玄ノ終身論語ヲ読ムヿ能ハサル如キ、是レ最モ氣ヲ暴ヒ害スルノ大ナル者ナリ、是下節ノ所レ謂レ苗者也、塞二乎天地之間一ト云ハ、其效驗ヲ云ナリ、浩然ノ氣ハ本是天間（地）ニ充塞スル所ニシテ、人ノ得テ氣トスル所ゝ、故ニ人能ク私心ヲ除ク時ハ至大ニシテ天地ト同一（体）ニナルナリ、今吾レ一言一行細ヨリシテ、本二諸身一、徵二諸庶民一、考二諸三王一而不レ繆、建二諸天地一而不レ悖、質二諸鬼神一而無レ疑、百世以俟二聖人一而不レ惑、動而世爲二天下道一、行而世爲二天下法一、言而世爲二天下則一、ト云如クナレハ、天地古今ニ充塞スト云ヘシ、浩然ノ氣ハ古來聖賢相傳テ、孟子ニ至リ発明スル所學者ニ於テ最切実ナルヿ故ニ、特ニ是ヲ詳ニス、

第十二場　七月念九日

第三章

此章王霸ノ辨ヲ論スルヿ明ナリ、味フベシ、世人或ハ謂ラク、王ハ天子ノ事ニシテ霸ハ諸侯ノ事ナリト、而シテ孟子ノ論スル所ハ然ルニ非ズ、故ニ七十里ニテモ王ナリ、百里ニテモ王ナリ、是ヲ以テ推スニ賤民ト雖ヒ王アリ霸アリ、夫富商大賈金銀財帛ノ力ヲ有シ、恩ヲ賣リ名ヲ要スル爲ニシテ窮民丐兒ヲ收養賑恤スルハ霸ナリ、又身貧困ナリト雖ヒ、一簞ノ食、一瓢ノ飲ヲモ、分テ親戚故旧ト是ヲ共ニシ、或ハ仰事俯畜ノ餘資ヲ以テ貧乏ヲ惠救スル類ハ

王ナリ、嗚呼世道ノ衰フル、天子諸侯ニ就テ霸者ヲ求ムルニ絶テ無シテ僅カニアリ、何ソ況王者ヲヤ、名教ノ敗ル、士農工賈ニ就テ霸者ヲ求ムルニ又僅ニアリテ多クアラズ、何ソ況ヤ王者ヲヤ、哀夫ミミ、

第四章

此章両ノ及ニ是時ノ語ヲ下ス、朱註並ニ惟日不レ足之意ト云、最妙味フベシ、今ヤ東墨西歐駸々ト來リ逼ル、官皆枉テ其意ニ適從ス、輿地圖ヲ披テ是ヲ檢スルニ、蝦夷ノクシンコタン既ニ魯人ノ城壘ヲ築ク、松前ノ箱館伊豆ノ下田已ニ墨人ノ互市場トナル、肥前ノ長崎暗拂ノ來航頻々ナリ、其他武藏ノ神奈川、志摩ノ鳥羽、攝津ノ難波等、夷人已ニ去ルト雖モ、腥膻ノ氣汙染シテ未タ去ラズ、然ラハ則神州ノ其汙ヲ受ケサル者幾許ソヤ、事已ニ茲ニ至ル、間暇又幾時ソヤ、幸ニ今數年ノ災ヲ紓フ、実ハ不治ノ病ヲ護ス、是時ニ乘シ惟日モ足ラズトシテ、日夜刻苦勉勵、上ニ在テハ其政教ヲ修メ、士大夫ニ在テハ其学藝ヲ錬リ、農工商賈ハ各其業ヲ勤メ、務メテ牖戸ヲ綢繆シ、下民ノ侮ヲ禦クベシ、然ルニ今ハ然ラズ、是時ニ乘シ惟日モ足ラズ日夜般樂怠敖スルヿ何事ソヤ、古今同慨ナルカナ、

禍福無不自己求之者ニ

此語甚タ妙、禍福ノ二字皆示ニ從フ、凡ソ示ニ從フ字ハ、神祇祥禎ノ類、皆天道鬼神ニカヽル字ナリ、故ニ禍福ト云ハ、世俗ニ所レ謂天罰ノ中ル神罰ヲ蒙ルト云ヒ、又神ノ恵ヲ受ル天福ヲ承ト云類ナリ、古今共ニ愚昧ノ人情ハ同シ事ニテ、兎角天ヤ神ヤノ禍福ヲ降ス如ク思フ故ニ、孟子特ニ云ク、福禍天ヨリ降ルニ非ス神ヨリ出ルニ非ス、己ヨリ求メサル者ナシトナリ、此理ヲ知リテ初テ共ニ道ニ入ルベシ、此理ヲ知ラサル者ハ天地鬼神ニノミ諂ヒ諛ヒテ、己ノ行ハ修メズ、是ヲ福ヲ辞シテ禍ヲ求ムルト云、小人ノ行フ所皆然リ、憐ムヘキノミ、

第五章

此章仁政ヲ論スルヿ甚詳ナリ、大意天下ノ士商旅農民皆我国ヲ慕ヒ來ル如クスル事ナリ、五者ノ中尤モ要トスル所ハ、又士ノ其朝ニ立ツヿヲ願フ如クスルニ在、故ニ此条ヲ以テ第一ニ置クナリ、政ニ任スル者胸ニ手ヲ措テ思惟スベシ、

第六章

此章不レ忍レ人ノ心ヨリ、遂ニ四端ノ論ニ及フナリ、不レ忍レ人ハ即惻隱ノ心ニシテ、羞惡辞讓是非皆是ヨリ出ル所ナリ、嗚呼人ミ斯心ナキハアラジ、而テ凡人ハ皆擴充ノ術ヲ知ラズ、以テ聖人ニ及ハサル所ナリ、孺子入レ井ノ譬、及ヒ梁惠王上篇牽レ牛ノ說、事大ニ相類ス、宜シク良心発見ノ所ヲ知テ擴充ヲ勤ムベシ、擴充ノ二字是孟子人ヲ教ルノ良術ナリ、

第七章

仁天之尊爵也、人之安宅也、

尊爵安宅ハ正ニ人役ト相反ス、何ヲカ尊爵ト云、人本心ヲ存シ、人道ニ於テ失フ所ナケレハ、假令一時ニ屈抑セラル、ヒ、万世ニ発揚スベシ、俗輩ニ凌侮セラル、ヒ、知レ道者ニハ尊崇セラルベシ、知レ道者ノ尊崇ハ万世ニ発揚スルニ足ル、固ヨリ俗輩ノ凌侮一時ノ屈抑ノ比スヘキナランヤ、故ニ是ヲ尊爵ト云、何ヲカ安宅ト云、凡ソ人ノ居ル所金

城湯池ト雖モ、彫牆画屋ト雖モ、是ニ居ルニ德ヲ以テセサレハ、衆怒並起リ、群怨日ニ盛ニシテ、一日モ其居ヲ安スルヿ能ハズ、且一時ノ機ニ乘シ、富貴尊榮ヲ得ルト雖モ、中心自ラ愧自ラ愁ヒ安ンセサルノ甚シキ、將タ何トカイワン、苟モ仁ニ於テ得ルヿアラハ、貧富苦樂死生得喪、往トシテ安ンシ且樂マサルヿナシ、若然故ニラサレハ、貧苦死喪固ヨリ哀シムヘクシテ、富樂生得亦樂ムヿヲ得ズ、營〻汲〻人ノ役トナルノミ、故ニ世人ノ所謂尊爵ハ眞ノ尊爵ニ非ズシテ、安宅ハ眞ノ安宅ニ非ス、且眞ノ尊爵安宅ハ、人〻固有スル所、得ント欲スレハ即チ得、世人ノ尊爵安宅ノ求メ難キカ如キニ非ズ、何ヲ苦ンテ久シク人ノ役トナルヤ、思ハザルノ甚シキナリ、

第八章

舜ハ大聖人ナリ、其賤シクシテ農夫陶工漁父ト混スルニ當テヤ、必ス取二於人一以爲レ善モノハ、天下ノ至大至廣、誠ニ一人智力ノ能及フ所ニ非ルヲ知レハナリ、與レ人爲レ善ニ至テハ仁ノ至レル者ナリ、吾儕小人、聖人ノ大德ニ及フベキ非スト雖モ、既ニ志ヲ立テ聖人ヲ学フ、何ソ大舜ヲ畏レンヤ、故ニ己レノ小智小能ヲ挾マズ、濶然トシテ人ノ智能ヲ採用シ、且人ノ善心ヲ勸メ助ケ、共ニ道ニ適クベシ、是大舜ノ道ナリ、今世智能ノ士乏シキニ非ス、唯恨ムル所ノ者ハ、己カ智能ヲ恃ミ、人ノ智能ヲ採用セス、且人ヲ誘シテ道ニ進ムル者極テ少シ、甚シキ者ハ兩智兩能互ニ相軋ルニ至ル、哀シムヘキノ甚キ者ナリ、吾儕宜シク深ク心ヲ玆ニ用ユベシ、

第九章

伯夷ノ淸、柳下惠ノ和、各一偏ヲ得、故ニ変シテ隘トナリ不恭トナル、若淸ナルヘクシテ淸、和ナルヘクシテ和ナル時ハ、孔子ノ可二以仕一則仕、可二以止一則止、可二以久一則久、可二以速一則速ト、何ソ異ナランヤ、而シテ人各資質アリ、故ニ古人ヲ学テ其性ノ近キ所ヲ得ベシ、余尤モ柳下惠ノ行ヲ愛ス、由々然與レ之偕トハ和ナリ、而不二自失一焉ハ不レ流ナリ、和ニシテ已マサレハ必ズ流俗ニ同シテ汙世ニ合フニ至ル、故ニ不流ヲ以テ己ヲ持ス、其人ヲ待物ニ接スルハ甚寛厚ニシテ、自ラ處スルハ甚嚴密ナル、是柳下惠ノ行ナリ、人能如レ此ナレハ、何程壞乱ノ世ニ処ルト雖モ、必ス能ク志ヲ協ヘ心ヲ同フシ、世道ヲ維持スルノ人ヲ得ルナリ、五代ノ馮道ノ如キハ、五朝八姓ニ歴事シ、身常ニ大臣トナリ、敢テ国ニ殉スルノ節ナク、国ヲ存スルノ策ナキ者ニシテ、人或ハ認テ道廣シナト、云ニ至ル、是レ柳下惠ノ和ヲ学テ、其不流ヲ忘ル、ニ非ズヤ、斯ノ如キ時ニ至テハ、伯夷ノ淸ニ非サレハ、安ソ能ク義ヲ正シ、道ヲ明ニシテ、世道ヲ維持センヤ、故ニ余ハ則柳下惠ヲ主トシ、且ヲ輔スルニ伯夷ヲ以テセント欲ス、是余カ志ナリ、一二ノ朋友却テ伯夷ニ似タル者アリ、余ハ則又是ヲ輔クルニ柳下惠ヲ以テセント欲ス、是余二聖人ヲ学フノ術ニシテ、孟子ノ孔子ヲ学フ、恐クハ亦是ニ外ナラズ、

此篇首章王タルノ易キヲ云、管晏ヲ黜ル者ハ、意実ニ孔子ヲ学フニアルナリ、二章ハ上ヲ承テ不動心ヲ言フ、知言養氣ヲ以テ其工夫トス、遂ニ孔子ヲ学フノ意ニ落着ス、三章王霸ヲ弁シ、四章栄辱ヲ論ス、皆首章ノ餘意ヲ発明ス、五章詳ニ仁政ヲ論ス、首章行二仁政一ノ句ヲ実ニス、六章仁心ノ固有ヲ明ニシ、七章仁ヲ擇ムヲ論シ、並ニ仁政ノ根本トス、八章子路禹大舜ヲ擧テ遙ニ末章ノ末、群賢聖ヲ列スルノ意ニ照應シ、九章伯夷柳下惠ヲ言テ、君子不レ由也ニ帰シ、孔子ヲ学フノ意ヲ重テ管晏ノ黜ヘキハ復タ言ヲ待タズ、是全篇ノ文脉也、

公孫丑下

首

第一章

天時不レ如ニ地利一、地利不レ如ニ人和一、

此義明白復タ論ヲ待タス、今試ニ是ヲ例言セン、夫人和ヲ得テ初テ地利用ユベシ、天時用ユベシ、故ニ国家ノ務ヲ論スル時ハ、先ツ人和ヲ務ムベシ、人和已ニ得ハ城高フスベシ、池深フズベシ、兵革堅利ニスベシ、米粟多クスベシ、其戰ニ臨テハ天時モ択フベシ、是ヲ一身ニ譬フルニ、胸中固ヨリ忠孝ノ念ヲ存スル是人和ノ如シ、忠孝ノ念アラハ文学モ修ムベシ、武藝モ講スベシ、武器モ畜フベシ、天時是地利ノ如シ、故ニ忠孝ノ念ナキ者ヲシテ、文武ヲ講修シ、武器ヲ畜ヘシメハ、却テ害トナリ、其身ヲ全スルヿ能ハサルノ基ナリ、是人和ヲ得スシテ、地利天時ヲ恃ムカ如シ、理ハ一ナリ、一身一家ヨリ国天下ニ通シ、皆別理アルヿナシ、宜シク先後緩急ノ在ル所ヲ察スヘシ、先ト云急ト云ハ、忠孝ノ念ナリ、人和ナリ、後ト云緩ト云ハ文学武藝武器等ナリ、天時地利ナリ、

第二章

鄉黨莫レ如レ齒、

三尊ハ天下ニ通達シタルヿナレハ、是ヲ達尊ト云、今萩中ノ風ヲ観察スルニ、爵ノ尊キヲ知テ德ノ尊キヲ知ラズ、德ノ尊ヲ知テ齒ノ尊キヲ知ラズ、憂ヘキノ甚シキナリ、田舍ニハ稍質実ノ古風モ存シ、齒ヲ尊フノ風アレ𪜈、萩中ノ風ハ大抵才ニ伐リ、能ニ矜リ、老輩長者ヲ凌忽輕蔑スルヿ甚シ、是レ人〻ノ学フ所、功利ノ末ニ流レ、仁義ノ本ヲ務メサルヨリ起ルヿナリ、余曾テ水府熊府ノ士人ト好テ交ルニ、其風頗ル齒ヲ尊フノ意ヲ存シ、大ニ萩中浮薄ノ風ト異ル者アルヲ覚フ、余至愚タリト雖、誓テ古道ヲ身ニ行ハント欲ス、是等実ニ至要至急ノ事ナリ、何ソ徒ニ水府熊府ヲ羨ムヿヲセンヤ、若夫德ヲ尊ヒ爵ヲ尊フニ至テハ、今ノ風固ヨリ善至リ、美盡ストセズト雖𪜈、齒ヲ尊フノ念、誠心ニ發セハ、豈更ニ他道アランヤ、

有ニ所レ不レ召之臣一、

此事余千万国家ノ爲メニ願望スル所ナリ、成湯桓公ノ後、漢ノ照烈ノ諸葛亮ニ於ル、唐ノ肅宗ノ李泌ニ於ル、亦皆相似タリ、故ニ善ク三分ノ大業ヲ興シ、中興ノ偉績ヲ成スヿ彼カ如シ、今ヤ国步艱難何ソ独リ玆ニ及ハサルヤ、其醜德齊、莫ニ能相尚一、亦何ソ怪マン、儒臣経筵ニ侍シ、此等ノ章ヲ講スル果〻何ノ説ヲカナス、宰執此等ノ講ヲ聞ク、又果〻何ノ面ヲカナスヤ、

第三章

註、尹氏曰、君子之辞受取予、唯當ニ於理一而已、按スルニ是等ノ處ニ於テ、君子小人ノ別ヲ知ルベシ、君子ハ何事ニ臨ミテモ理ニ合フカ合ヌカト考テ、然ル後是ヲ行フ、小人ハ何事ニ臨ミテモ利ニナルカナラヌカト考テ、然ル後是ヲ行フ、故ニ君子トナルヿ難カラズ、今日大小ノ事ニ拘ラズ、理ハ如何、理ハ如何ト考テ是ヲ行フノミ、何ソ獨辭受取予ノミナランヤ、

第四章

牛羊ノ喩甚好シ、牛羊ハ人家ニ畜フ所ニシテ、一日モ牧ト芻トナケレハ濟マサルハ人〻知ル所ナリ、況ヤ民庶ニ至テハ牛羊ノ比スヘキニ非ス、而ルニ窮民街ニ叫ヒ、餓莩途ニ充ツレ𪜈、却テ是ヲ知ラス、是ヲ顧ミス、是大ニ怪ムヘキニ非ズヤ、是他ナシ、民ヲ視ルヿ牛羊ニ如カサルニ由ルナリ、噫民ヲ牧スル者、能ク牛羊ヲ牧スルノ心ヲ以テセハ、不仁ノ譏ヲ免レン歟、若夫罪ヲ知テ改メサル者ハ、眞ニ如何𪜈スヘカラサルノ人ナリ、人ノ患ハ罪ヲ犯シテ罪ヲ知ラサルニアリ、是誠ニ憐ムヘシ、今他人アリテ其罪ヲ告ケ知ラシム、其人自ラ罪ヲ知ル、而ルニ猶且改メズ、然レハ則又更ニ告クヘキ樣ナシ、世間ヲ歷覩スルニ如レ此ノ人甚多シ、共ニ忠孝仁義ノ美ナルヲモ知リ、不忠不孝不仁不義ノ惡ナルヲモ知リツレ𪜈、其行ヲ省ミレハ、一ツトシテ忠孝仁義ニ似タルヿナキ者アリ、是罪ヲ知テ改メサル者ニシテ、孔距心宣王ノ流ナリ、

第十四場　八月六日

第五章

辭三靈丘一、而請二士師一、

靈丘ハ下邑ナリ、其大夫ハ今ノ代官ノ類ニシテ、而モ常ニ治所ニ居ル、故ニ都城ニ遠クシテ、數〻得失ヲ上言スルヿヲ得ズ、故ニ士師ヲ請フ、士師ハ都城ノ官ナレハ、上言モ心ノ儘ナルヲ以テ之、（武帝元狩五年、初テ諫大夫ヲ置ク、是ヨリ以前ハ諫官ト云者ナキ故ニ）奏漢以前ハ諫官ト云者ナシ故ニ諸官皆上言スルヿヲ得シナリ、註ニ士師近レ王、得下以諫中刑罰之不レ中者上ト云、然レ𪜈士師ノ言フヿヲ得ル、恐クハ刑罰ヲ諫ムルニ止ラサルベシ、今既數月矣、未レ可二以言一與、

初心、固ヨリ国ノ利弊得失ヲ極言センカ爲ナリ、其官ニ拜スルニ至テハ、宜シク朝ニ拜シテ夕ニ言ベシ、然ルニ數月ニ至リテ曾テ一言ナキ者ハ、初テ官ヲ拜シ、未タ其職事ヲ通知スルヿ能ハズ、言ヲ発スルニ暇アラサルカ、又ハ同僚先官ヲ憚ル所アリテ、未タ発セサルカ、又ハ事ノ小ナル者ハ多ケレ𪜈、未タ言フニ足ラス、必其事ノ大ナル者ヲ待テ後言ント欲スルカ、大氐此三端ニ過キズ、孟子深ク蚳鼃カ心中ヲ推察シテ、未ノ字ヲ下スナリ、而ノ其注意ハ時ヲ待テ言ント欲セハ、言フヘキノ期アルヿナシ、事ノ大小ニ拘ラズ、一日モ早ク言ベシトノ事ナリ、言甚婉曲ニシテ意実ニ緊切ナリ、抑今ノ要路ニ當ル者モ亦未レ可二以言一與、余韓歐二家ノ文ヲ併セテ之ヲ叩ント欲ス、

第六章

王驩ハ齊王ノ嬖臣ナリ、孟子ノ副使トナリ、朝暮必ズ見ユ、是ヲ以テ孟子ノ德望貴重想フベシ、是他ナシ、孟子ノ仕ル、道ノ爲ニシテ身ノ爲ニ非ズ、孟子齊王ニ求ル所ナクシテ、齊王孟子ニ求ル所アルニ由ルナリ、是等ノ所ニ於テ聖賢ノ地位ヲ知ルベシ、而テ聖賢ヲ学フ者ノ期スル所、亦茲ニアラズヤ、

第七章

此章ニ於テ葬ノ道ヲ知ルベシ、君父ノ葬ハ臣子ノ宜シク心ヲ尽スヘキ所ナリ、一事ノ粗畧アルベカラズ、然𪜈其最

モ重スル所ハ棺椁ニアリ、棺椁ハ肌膚ヲシテ土ニ親近セシメサル爲ナレハナリ、其他観美ノ爲ニ靡麗ヲ尽シテ後、心ニ快シトスルハ大ニ非ナリ、是葬ノ道ナリ、然ルニ後世葬ノ道ヲ失ヒ、棺椁ノ中ヘ金銀珠玉珍器宝物ヲ入レテ埋ムル故、王公貴人ノ陵墓ハ世隔リ時換レハ、必ス盗賊ノ発掘スルトナリ、(秦ノ始皇、漢ノ光武等ノ陵皆然リ、)枯骨朽骸野ニ暴露シ、收拾セサルニ至ル、実ニ惨ムヘシ、且陵墓ノ制高大ニ過キ、民生ヲ役シ物力ヲ屈スル甚夥シキニ至ル、漢ノ張釈之(漢文帝三年)劉向(成帝永始元年)唐ノ虞世南(太宗貞観九年)令狐峘(論二代宗山陵一)宋ノ蘇洵(論二仁宗山陵一)等是ヲ論スル甚詳ナリ、就テ見ルベシ、(この割註は欄外に朱書してある)(作ル、亦是ヲ論スルナリ也、)俗人此義ヲ知ラズ、君父ノ葬ヲ論スルニ至テ、少シク裁節スル所アレハ、黜ケテ不忠不孝刻薄ノ人トナスニ至ル、故ニ人其非ヲ知ルト雖モ、敢テ是ヲ論スルヿ得ズ、殊テ知ラズ葬道ノ心ヲ尽スハ棺椁ニアリ、其他ノ観美ハ論スル所ニ非ス、孔子曰、喪與二其易一也寧戚ト、亦此義ナリ、

第八章

子噲不レ得レ與二人燕一、子之不レ得レ受二燕於子噲一、

註云、諸侯土地人民、受二之天子一傳二之先君一、私以與レ人、則與者受者皆有レ罪也、ト、此説極テ好シ、上天子ヨリ下士庶人ニ至ル迄、土地人民田宅皆已カ私有ニ非ズ、必ズ受ル所アリ、然ルニ一芥一毫ニテモ、私ヲ以テ人ニ與ヘハ、天地君父安ソ敢テ是ヲ怒ラサランヤ、故ニ天子ヨリ士庶人ニ至ル迄、土地人民田宅ヲ守テ、子孫ニ傳テ失墜セサルハ、忠孝両全ノ道ナリ、抑下田箱館ヲ擧テ墨夷ニ與ヘ、「クシンコタン」ヲ擧テ魯夷ニ與フル、吾其解ヲ知ラズ、噫亦受二之天子一傳二之先君一者カ、抑幕府ノ私有カ、

第九章

周公管叔ノ畔クヲ知ラサルハ、兄弟ノ至情已ムヲ得サルノ過ナリ、抑知ヲ好ム者ハ多クハ人ヲ疑フニ失ス、仁ヲ好ム者ハ多クハ人ヲ信スルニ失ス、両ナカラ皆偏ナリ、然ルニ人ヲ信スル者ハ、其功ヲ成スヿ、往々人ヲ疑フ者ニ勝ルヿアリ、是察セサルヘケンヤ、古今人ヲ信スルノ甚シキ者ハ、秦ノ符堅ニ如ハナシ、符堅慕容垂ヲ信スルノ甚シクシテ、遂ニ淝水ノ大敗アリ、是ヨリ大ニ国威ヲ失ヒ咲ヲ後世ニ貽ス、人皆是ヲ咎ム、余獨リ謂ラク、符堅ノ起ル王猛ヲ信スルノ深キニ由ル、王猛ヲ信スルノ心ハ、卽チ慕容垂ヲ信スルノ心、豈二アランヤ、慕容垂ヲ信セスンハ敗レサル如シト雖モ、又王猛ヲ信シテ興起ルヿ能ハズ、是ニ因テ之ヲ云ヘハ、其得失正ニ相償フニ足レリ、人ヲ疑フニ勝ルヿ固ヨリ万ミナリ、故ニ余寧ロ人ヲ信スルニ失スルモ、誓テ人ヲ疑フニ失スルヿナカランヿヲ欲ス、況ヤ骨肉至親ニ於テヲヤ、源頼朝二弟範頼義經ヲ信シテ平氏ヲ滅シ義仲ヲ誅ス、其是ヲ疑フヤ天下遂ニ北條ノ有トナル、豈千古ノ亀鑑ニアラスヤ、

第十章

欲下中国而授二孟子室一、養二弟子一以二万鍾一、使中諸大夫国人、皆有ㇾ所下矜式上、

是レ孟子ヲ待ツ所以ニ非ルヿ固ナリ、何トナレハ是時天下方ニ有爲ノ時ニ當レリ、而シテ孟子ハ乃チ有爲ノ人ナリ、有爲ノ時ニ當テ有爲ノ人ヲ捨ツ、其何ヲ以テ政ヲナサンヤ、抑今時ヲ以テ是ヲ言フニ、国ノ中ニ當リ大ニ養賢堂ヲ興シ(今ノ大学校ノ外、別ニ養賢堂ヲ興スト云ニハ非ズ、文ヲ以テ意ヲ害スルヿナカレ)天下ノ賢豪ヲ倩ヒ、尊テ師トシ、優スルニ厚祿ヲ以テシ、士大夫国人ノ秀

俊ナル者ヲ募リ、是ニ從ハシメハ、人才勃興日ヲ刻シテ待ツベシ、是余カ願欲スル所ナリ、然レ𪜈ニ一難アリ、令スル所ニ從ハスシテ好ム所ニ從フハ、人情ノ常然リ、故ニ天下ノ賢豪ヲ得ルト雖モ、君相眞ニ是ヲ尊奉シ、其言フ所ヲ信用スルニ非スンハ、士大夫国人誰カ敢テ之ヲ矜式センヤ、亦斉王ノ已ニ孟子ノ言ヲ用ヒズ、又其去ヲ耻チ、此已ムヲ得サルノ一策ヲナスニ同シキノミ、是亦知サルヘカラス、然ラハ則如何、曰ク近世米澤ノ鷹山公ノ紀平洲ヲ尊信スル如キ是ニ近シトス、

第十一章

子絶ニ長者一乎、長者絶レ子乎、

行ヲ留メント欲スル者、斉戒宿ヲ越、然ル後敢テ言フ、而シテ孟子一言ノ應モナク、几ニ隱テ臥ス、是俗論ヨリ云ハ、長者絶レ子ナリ、孟子ヨリ客ヲ絶ツナリ、然レ𪜈行ヲ留ル者慮ル一子思ニ及ハズ、是孟子ノ應セサル所以ナレハ、子絶ニ長者一ナリ、客ヨリ孟子ヲ絶ツナリ、世間ノ庸斯ノ如キ者甚多シ、大氐俗論ノ見ル所ハ、形ノ上ナリ、君子ノ論スル所ハ心ナリ、譬ハ今我レ巧言令色ヲ以テ人ニ親マント欲ス、人必ズ我ヲ容レズ、是我仁鮮キヲ以テナリ、然レハ人我ヲ容レサルニ非ス、我人ヲシテ容レシメサルナリ、是等ヲ以テ其他ヲ推知スベシ、抑余嘗テ深ク疑フ、今ノ世臣子思ノ如キ者ナキカ、君繆公ノ如キ者ナキカ、又君臣共ニナキカ、又君臣共ニアリテ未タ相遇サルカ、臣君ヲ絶ツカ、君臣ヲ絶ツカ、是遂ニ知ルベカラサルナリ、

第十四場上　八月九日

第十二章

此章ニ於テ仁人ノ心ヲ知ルヘシ、燕ノ樂毅カ所レ謂古之君子交絶不レ出二惡声一、忠臣去レ国不レ潔二其名一ト云モ此義ナリ、孟子平生斉王ヲ諫爭教戒スル者甚タ備レリ、而王曾テ是ヲ聽納セズ、故ニ孟子斉ヲ去ルヿ、常人ヲ以是ニ處セシメハ、必ズ怒罵シテ斎王ノ非ヲ数ヘ、自己ノ名ヲ衒セン、而シテ孟子斉ヲ去ル事ヲ記スル一、前後凡ソ五章、一言ノ怨怒ノ氣ナク、斉王ヲ謗刺スルノ言ナシ、其和氣藹然掬スル一餘アリ、且徒ニ言語ノ末然ルニ非ス、三宿晝ヲ出、濡滯ノ譏ヲ顧ミス、眞ニ國ヲ去リテ其名ヲ潔セズト云ヘシ、今世ノ君一事ルハ暫ク論セズ、請フ朋友ニ交ル所以ヲ論セン、朋友相交ルハ善道ヲ以テ忠告スル一固ナリ、而シテ朋友中不幸ニシテ狂悖ナル者アラハ、反復誨諭スベシ、必ズ已ムヲ得サルニ至テハ或ハ交ヲモ絶ツベシ、而ノ其間假令優柔不断一似タレ𪜈、敢テ是ヲ匆〻急遽ニセス、宜ク三宿晝ヲ出ルノ意アルベシ、況ヤ交既ニ絶ルニ至テ、惡声ヲ出ス一アランヤ、今世朋友ニ交ル者、善道ヲ以テ忠告スル者少シ、其過惡ヲ戒諭スル者最モ少シ、若或ハ私忿ニ因テ交ヲ絶ツニ至テハ、譬ハ怪々然見二於其面一、去則窮二目之力一而後宿ト云如ク、且怒リ且罵リ、毫モ生平ノ交態ヲ存セス、甚シキハ仇敵ヲ以テ是ヲ視ルニ至ル者往々然リ、其極情極レリ、少シク孟子ノ風ヲ学テ、忠厚ノ途ニ向ハセ度一ナリ、夫孟子ノ和氣ト、今人ノ薄情ト、其起ル所何事ソト尋ルニ、物ヲ愛スルノ心ト、己ヲ衒フノ心ト、其途ヲ異ニスルニ由ルナリ、然ラハ有志ノ士物ヲ愛スルヲ以テ心トシ、切ニ己ヲ衒フノ念ヲ禁遏スヘシ、

（原本には上欄にある）良三ノ道太ニ於ル常ニ不滿ノ者アリ、故ニ骨ヲ屢〻面二論之一、而忠二告之一、意未レ至、往々人ニ對シテ父之ヲ言フ、今此章ヲ讀ニ

眞ニ良三カ爲メニ云カ如シ、此カ爲メニ忸怩汗ヲ出サントス、此ヲ要スルニ才ヲ逞ミ己ヲ衒スルノ意未タ消尽スルニ至ラサル〻、眞ニ賜ノ辱キヲ拜ス（來原良三）

第十三章

彼一時、此一時也、

君子ノ心両般アリ、一般ハ己ヲ處スルナリ、其己ヲ處スルハ貧賤ノ極リ、艱難ノ甚シキト云ヒ、雍々是ニ處リ、一モ天ヲ怨ミ人ヲ尤ムル所ナシ、一般ハ世ヲ憂ルナリ、其世ヲ憂ルハ天下ヲ視ルヿ吾家ノ如ク、万民ヲ視ルヿ吾子ノ如ク、世乱レ民苦ムヲ視テハ、食テ味ヲ甘セス、寢テ席ヲ安ンセサルニ至ル、彼一時、此一時也ト云ハ、此両般ナリ、然レヒ両般実ハ一般ナリ、何トナレハ、己ニ在テ貧賤艱難心ニ関ルヿナシ、故ニ天下万民ヲ視ルヿ、吾家吾子ノ如キニ至ル、天下万民ヲ視ルヿ吾家吾子ノ如シ、故ニ貧賤艱難心ニ關ルヿナキニ至ル、若夫情ヲ好、爵ニ牽サレ、涎ヲ美利ニ流スノ徒、安ソ天下万民ヲ顧ル者アランヤ、故ニ云ク両般実ハ一般ナリ、

第十四章

孟子初テ王ニ見テヨリ、已ニ去志アリ、故ニ祿ヲ受ケズ、是ヲ以テ古人苟モ祿ヲ受サルヿヲ知ルヘシ、韓信言アリ、乘二人之車一者、載二人之患一、衣二人之衣一者、懷二人之憂一、食二人之食一者、死二人之事一、故ニ仕テ祿ヲ受レハ、此身ヲ擧テ君ニ献ス、君ノ爲ニ用ニ供スルヿナカルヘケンヤ、是古人祿ヲ受ルノ苟モセサル所以ナリ、今世清平ノ深澤ト、祖先ノ餘恩トニ因リ、許多ノ俸祿ヲ賜ヒ、其初ヲ知ラズ、其受ルノ苟モスベカラサルヲ知ル者少シ、此等ノ章ニ於テ、宜シク感悟スル所アルベシ、

右下篇凡ソ十四章、朱子曰、自二第二章一以下、記二孟子出處行実一爲レ詳、今案スルニ第二章孟子自ラ処スル所ト時君ニ望ム所見ルヘシ、第三章自ラ処スルナリ、四章時君ニ望ムナリ、五章六章七章並ニ自ラ居ルナリ、八章九章ノ間、梁惠王下篇ノ十章十一章ヲ加ヘ共ニ四章敍事相承ケ、伐レ燕ノ始末甚タ備ル、亦時君ニ望ムナリ、以下五章又敍事相承ケ去レ斉ノ始末甚タ備ル、亦自ラ処ナリ、就レ中第十三章尽心下篇ノ末章ト大意同フシテ文少ク省クノミ、是孟子深慨ノ在ル所ニシテ、此篇ヲ記スル所ノ出處行実ヲ結フナリ、末章暗ニ第十二章不レ識二王之不一可下以爲中湯武上則不明也、ノ意ヲ照シ、孟子固ヨリ已ニ王ノ湯武タルヘカラサルヲ知ルト雖ヒ、亦倖々然タル小人ノ行ヲ爲スニ忍ヒスヽ、心ナラズ斉ニ久カリシトヽ、是此篇ノ大條理ナリ、但疑ヘキハ、首章天時地利人和ノ論、他ノ章ニ於テ曾テ關係ナキヲ覚フ、或ハ錯簡アランモ未タ知ベカラズ、

第十三場下　八月九日　同　四日

滕文公上

首章

若藥不瞑眩、厥疾不瘳、

此言実ニ是吾輩ノ良藥是ニ過ルヿナシ、但シ此藥瞑眩スル所以ニ至テハ、眞ニ志ヲ立ル者ニ非レハ、知ルヿ能ハズ、請フ試ニ是ヲ言ン、今常人ノ通情ヲ察スルニ、善ヲ好ミ惡ヲ惡ムハ固ナレ𪜈、大氐十人並ノ人トナラント思フ迄ニテ、百人千人万人ニ傑出セント思フ者更ニ少シ、堯舜文王ハ万世ニ傑出スル人ナリ、今遽ニ是ヲ師トセントスルハ瞑眩ノ藥ニ非スヤ、滕ハ五十里ノ小国ニシテ、斉楚強大ノ国ニ間レリ、其自ラ存スル且難シトス、今乃チ是ヲ謂テ善国トナスヘシト云、亦瞑眩ノ藥ニ非スヤ、然レ𪜈常人ノ情トシテ、自ラ行フヲ勤メス、好テ無當ノ大言ヲナシ、聖人トナルモ、善国トナスモ、茶漬ヲ食フ如クニ言者多シ、亦烏ゾ此藥ノ瞑眩ヲ知ルヿヲ得ンヤ、吾輩自ラ反シテ是ヲ思フ時ハ、汗背撮面自ラ容ル、所ナシ、是実ニ吾輩ノ良藥ナルカナ、

（原本には上欄にある）言行一致ノ人ハ固ヨリ少ナキ也、而ノ之ニ次ク者ハ大言ノ者ニアリ、大抵今世之弊、志ノ高キニ非スシテ低キニアリ、論ノ大ニアラスシテ小ニアリ、今足下聖人善國ヲ以テ茶漬ヲ食フニ比スル者多シト云、不レ知何人カヨク此言ヲ出スヤ、予願ハクハ此人ト相對シタキ之、言、行ヲ掩ハサル者ハ古人ノ棄スシテ頌賛スル処之、豈足下云処ノ大言スル者ト違フ乎、タトイ少シノ違イハアリト云𪜈、予則此人ヲ得ント欲ス、（來原良三）

第二章

三年ノ喪ハ三代ノ通用スル所ナルニ、滕ノ百官族人、却テ魯ノ先君モ吾先君モ之ヲ行フ者ナシト云ハ何ソヤ、云ク、是今ノ事情ヲ以テ推セハ得ベシ、且本藩ノ事ヲ以テ言フニ　烈祖三靈ノ建置給フヿハ、実ニ千百世ノ重典ト云ヘシ、然𪜈今直ニ之ヲ行ハヽ、俗吏古ニ通セサル者ハ、必ズ駁シテ先例旧格ニ非ズトセン、殊テ知ラス俗吏ノ先例旧格トスル所ハ、多クハ後世沿習ノ流例ニシテ、眞ノ重典ニ戻ルヿ亦少カラズ、　烈祖以來僅ニ二三百年、已ニ斯ノ如シ、況ヤ周家天下ヲ治ルヿ七百餘年、天下方ニ爭戰ノ場トナル時ニ當テ其謬妄是ニ至ル、何ソ怪ムニ足ラン、故ニ守成ノ君ノ貴フ所ハ、務テ祖宗ノ遺訓ニ遵ヒ、邦家ノ旧章ニ率ヒ、紛更変乱ノ漸ヲ杜クニアリ、学者モ亦茲ニ注意スベシ、

此章孟子對フル所ノ主意ハ自盡ノ二字ニアリ、故ニ初對ニ口ヲ開キ即チ是ヲ言フ、次對ニ不レ可ニ以求ニ他者也ト云、在ニ世子ニト云、世子是ヲ開（聞カ）キ誠在レ我ト云ニ至テハ、既ニ孟子ノ意ヲ領ス、宜ナルカナ能ク三年ノ喪ヲ成スヿ、然𪜈其論獨リ喪事ノミニ非ス、萬事皆然ラサルヿナシ、故ニ孔子曰爲レ仁由レ己而由レ人乎、誠カナ此言ヤ、喪行ハ（此の割註は欄外に朱書）宜王ノ短喪ヲ問フヿアリ、此類ヲ以テ此章ニ合セ考フルニ、三年ノ喪上ヨリ先廢シテ下是ニ從フナリ、三代以下、晉ノ武帝、元魏ノ孝文、南宋ノ孝宗ノ如キ、三年ノ喪ヲ行フノ君三數人ニ過キズ、此時ニ當テ其臣下徒ニ其美ヲ將順スルヿ能ハサルノミナラズ、又從テ俗論ヲ造作シテ是ヲ沮敝スルニ至ル、乱法ノ類蹤是ニ至ル、実ニ歎息ニ餘リアルヿ之、然レハ後世士君子、宜シク外習俗ニ從ヒ、内心制ヲ持スルアルノミ、近世儒先往々是ヲ行フ、実ニ歎仰スヘキヿ之、吾知ル所江戸ノ人斎藤彌九郎ノ如キ、母ヲ喪ノヨリ三年、未タ嘗テ酒肉ヲ御セズ、余深ク其操持ニ服ス、蓋シ其師水府藤田氏ノ教ヲ奉スルナリ、先師山鹿素行先生甚名ヲ立、俗ヲ駭スヿヲ惡ム、其父ノ喪ヲ操ル、五十日ニシテ酒肉ヲ御ス、蓋シ母氏ノ心ヲ慰セン爲ニ曲ケテ習俗ニ從フナリ、然𪜈百日ニ至ルマテ、酒肉ヲ御スルヿ僅ニ三度ノミ、而ノ皆已ムヲ得サルニ迫ルナリ、

第十五場　八月十二日

第三章

有三王者起、必來取レ法、是爲三王者師一也、

君子ノ政ヲ爲スハ、我一国ノ爲ノミニ非ズ、天下後世ノ法トナランヿヲ要ス、若シ天下後世トナリ大ニ行ル、時ハ、何必シモ己ヨリ出自ラ爲スニ誇ルヿヲナサンヤ、近世水府ノ景山公ノ諸政ヲ更張スルヤ、他邦ヨリ來テ法ヲ取ル期セラレシ故、他邦ヨリ來テ其政ヲ問ヒ其法ヲ観ント欲スル者アレハ、必ス襟胸ヲ開テ情実ヲ吐テ是ニ示シ、又其論説スル所ヲ取テ国政ニ施用セラレシト聞ク、実ニ志アリト云ヘシ、余近日諸藩ノ政ヲ爲スヲ觀ルニ、大氐目前ノ計ヲ爲スノミ、未タ天下後世ノ爲ニ志ヲ立ル者ヲ見ス、方今國歩艱難ノ際ニ當レリ、士教民政ヨリ軍防兵備ニ至ル迄、悉ク其至當至精ノ所ヲ究メ是ヲ行ハヽ、天下必ス來テ法ヲ取ラン、是天下ノ師トナルナリ、此事是人君天地ニ事ルノ誠心ヨリシテ成ル所ニシテ、區々功利ノ論ニ非ス、嗚呼是ニ非レハ遂ニ其国ヲ新ニスルニ足サルナリ、

死徙無レ出レ鄉、鄉田同レ井、出入相友、守望相助、疾病相扶持、則百姓親睦、

此章大意井地穀禄学校ノ三件ニアリ、分テ前後二段トス、前段ハ直ニ文公ニ答フ、井田学校ノ大意ヲ言フ、世禄ハ滕固ヨリ之ヲ行フト云テ、穀禄ノ一件ヲ略ス、後段ハ畢戰ニ答フ、井地穀禄ノ詳ヲ言フ、學校ノ事ハ明言セス、百姓親睦ト云内ニ籠テ言ナリ、是全章ノ大意ナリ、而テ其尤モ熟味スヘキハ此一節ニアリ、蓋シ井地穀禄学校ノ事ハ、皆制度ニ關係スルヿナレハ、容易ニ議スヘキニ非ス、唯此一節ハ其行フヘキノ実ヲ云、尤モ親切著明ナリ、今世ノ制、民間ニモ士林ニモ伍組ノ法ハアルヿナレハ、此法ニ因テ此意ヲ行ヒ度ヿナリ、横渠先生学者ト議シ、田地ヲ買ヒ画シテ数井トナシ、経界ヲ正シ宅里ヲ分チ、歛法ヲ立、儲蓄ヲ廣メ、学校ヲ興シ礼俗ヲ成シ、菑ヲ救ヒ患ヲ恤ヒ、本ヲ厚シ末ヲ抑ヘバ、亦以テ先王ノ遺法ヲ推シテ、當今ノ行フヘキヲ明ニスルニ足ラントノ志アリシ由、圈中ノ註ニ見ユ、實ニ尤ナルヿナリ、余ヲシテ横渠ノ時ニ生レシメハ、必ス此事ヲ成サン者ヲト思ヘヒモ、幽明道遙ニシテ詮方ナシ、況ヤ今囹圄ノ囚トナリ、志アリト云ヘ共遂グヘキ様ナシ、徒ニ横渠ノ説ヲ読テ感涙胸ヲ沾スノミ、但横渠ノ説ハ田ヲ画シ井トナスカ最モ用意ノ所ト見ヘタリ、仁政ハ経界ヨリ始ルトアレハ、此事固ヨリ要務ニハアルヘケレト、是ハ法制ニ係リタルヿニテ、萬一人情ニ合シ土俗ニ宜カラヌヿアレハ、大ニ民間ヲ擾乱スルニ至ル、故ニ夫ヨリハ此一節ニ云所ノ実ヲ主トシテ行ヒ度ヿナリ、

（原本には本章後半の上欄にある）

朝廷ニ在テ百官肅ミ、邊鄙ニ在テ四夷畏ル、不レ可レ爲ノ時ナク、不レ可レ爲ノ事ナキハ足下ノ常ニ言フ処ニシテ、今則囹圄ノ囚トナルヲ嘆ス、議論先後相遇ハサル者アルニ似タリ、或ハ別ニ感スル処ノ者アル乎、大抵事ハ類ヲ推スニアリ、朝廷ト邊鄙ト既ニ類ナリ、邊鄙ト囹圄ト類ニ非スト云ヲ得ンヤ、足下ニシテ此言ヲ発セハ、人ミヲソ皆當職トナリ御用処トナリテ、而後道ヲ行ハント言シメン、議論頗ル刻ニ渉レモ、立言ノ弊大ニ氣魄ヲ損スルニ至ル、宜シク之ヲ省スヘシ、

又云、僕実ニ足下ノ此言ヲ出スヿナキヲ欲ス、然リト云ヒ足下モシ人ヲ責ルノ深クシテ、自ラ責ルノ淺シト云テ以テ良三ヲ責ハ、良三モ亦一言ナキナリ、（來原良三）

第十六場　八月十六日

第四章

有ㇾ爲二神農之言一者許行一、

許行ハ農家者流ニテ上古神農ノ言ヲ称述スル者ト云ヘリ、蓋シ周ノ衰ル、人君坐ナカラ富貴ニ生長シ、飽食煖衣シテ、民事ヲ以テ念トセサルト、世澆季ニシテ風俗偷薄ナルトヲ憤リ、其弊ヲ矯ント欲スルノ心切ナルニ因テ、與レ民並耕、市買不レ貳ナト、、過當ノ論ヲ発スルノミ、故ニ先ツ許行カ心ヲ察シ、然ル後孟子ノ論ヲ讀ムヘシ、孟子ノ論ハ人君ノ職重キ、耕且爲スヘキニ非ルヲ云、民ヲ教養シ風俗ヲ厚スルノ道其骨子タリ、故ニ許行畢端ト雖ㇾ、其用意ハ亦憐ムヘシ、若シ人君孟子ノ說ヲ行フヿ能ハスシテ、一概ニ許行ヲ非トセハ大ニ非ナリ、

有二大人之事一、有二小人之事一、

大人ノ事ハ勞レ心治レ人食二於人一ナリ、小人ノ事ハ勞レ力食レ人治二於人一ナリ、凡人ニ四等アリ、士農工商ト云、就レ中農工商ヲ国ノ三宝ト称シ、各其職業アリテ、国ニ於テ一モ欠ベカラズ、独士ニ至テハ三者ノ如キ業アルヿナシ、而ノ其職業ヲ思ハス、厚祿ヲ費シ衣食居ノ奢ヲ窮メ、敖然トシテ三者ニ驕ルハ、豈畏多キヿニ非スヤ、故ニ士ト生レタル者ハ、文武ヲ修熟シ、治乱ノ御奉公ヲ心掛ヘキヿ固ヨリ、但吾輩已ニ幽囚ノ身トナリ、此等ノ事ヲ語ルモ空談ニ近シ、而ノ大ニ然ラサル者アリ、者アリ何トナレハ、今日食フ所ノ食、衣ル所ノ衣、用ユル所ノ器、皆是国家ノ餘沢ニ非スヤ、而シテ我レ農工商ノ業ヲナシテ、以テ国恩ニ報スヘキノ身ナラテハ、亦唯書ヲ読ミ道ヲ講シ、忠孝ノ一端ナリ𪜈研究シ、他日ニ報スルヿヲ忘ルヘカラス、士ハ三民ノ首ニシテ、君ハ又諸士ノ長ナレハ、其自ラ養フ益ミ厚ク、自ラ職トスル益ミ重シ、食二於人一ルノミニテ、勞レ力(心カ)治レ人ヿナクンハ、其何トカ云ン、是レ許行カ說ノ

已ムヲ得サル所ナリ、

當堯之時云々、

堯ノ天下ヲ治ムルノ功序先ツ舜ヲ擧テ政治ノ大体ヲ謀議ス、次ニ益禹ヲ用テ民ノ爲メニ害ヲ除キ、稷ヲ用テ民ヲ養ヒ、契ヲ用テ民ヲ教、是某大体ヲ、噫亦至レリ尽セリ、後ノ政ヲ爲スモノ大体ヲ立テスシテ瑣事末節ニ汲ミタル、何ソ能成就スル所アランヤ、況ヤ人ヲ擧用スルヿヲ勉トセス、勞シテ功ナキ者往ミ皆然リ、又司徒ノ職ヲ論スル所万古人道是ニ尽ク、放勳ノ語、万古教道是ニ尽ク、所謂在寛ナリ、玩味シテ一字ニテモ疎カニ読ムヘカラス、

（原本には本章後部の上欄にある）

此論奇妙至レリ尽セリ、但シ堯天下ヲ治ムルノ功ノ字次第又ハ次序トナリトモセハ最モ可ナランカ、

又云ク政治ノ大体ヲ謀議スルハ地江戸御相談役ヲ、民ヲ養フ者ハ郡奉行ニノ、民ヲ教ル者ハ明倫館學頭也、而ノ民ノ害ヲ除ク者或ハ名ツケテ奸物退治方トモ云フヘキカ、世人聖賢ヲ以テ天上間ノ者トナスナクンハ、何ソ國ノ治ラサルヲ患ン、何ソ天下ノ治ラサルヲ患ン、（來原良三）

禹八二年於外一、三過二其門一而不レ入、

禹ノ水ヲ治ムルヤ、塗山ニ娶リテヨリ僅ニ四日ニシテ家ヲ出ツ、其子啓生レテ呱々トシテ泣ク、声外ニ聞レ𪜈、敢テ門ニ入リ是ヲ顧ミス、且山川跋渉ノ勞ニテ、手足胼胝シ脛ニ毛ナキニ至ル、其勞亦甚シト云ヘシ、昔シ聖人ノ天下ノ爲ニスル是ノ如ク、然ルニ後世人君生レテハ逸シ生レテハ逸シテ、カヽル艱難ノ事ヲ夢ニモ知ラズ、実ニ勿体ナキヿナリ、且本藩　烈祖ノ如キ、沐雨櫛風ノ勞、甲冑生蝨ノ苦、大小二百五十度若クハ三百度ニ及フノ戰場ニ臨ミ玉フヿ、実ニ夏禹八年ノ勞ニ過ト云ヘシ、今臣子タラン者此恩ヲ思ハヽ、少シク自ラ省ル所アルヘシ、禹ノ勞ニ

感シテ遂ニ是ニ及フ、亦是情ノ已ムヘカラサルナリ、

吾聞ニ用レ夏変レ夷者一、未レ聞下変ニ於夷一者上也、

夏夷ノ弁君子ノ慎ム所ニシテ、孟子ノ論深ク春秋ノ意ヲ得タリ、春秋ノ法、諸侯ニシテ夷狄ノ礼ヲ用ユレハ是ヲ夷狄ニス、夷狄ニシテ中国ニ進メハ是ヲ中国ニス、故ニ春秋ノ夷狄ヲ疾ムハ純ラ夷狄ナルヲ疾ムニ非ス、中国ヲ以テシテ流レテ夷狄ニ入ルヲ悪ムナリ、今許行・陳良・陳相辛・皆楚人ナリ、（相辛ハ楚人カ未詳、宋ヨリ滕ニユクト云ヒ、恐クハ宋人ニ非ス、陳相ノ徒ナレハ亦楚人ナルベシ、）楚ハ南蛮ナリ、而ノ陳良ハ中国ニ進ム者ナリ、故ニ孟子是ヲ許スニ豪傑ヲ以テス、陳相ハ夷狄ニ入ル者ナリ、故ニ是ヲ責ルモ曾子ニ異ナルヲ以テス、許行ニ至テハ夷狄ヲ以テ中国ヲ変セント欲スル者、最モ孟子ノ悪ム所ナリ、故ニ南蛮鴂舌ノ人ト云、其是ヲ斥ル甚厳ナリ、是等ノ議論方今ニ在テ大ニ関係アリ、深察スヘシ、欧墨ノ学ヲ修メ夷狄ヲ尊崇歆慕スル者ハ、小ハ即チ相辛ナリ、大ハ即チ許行ナリ、最モ辨拒スヘシ、然夷ノ礮碩船艦、医薬ノ法天地ノ学、皆吾ニ於テ用アリ、宜ク採択スヘシ、其　皇國ノ用ヲ成スニ至テハ、亦夷狄ニシテ中国ニ進ムト云ヘシ、尚其術夷狄ニ出テ其人夷狄ニ生スルヲ以テ是ヲ疾マハ、孟子何ソ陳良ヲ称美スルヿヲ得ンヤ、古ノ賢君、人ヲ用ユル、夷狄ノ人ト云ヒ、賢ナル者ハ敢テ捨テス、秦ノ穆公ノ由余ヲ用ユルカ如キ、（用ヒ、漢ノ武帝ノ金日磾ヲ）其例少ナカラス、何況ヤ其術ヲヤ、若其人果ノ夷狄ノ心ヲ挾ミ、其術果ノ中國ニ益ナクノ損アレハ、速ニ是ヲ誅斬センノミ、速ニ是ヲ禁遏センノミ、故ニ夷狄ニノ中国ニ進ムト、中国ニシテ夷狄ニ流ル、トノ差別ヲ明ニスルヿ最急トス、余カ米利幹ニ往ント欲スル、吾師象山余ニ謂フ、此任深ク忠義ノ志ヲ蓄ヘ国ノ恩義ヲ知ル者ニ非サレハ、必ス大害ヲ生スルニ至ル、足下誠ニ其任ニ當レリト、吏ニ對スルニ方テ、数〻是ヲ言フ、余固ヨリ其任ニ當ルニ足ラサレヒ、象山春秋孟子ニ於テ尤モ深シ、其亦是等ノ論ニ於テ感スル所アルカ、

（原本には本項の上欄にある）此論最モ審説詳明セサルヘカラス、國體ヲ以テ言ヘハ我ハ中國ニシテ、西洋ハ固ヨリ漢土ト云ヒ蕃ム、蠻ム、夷狄ナリ、何ソ其中ニ就テ差別アラン、條理ヲ以言ヘハ四書五經ハ治國ノ綱ニシテ礮書、究理書、造艦書、孰レカ其目ニ非サラン、多言ヲ費サス、舜ノ人ニ取テ善ヲ爲スノ意ヲ推サハ、絶テ豪厘ノ礙滯ナシ、不然シテ外國ノ書一切之ヲ絶ツト云ワハ、先ツ四書五經ヨリ始メテ則チ可ナリ、實ニ天下愚人ノ多キニ絶ヘス、何卒五大洲中ノ大醫手ヲ倚ヒ、消愚丸ト云藥ヲコシラヘ、北陸道ノ木ヲ伐テ琵琶湖ノ水ヲ煎シ、中ニ生忠義一片ヲ加ヘ、飽マテ天下ノ人ニ飲マシメタキヿ〻、（東原良三）

孔子沒三年外、門人治レ任將レ帰、

師ノ爲ニハ心喪三年スルヿ是古ノ制ナリ、孔門諸子ノ如キハ、三年ノ間孔子ノ家ニ留リテ喪ヲ勤メタルト見ユレハ、其厚キヿ知ルヘシ、実ニ後世ノ及フ所ニ非ス、後世師道敗壞ス、唐ノ韓愈師説ヲ作リテ救フヿ能ハズ、本邦太宰徳夫モ亦師説アリ、而シテ近時ニ至リ師道益〻廃ス、余因テ其源ヲ洞察シ、亦一説ヲ得タリ、大氏師ヲ取ルヿ易ク師ヲ撰フヿ審ナラズ、故ニ師道軽シ、故ニ師道ヲ興サントナラハ、妄ニ人ノ師トナルヘカラス、又妄ニ人ヲ師トスヘカラス、必ニ眞ニ教ユヘキヿアリテ師トナリ、眞ニ学フヘキヿアリテ師トスヘシ、熊沢了介ノ中江藤樹ヲ師トスルカ如キハ、師弟共ニ各其道ヲ得ルト云ヘシ、且道ハ古聖賢大氏言尽セリ、行尽セリ、今ノ学者、多クハ其書ヲ觀テ口眞似ヲナスノミ、別ニ新見卓識古人ニ駕出スルアルニ非ス、然レハ師弟共ニ諸共聖賢ノ門人ト云者ナリ、同門

人ノ中ニテ妄ニ師ト云ヒ弟子ト云ハ、第一古聖賢ヘ對シテ憚多キヿナラズヤ、佐藤直方ノ師道ヲ以テ居ラサル、実ニ感スルニ餘アリ、此等ノ事モ世道名教ニ關係スルヿ少カラズ、詳ニ諸君ト議セント欲ス、

第五章

天之生レ物也、使二之一一本而夷子二レ本故也

一本二本ト云ヿ、誠ニ切要ノ事ナリ、天地ノ常理　皇国ノ大法ニメ、漢土聖人ノ至教ナリ、事〻物〻ニ就テ熟考スヘシ、今條目ヲ左ニ列ス、一ニハ神器ト正統ト、善ク見サレハ二本ニナルナリ、此事先輩栗山潛鋒三宅觀瀾ノ論アリ余亦一説アリ別ニ著ス、二ニハ父子ト君臣ト、善ク見サレハ二本ニナルナリ、三ニハ養父ト実父ト、（〇この割注、爲二人後者一、爲二之子一故爲ク）善ク見サレハ二本ニナルヘシ、迂儒漢土ニ負最シ、奸僧ノ釈迦ニ荷擔スル、皆是ナリ、（欄外朱書）所謂後服ニ斬衰三年、而辟ニ其父母ノ喪一、明下尊ニ本統一而重ニ正統一也、是皆父養父ノ義也、）然トモ近世文明ノ化行レ、聖賢ノ道ニ志ス者、絶テ此弊ナシ、近頃浮屠廣淵ナル者ノ護法小品ヲ読ムニ、△其論甚タ善シ、△佛者ノ見果メ皆渠カ如クナレハ、二本ノ患ナシト云ヘシ、凡一本ノ誤テ二本トナルヿ、此四ツノ外千百限リナシ、今特ニ其大ナル者ヲ舉ルノミ、且四ツノ者其説甚長シ、就レ中父子君臣ト並ヒ立ツ時ハ、大氐君臣ノ方ヲ重トス、事急勢迫リ忠孝両全シ難キニ臨ミ、誤ルヿナカレ、唐ノ李璀、其父懐光ノ將ニ反セントスルヲ密ニ德宗ニ言フ、（此時ニ方テ君重シ、）懐光死スルニ及ンテ、璀先ツ二弟ヲ及シテ自殺ス、（此時ニ方テ、父ニ後レテ独リ生クヘカラス、）楚ノ令尹子南、罪ヲ以テ誅セラル、其子棄疾、父ヲ棄、讎ニ事ルニ忍ヒスシテ自殺ス、（君ハ讎トスベカラズ、況ヤ父ノ死、罪ヲ以テスルヲヤ、）然レトモ父ノ死ヲ救フヿ能ハスメ獨リ生クベカラズ、是皆善ク處スト云ヘシ、義朝保元ノ乱ニ父爲義ト戰フ、是王事ナリ、（此時君重シ、父ヲ顧ルヿヲ得ス、）後遂ニ父ヲ誅スルニ至テ悪逆更ニ論スルヲ待タズ、（此時ハ父ト死ヲ同スヘシ）北條氏直ノ臣松田英春ト云者アリ、其父憲秀敵方ヘ内通ス、英春號泣シテ固ク諫ム、憲秀聽カス、英春窃カニ氏直ニ誓ヘ、父ノ死ヲ宥メンヿヲ誓テ後是ヲ告ク、氏直誓ニ負キ、憲秀ノ死ヲ宥セス、是英春モ亦善ク處スト云ヘシ、（此時君重シ、）而メ英春其父ニ從テ死セズ、又北条氏ノ爲ニモ死セズ、剩ヘ後來前田氏ニ事フ、此大罪宥スベカラズ、此類甚タ多シ、熟考スベシ、養父実父並ビ立ツ時ハ、又養父ヲ重シトス、雖然、君父ト云ヒ養実父母ト云フ、軽重アリト云ヒ些ノ間テノミ、要レ之皆其爲ニ吾死ヲ致スヘキ所ナレハ、一旦ハ重キ方ノ爲ニ、軽キ方ヲ棄テ顧ミサルヿモアレトモ、其事終ル時ハ、又前ノ罪過ヲ償フヘキヿ固ナリ、義朝英春ノ如ク、父ヲ死セシメテ子独リ生テ居ルヿ、実ニ天地ニ容レサルノ大罪ト云ヘシ、是皆事急勢迫リタル時ノ事ナリ、宜シク平日ニ講論シテ、時ニ臨テ誤ルヿナカレ、猶此他云ヘキ者多ケレトモ別ニ論スヘシ、

蓋有下上世嘗不レ葬二其親一者上云々、

此一節親ヲ葬ルハ人ノ至情ニ原クヿヲ論ス、蓋シ情ノ至極ハ理モ亦至極セル者ナリ、余常ニ謂ラク、凡百ノ事皆情ノ至極ヲ行ヘハ、仁用ユルニ勝ユヘカラズ、特ニ葬祭祈禳等ノ事皆至情ニ出ツルナリ、夫人死スレハ魂ハ天ニ帰シ魄ハ地ニ帰ス、葬ルト葬ラヌト、祭ルト祭ラヌト、死人ノ心ニ於テ曾テ關係アルヿナシ、然ルニ人ノ情トシテ、死タリトテ死セリトスルニ忍ヒス、亡タリトテ亡タリトスルニ忍ヒス、父ノ植置タル桐梓ヲ見テサヘ、恭敬ノ念起リ、父ノ手澤ノ存スル書、母ノ口澤ノ存スル梧槚ヲ見テサヘ、読ムニ忍ヒス飲ムニ忍ヒサルハ皆人情ナリ、況ヤ父母ノ骸骨ヲ葬サル者アランヤ、父母ノ墳墓宗廟ヲ祭ラサル者アランヤ、故ニ葬祭ハ皆人情ナリ、人情ハ愚ヲ貴フ、益〻

愚ニシテ益至レルナリ、若シ智ヲ貴ヒ理ヲ以テ言フ時ハ、死人ノ骸骨ハ魂魄已ニ去ル、原野ニ投スルモ可ナリ、狐狸ニ飽シムルモ可ナリト云ニ至ル、而メ人情ヲ如何セン、又或ハ葬サレハ精靈ガ迷フト云ヒ、祭ラヂハ罰ヲ蒙ルノ、禍ヲ受ルノト云ハ、人情ニ似タレモ、畢竟己カ利害禍福ヨリ起ル所ノ見ニシテ、亦人情ノ至極ニ非ス、祈禱ノ事ニ至テハ余別ニ論ス、故ニ茲ニ贅セズ、

上篇凡ソ五章此篇王政ヲ論スルヿ最モ詳ナリ、就レ中第三章ハ王政ノ正面ナリ、第四章ハ許行ノ異說ヲ破ルナリ、而メ王政ハ親ニ孝スルヲ以テ本トス、因テ第二章先ツ三年ノ喪ヲ論シ起トシ、第五章墨者ノ異說ヲ破リ結トス、其首章ニ於テハ、学問政事皆聖人ヲ以テ師トスヘキヿヲ論シ、全篇ノ発端トス、是上篇五章ノ脉絡ナリ、

第十七場　八月廿一日

滕文公下

首章

志士不レ忘レ在二溝壑一、勇士不レ忘レ喪二其元一、

書ヲ読ムノ要ハ、是等ノ語ニ於テ反復熟思スヘシ、志士トハ志達アリテ節操ヲ守ル士ナリ、節操ヲ守ル士ハ、困窮スルハ固ヨリ覚悟ノ前ニテ、早晩モ飢餓シテ溝谷ヘ轉死スルヿヲ念テ忘レズ、勇士ハ戰場ニテ撃死スルハ固ヨリ望ム所ナレハ、早晩モ首ヲ取ラル共顧ミサルヿヲ念テ忘レス、苟モ士ト生レタラン者ハ、志士勇士トナラスンハ、耻ヘキノ甚シキ者ナリ、今吾輩囚繫ニ陷リ、將ニ身ヲ終ントス、是レ宜シク志士ノ節操ヲ心掛クヘシ、溝壑ヲサヘ忘レサレハ、生ヲ囹圄ニ終ルトテ、少モ頓着ハアルマシ、却テ本望トスル所ナリ、此志一タヒ立テ、人ニ求ムルヿナク世ニ顧フヿナク、昂然トシテ天地古今ヲ一視スヘシ、豈愉快ナラスヤ、吾学茲ニ進マハ、事ニ臨ンテ亦豈勇士ナル者ニ後レンヤ、抑虞人サヘモ志士勇士ニ比肩スルヿヲ得ル者アリ、然ルニ士大夫トメ、却テ虞人ニ比スルヿヲ得サルハ、將何ノ面目カアル、

枉レ己者未レ有二能直一人者一也、

此語誠ニ切実ト云ヘシ、全章ノ議論此一轉ニ至リ、皆是脱卸(却カ)スルナリ、世ノ政ヲ爲ス者、大氐己カ身心ニ原クルヿヲ知ラズ、文武ヲ興シ節儉ヲ崇廉耻ヲ勵スナト云類、号令篠(ミ)ノ如ク下レモ、悉皆張釈之所レ謂具文トナリ、毫モ其效ナキ者ハ、人心ハ上ノ令ニ從ハスシテ、上ノ好ミニ從フ者ナルヲ以テナリ、今在上ノ君子眞ニ能ク斯ニ心付キ、晏安偷惰ノ欲ヲ絶チ、身ヲ戰場ニ置クノ思ヲナシ、以テ率ヒ先ンスル時ハ、令セスメ下民自ラ從フヘシ、誰一人此義ヲ以テ明主ノ前ニ陳說スル者ナキヤ、悲カナ、

第二章

居二天下之廣居一、立二天下之正位一、行二天下之大道一、得レ志與レ民由レ之、不レ得レ志獨行二其道一、富貴不レ能レ淫、貧賤不レ能レ移、威武不レ能レ屈、此之謂二大丈夫一、

此一節反復熟味スヘシ、我党平生ノ志ス所此外他事ナシ、今悉ク其義ヲ釈セズ、

第三章

古之人未嘗不欲仕也、又惡不由其道、

此章ノ主意此二句ニ帰ス、而シテ更ニ是ヲ約スル時ハ、道ニ由ルノ一言ニ止ルナリ、首章二章ト互ニ相発明ス、首章ノ主意ハ枉道ノ非ヲ論スルニ、第二章ハ順ノ一字ヲ以テ衍儀カ大丈夫ニ非ルコトヲ明ス、然レハ三章共ニ、道ニ由テ少シクモ枉ケス、少クモ順ハヌヿヲ云ナリ、其所謂道ハ卽チ二章ノ廣居正位大道ナリ、卽チ仁礼義ナリ、聖賢ノ千言万語豈復タ他アランヤ、之ヲ舒レハ四海ニ亙リ、之ヲ卷ケハ方寸ニ藏ス、学者當サニ此處ニ向テ喫緊ノ工夫ヲ致スヘシ、

第四章

非レ食レ志也、食レ功也、

此章ノ論此二句ニアリ、而シテ食功ノ二字ニ帰ス、其論明白、復タ弁ヲ待タス、唯君ノ臣ヲ養ヒ、民ノ上ニ奉スル、既ニ皆功ニ食スル爲ナレハ、是ニ酬ユル者將タ如何スヘキ、日々三度ノ箸ヲ把ル毎ニ、此食ノ徒食スヘカラサルヲ思ヒ、又衣服ニ付テモ居處ニ付テモ器用ニ付テモ、皆此物徒ニ着ルヘカラス、徒ニ居ルヘカラス、徒ニ用ユヘカラサルヲ思ハヽ、豈放僻邪侈ノ念ヲ生センヤ、余江戸獄中ニ在テ、法華僧日命ナル者ト同居ス、僧常ニ云フ、人マサニ四恩ヲ知ルヘシ、一ニハ君恩ニ、二ニハ親恩ナリ、三ニハ師恩ナリ、四ニハ一切衆生ノ恩ニ、三恩迄ハ儒家ニモ論スル所ナレトモ、四恩ニ至テハ佛家ニ非レハ知ルヿ能ハス、五車韻瑞ニ、大乘本経注ヲ引ク、恩有ニ四種、一父母、二師長、三国王、四施主ト云ヘリ、日命云フ所ト異ナリ、當シ考、凡人此世ニ居ル、雖ニ因テ時ヲ知リ、犬ニ因テ盗ヲ知リ、牛ヲ以耕シ、馬ヲ以テ載スルヨリ、米穀ノ人ヲ養ヒ、藥石ノ人ヲ治スルニ至ル迄、禽獸草木一切衆生、皆人ニ恩ナキハナシ、是知ラサルヘカラズト、其說甚理アリ、功ニ食スルノ論ニ因テ思起セリ、但シ君父師ノ外更ニ衆生ノ恩ト云ハ、亦〈是レ異端ノ見ナリ〉三恩ヲ離レテ豈更ニ衆生ノ恩アランヤ、三恩ノ外更ニ衆生ノ恩アリト云ハ、卽所謂二本ノ說ナリ、夫ハ兎モ角モ、功無シテ食ミ、恩ヲ受テ忘レタラン者ハ、天地間ニ容ルヘカラズ、

第五章

湯ノ民ヲ弔シ、武王ノ殘ヲ取ル、是レ所謂王者ノ兵也、皆後世ノ師法トスヘキ所ナリ、而シテ湯ノ葛ニ於ル、尤モ其道ヲ尽スト云ヘシ、方今有志ノ諸侯、若シ心ヲ茲ニ用ユル者アラハ、実ニ神州ノ大幸ト云ヘシ、先自国ノ政教ヲ修メ、稍隣国他国ノ非政ヲ誨諭革正セシメ、米粟給セサレハ是ヲ給セシメ、甲兵備ラサレハ是ヲ備ヘシメ、相共ニ神州ヲ守護センコトヲ約セハ、国脉不レ日ニ強盛ナルヘシ、世湯武ノ事ヲ称道スル者、必ス放罰ト云フ、噫湯武ヲ〆眞ニ聖人ナラシメハ、放罰ハ豈其好ム所ナランヤ、殊ニ已ムヲ得サルニ出ルノミ、其本心ハ葛伯ノ如キ者ト雖モ、善政ニ進マシメント欲スルナリ、故ニ牛羊ヲ遺リ、衆ヲ遣テ耕サシムル、皆是レ至誠惻怛ノ心ヨリ出ルヿナリ、若是ヲ以テ恩ヲ賣リ威ヲ養フノ術数トセハ、大ニ非ナリ、

葛伯放而不レ祀、湯使二人問レ之、

葛伯祀ヲ廢シテ、湯コレヲ問ハシムル者何ソヤ、祀ハ忠孝ノ道ナリ、祀ヲ廢スレハ忠孝並ニ廢シテ、人道滅スルニ近シ、湯豈コレヲ問ハサランヤ、凡ソ祀ノ義、聖賢ノ論具ニ経史ニ見ユ、今必シモ贅セス、但前章ニ出ル諸侯耕

助、以供二粢盛一、夫人蠶繅、以爲二衣服一ト云ニテモ、其大意ヲ知ルヘシ、先ツ諸侯モ手ツカラ籍田ヲ耕シ、庶人助ケテ畝ヲ終レハ、供スル所ノ粢盛ハ、人君ノ孝心ト庶民ノ忠心ト合セテ成ル所ニシテ、殊ニ祭ノ衣服ハ君夫人ノ親シクテ世婦ヲ率ヒテ織成スル者ナレハ、是亦忠孝ノ義ヲ兼ル者ナリ、君臣一致シ忠孝合体シテ行フ所ノ祭祀ヲ廃スルヿ、豈人道ノ滅スルニ非スヤ、国ヲ観ル者宜シク是等ノ処ニ心ヲ付クヘキナリ、

第六章

一薛居州獨如二宋王一何、

此章ノ義極テ明白、比喩極テ的切、而シテ到底又此一句ニ帰ス、然ルニ是レ独リ人君ノ知ルヘキノミニ非ス、卿大夫士ニ至ル迄、爭臣爭友少ナクテハ、善ヲナスヿ甚タ難シ更ニ一轉シテ思フニ、心ノ存スル所、身ノ行フ所、接スル所ノ事既フ所ノ藝、皆善ニ非ルヿナクハ、何ヲ以テ不善ノ人タランヤ、故ニ云ク、小人閒居シテ不善ヲナスト、不善ノ萠ハ必無事ニヨル者ナレハ、是ヲ思テ、身ヲ孝悌文武ノ内ニ漸漬シテ他念ヲ生スルニ暇ナクスヘシ、是亦莊嶽ニ置クノ意ナリ、

第十八場　八月廿六日

第七章

此章始ニ泄柳申詳ヲ擧テ、臣タラサレハ見サルヲ証シ、且其甚シキヲ譏ル、終ニ曾子子路ヲ擧テ、君子ノ養フ所ヲ著シ、中孔子ヲ擧テ其標準トス、余此章ヲ読テ當今魏ノ文公魯ノ繆公ノ如キ者ナキヲ嘆シ、又泄柳申詳如キ者ナキヲ嘆ス、而シテ猶学フヘキ者ハ曾子子路ノ養フ所ナリ、壞者三復シテ、夏畦ノ病ヲ休メ赧然トノ色ヲ醒スヘシ、

第八章

成周井田ノ法、什一ノ税、破壞已ニ久シ、春秋魯ノ宣公ノ時ヨリ、既ニ私田ヲ征スルヿ見ユレハ、戰国ノ時ニ至リ、其重税苛斂推シテ知ルヘシ、今一旦什一ノ税ヲ用ヒ、剩ヘ關市ノ征ヲモ去テントスルヿ、豈容易ナランヤ、九国用限アリ、非常ノ節儉ヲ行フニ非スンハ、何ヲ以テ数百年來仕來ノ征税ヲ輕クスルヿヲ得ンヤ、戴盈之來年ヲ待テ是ヲ已メント云ハ、勇断ニ非スンハ安ソ能如ヒ是ナランヤ、然ルニ孟子乃チ鄰ノ雞ヲ攘ム者ニ比スルハ、豈甚シカラスヤ、余謂フニ井田ノ廢久シ、中ミ大勇断ニテ非常ノ節儉ヲ用ユルニ非レハ成ラサルヿナルヲ、盈之容易ニ是ヲ云フ、是虚言ノミニシテ実心アルニ非ス、故ニ孟子深ク是ヲ拒絶スルナリ、試ニ盡心上篇齊宣王喪ヲ短セント欲スルノ章ノ意ヲ以テ知ルヘシ、」宣王喪ヲ短セント欲ス、公孫丑問フ、巷ノ喪ヲスルハ猶已ムニ愈ランカ、孟子曰是ハ兄ノ臂ヲ戾ラス者アランニ、姑ラク徐ミセヨト云カ如シ、夫ニテハ人ノ弟タルモノヲ教ル所以ニ非ス、夫ヨリハ孝弟ヲ教ルノ外アルマシ、然レハ喪ヲ短スルノ非ヲ知ラハ、必ス三年ノ喪ヲ勤ムヘシ、巷ニテ止ムヘキノ理ナシト云ヘリ、即チ此章如知レ非二其義一、斯速已矣、何待二來年一ノ意、即チ此義ナリ、又公孫丑ノ問ニ、王子其母死スル者アリ、嫡母ニ憚アリテ喪ヲ終フルヿ能ハサル故、其傅是カ爲ニ数月ノ喪ヲ請フ、此ノ若キ者ハ何如ト、孟子云ク、是ハ喪ヲ終ント欲メ、得ヘカラサル者ナリ、一日ナリ𪜈喪ヲ勤ムル時ハ已ムニ愈レリ、前ノ兄ノ臂ヲ戾ラスノ喻ハ、是ヲ禁スルヿナクメ爲サル者ヲ云トイヘリ、」然レハ盈之信ニ能民ヲ愛スルノ誠心アリテ、節儉ヲ行ヒ国用ヲ

足シ、少シナリトモ征税ヲ輕クシ、実惠民ニ下ラハ、假令速ニ什一去関市之税ノ昔ニ及フヿ能ハストモ、孟子必ス云ン、一升ヲ輕フスト云モ已ムニ愈レリト、故ニ孟子ノ盈之ヲ責ムルハ、來年ヲ待ツノ語ヲ責ルニ非ス、虛言アリテ実心ナキヲ責ルナリ、

第九章

作二於其心一、害二於其事一、作二於其事一、害二於其政一、聖人復起、不レ易二吾言一矣、浩然ノ氣ノ章ニハ事ノ字、政ノ字、位ヲ易フ、義異ルコトナシ、

此語浩然ノ氣ノ章（公孫丑上篇第二章ナリ）ニモ出ツ、亦聖人復起、必從二吾言一矣ト云テ自賛ス、知ルヘシ孟子畢生得意ノ言ナルヿヲ、因テ詳ニ其義ヲ論ス、作二於其心一トハ初一念ノ事ナリ、人ハ初一念カ大切ナル者ニテ、ドコマテモ付回リテ、政事ニ至リテハ其害最モ著ル、ナリ、今学問ヲ爲ス者ノ初一念モ種ミアリ、就レ中誠心道ヲ求ムルハ上ナリ、名利ノ爲ニスルハ下ナリ、故ニ初一念名利爲ニ初メシタル学問ハ、進メハ進ム程其弊著ハレ、博学宏詞ヲモツテ是ヲ粉飾スト云モ、遂ニ是ヲ掩フヿ能ハス、大事ニ臨ミ進退拠ヲ失ヒ、節義ヲ欠、勢利ニ屈シ、醜態云フニ忍ヒサルニ至ル、役義ヲ勤ムルノ初一念モ種ミアリ、就レ中道ヲ行ヒ国ニ報スル爲ニスルハ上ナリ、立身出世ノ爲ニスルハ下ナリ、是亦志得官達スルニ從ヒ、益ミ著ル、事ナリ、其他何事ニ依ラス、初一念カ大切ナリ、王安石ノ新政モ、其執拗ノ念ハ釣魚ノ宴ニ餌ヲ食フヨリ前ニアルヿナリ、其念常ニ胸中ニ蟠リ、小事ニ遇ヘハ小発シ、大事ニ遇ヘハ大発ス、凡ソ書ヲ読ミ官ニ當ル者、自ラ我初一念如何ト省察シテ、其非ヲ改メ善ニ徙ルヘシ、此處百万ノ大敵ヲ平クルノ勇ニ非スンハ、痛ク懲スヿ能ハス、消々ヲ塞カサレハ、遂ニ江河トナル、両葉ヲ断サレハ、斧柯ヲ用ントスハ、カ、ルヿヲソ云ナルベシ、

欲ヲ我亦正二人心一、息二邪説一、距二詖行一、放二淫辞一、以承二三聖者上一、

全章ノ主意此一節ニ在、此一節又正二人心一ノ三字ニ帰ス、是乃チ孟子終身自ラ任スル所茲ニアリ、抑此章禹ノ抑ニ洪水一周公ノ兼二夷狄一驅二猛獸一、孔子ノ成二春秋一ヲ以テ孟子自ラ比ス、而ノ朱子注ノ云ク、蓋邪説横流、壞二人心術一、甚二於洪水猛獸之災一、慘二於夷狄簒弑之禍一、故孟子深懼而力救レ之、ト、此言深ク味フヘシ、且當今ノ事ヲ以テ是ヲ証センニ、群夷競來ル、国家ノ大事トハ云モ、深憂トスヘキハ人心ノ正カラサルナリ、苟モ人心タニ正ケレハ、百死以テ国ヲ守ル、其間勝敗利鈍アリト云モ、未タ遽カニ国家ヲ失フニ至ラズ、苟モ人心先ツ不正ナラハ、一戰ヲ待タスシテ国ヲ擧テ夷ニ從フニ至ルヘシ、然レハ今日最モ憂フヘキ者ハ、人心ノ不正ナルニ非スヤ、近年來外夷ニ對シ国体ヲ失スルヿ少ナカラズ、其茲ニ至ル者、恐ナカラ幕府諸藩ノ將士、皆其心不正ニシテ、国ノ爲ニ忠死スルヿ能ハサルニ由ル、然レハ孟子今日ニ生ル、共、亦正人心ノ三字ノ外一句モアルヿナシ、此類ヲ以テ推スニ、洪水猛獸ノ人民ヲ害スル甚シト雖モ、洪水ハ抑ユヘシ、猛獸ハ驅ルヘシ、夷狄簒弑誠ニ憎ムヘシト云モ、夷狄ハ兼ヌヘシ、簒弑ハ誅スヘシ、人心正苟モ正シキ時ハ、四ツノ者少モ憂ルニ足ラス、苟モ人心不正ナル時ハ、何ヲ以テ洪水ヲ抑ヘンヤ、何ヲ以テ猛獸ヲ驅ランヤ、何ヲ以テ夷狄ヲ兼ヌンヤ、何ヲ以テ簒弑ヲ誅センヤ、天地晦瞑人道滅絶ス、誠ニ寒心ヲナスヘキヿナリ、

第十章

孟子ノ陳仲子ヲ譏ルハ、避レ兄離レ母人倫ノ至重ヲ廢シ、匹夫ノ小廉ヲ行フヲ惡ムニアリ、圈外范氏ノ說甚明カナリ、但仲子ヲ以テ巨擘トスル者ハ、此時齊國ノ士皆利祿ニ趨リ、富貴ヲ貪リ、離婁下篇ニ云フ所ノ一妻一妾ニ〆室ニ居リ、東郭墦間ノ祭者ニ乞ヒ饜足ヲナス如キ卑劣至極ノ人物ノ〆多キヲ以テ、(仲子ヲ奇トシ)巨擘ト云テ是ヲ称スルナリ(ヲ)ヘシ、世澆季ニシテ士清操ナキノ時ニ方リテハ、仲子カ如キモノ(実ニ)末俗ヲ砥礪スルニ裨益ナシ(アリ)ト云ヘシ、嗚呼亦巨擘ナルカナ、

下篇、孟子時ニ遇スシテ、自ラ道ヲ屈セサル(ル)ヲ明ス、首章第二章、第三章、第七章、皆孟子時ノ諸侯ニ屈セサルノ義ヲ詳ニス、第四章ハ孟子諸侯ノ食ヲ辞セサル(ル)ヲ云、第五章、第六章、第八章、皆政ヲ論ス、孟子諸侯ヲ見ル(ル)アラハ、其陳說スル所斯ノ如キノミ、此三章ヲ擧テ其端緒ヲ発スル(ナリ)ノミ、第九章大議論、孟子自ラ平生辯ヲ好ム(ス)ニ非ル(ル)ヲ辯シ、是レ孟子遂ニ時ニ遇ス、政事ニ施ス(ス)能ハスメ、退テ空言ヲ以テ人心ヲ正スルノ志ヲ見ル、第十章仲子ガ蚓ニメ廉ニ非ル(ル)ヲ論シ、暗ニ第四章食ヲ辞セサルノ意ト照應ス、読者宜シク諸侯ニ屈セサルノ諸章ト比較シ、孟子ノ屈セサル、仲子ノ廉ト同年ノ論ニ非ル(ル)ヲ了解スヘシ、

講孟劄記卷之二終

講孟劄記　卷之三上

第十九場　八月廿九日

離婁上

首章

此章徒善ニテモ徒法ニテモ用ヲ濟サス、法ト善ト兼備スルニ非レハ不可ナル(ル)ヲ云テ、重ヲ法ニ歸シ、仁心仁聞アリテ民其沢ヲ被サル(ル)ヲ譏ル、孟子ノ所レ謂法ハ即王政ナリ、仁政ナリ、五畝ノ宅、百畝ノ田、庠序學校ノ設ノ類ナリ、然ルニ後世政ヲ執ル者深ク察セス、却テ此語ニ誤ラル、者アリ、宋ノ王安石、明ノ方孝孺ノ如キ皆是ナリ、安石、孝孺皆謂ラク政ノ要ハ法ノ善惡ニアリト、故ニ務テ法度ヲ紛更變易セント欲ス、是大ニ非ナリ、大凡道汙隆アリ德厚薄アリト云ヘ、創業垂統ノ主ハ必ス百世ニ傳フルノ制度アル者ナリ、故ニ守成ノ臣子タル者ハ務テ祖宗ノ法制ヲ講究シ、且徒法ニナラサル樣ニスルハ德ヲ脩ムルニアルノミ、若シ己ノ德ヲ脩ムルヲ知ラス、祖宗ノ法制アルヲモ知ラス、別ニ先王ノ法ヲ求メ周室ノ制ニ倣フ時ハ、必ス枘鑿矛盾シテ大害大変ヲ生スル(ス)必セリ、是安石孝孺ノ誤ル所ナリ、然ラハ孟子ノ說ハ非カ、云ク否、治ヲ爲スハ太甚ヲ去ルヘシ、孟子ノ時諸國ノ政大ニ亂ル、故ニ其太甚ヲ去テ是ヲ成周ノ舊ニ復セント欲スルナリ、且孟子ノ時大ニ亂ルト雖ヘ、猶周家ノ餘緒ヲ承ク、宋明ノ周制ヲ用ヒ舊制ヲ変シ、大ニ人情ニ戻リ衆目ヲ駭ス如キニ非ルナリ、是レ知ラサルヘカラズ、

第二章

名レ之曰二幽厲一、雖二孝子慈孫一、百世不レ能レ改也、

謚ノ事吾固ヨリ是ヲ疑フ、何トナレハ秦ノ始皇カ云如ク、子トシテ父ヲ議シ臣トメ君ヲ議スルノ道ナレハ忠孝ノ訓ニ害アルカ如シ、然レモ謚法廢スル時ハ公道從テ廢ス、人主何ノ戒ムル所アランヤ、吾反復之ヲ考テ初テ其說ヲ得タリ、蓋シ謚法ハ周ニ起ル、周公ノ制作ニ出ル所ナリ、周公ハ文王ノ子、武王ノ弟、成王ノ叔父ニメ、周家ヲ造立メ八百年ノ基業ヲ開キ給フ「皆此公ノ勳勞ナリ、故ニ周公ハ文王武王成王ト一体ノ人也、是ヲ以テ三王ノ心ヲ以テ己カ心トシ謚法ヲ制シ後世子孫天下諸侯ニ号令シ、今ヨリ後死喪ノ事アラハ、子父ニ私スル「ナク、臣君ニ私スル「ナク、公義ヲ明ニシ謚號ヲ論スヘシ、三王及ヒ吾身ニ於テ少モ忌諱スル「ナク、天下後世ノ模範トスヘシ、是ヲ以テ後世臣子敢テ君父ヲ妄議スルニ非ス、乃チ周公ノ法ヲ奉メ周旋スルノミ、如レ是ニシテ公道初テ天下ニ行ハル、周公猶以テ足ラストス、故ニ左史事ヲ記シ右史言ヲ記スルノ法ヲ立、君臣ノ擧動言語遂一其實ヲ記シテ毫モ回避スル「ナシ、是ニ於テ公道益々行ル、周公ノ後世ヲ憂忠スル「至レリ盡セリト云ヘシ、而メ後世公道日々廢シ事々私意ニ出ツ、謚法先ツ廢シ史法又廢ス、有志ノ士ヲメ慨然堪サラシム、今此弊ヲ挽回セント欲スルモ、臣子ニ在テ議シ難キ者アリ、苟モ英主起テ三王周公ノ心ヲ存シ、先ツ謚法ヲ復シ又史法ヲ復シ、務テ公道ヲ扶セハ、何事カ是ニ尙ヘン、嗚呼公道ノ廢スル、名教澌絶シ人心晦盲スルニ至ル、豈懼レサランヤ、

第三章

惡二死亡一而樂二不仁一、

樂二不仁一ノ三字善ク味フヘシ、不仁ノ人ノ不仁ヲ行フ、自ラ以テ不仁トセス、若シ自ラ以テ不仁トセハ何ソ不仁ヲ行ンヤ、但ソレ不仁ヲ以テ樂トス、是ヲ以テ不仁ヲ行テ顧ミサル所ナリ、淫聲美色瑤宮瑤臺酒池肉林珍禽奇獸ハ桀紂ノ徒自ラ以テ至樂トス、豈黎民所ヲ得ス、父子相見ス、兄弟妻子離散シ不仁ノ甚タル「ヲ知ランヤ、故ニ其跡ニ就テ是ヲ按スレハ、至愚ト云モ其不仁タルヲ知ル、其事ニ當ルニ至テハ賢智ト云モ或ハ其不仁タルヲ知ラス、唯ソレ知ラス、是ヲ以テ古ヨリ亡國敗家項背相望ムノミ、然則何ヲ以テ是ヲ知ラン、マサニ自ラ思テ得ヘシ、

第四章

反二求諸己一、

第五章

家之本在レ身、

反求ノ二字聖經賢傳百千万言ノ歸着スル所ナリ、在身ノ二字モ亦同シ工夫ナリ、天下ノ事大事小事此道ヲ離レテ成ル「ナシ、大四海ヲ包ミ剛金石ヲ貫ク、豈復タ他道アランヤ、下二章ノ大議論ト云モ此二章ニ外ナラズ、

第六章

爲レ政不レ難、

此章不難ノ二字大奇絶妙、人ヲ駭スノ高言ト云ヘシ、巨室ハ是レ世臣大家、倔强驁傲、動モスレハ人主ヲ嚙ントス

ル者ニシテ、是ヲ處スルノ難キ古今ノ大難局ナリ、今乃チ容易ニ不難ノ二字ヲ安頓ス、豈高言ニ非スヤ、下面ノ數句ヲ讀ムニ至リ、乃チ其高言ニ非ルヲ知ルヲ得、然ルモ不難ノ難悠々タル古今誰能ク之ヲ行ン、是ヲ古ニ攷フルニ平・清盛源頼朝北條義時等ノ如キ皆巨室ノ尤ナル者ナリ、恐多クモ　後白河天皇後鳥羽天皇徒ニ清盛頼朝義時ヲ怨怒シ給ノ心ノミニシテ、前章所レ謂反求在身ノ工夫ナク、重ク罪ヲ巨室ニ得玉フ「實ニ勿体ナキ」ナリ、二帝苟モ仁ニ反リ智ニ反リ敬ニ反リ、身ヲ修テ家ヲ齊ヘ國ヲ治メ天下ヲ平ニシ玉ハ、、沛然タル德教四海ニ溢ル、者、巨室ト云ルモ何ヲ以テ是ヲ禦カンヤ、且視ヨ、大舜ハ歴山ノ農夫ナレルモ居ル所都ヲナスニ至ル、孔子ハ纍々タル喪家ノ狗ナレルモ三千ノ徒心服スルニ至ル、他ナシ德ノミ、反求在身ハ德ヲ明ニスルノ工夫ナリ而ルヲ況ヤ一天萬乘ノ天子ニ〆此德ヲ明ニセハ其效如何ソヤ、吾二帝ニ於テ萬々遺憾アリ、獨　後醍醐天皇ノ初政稍是ニ近シトス、而〆其甚難キト其終ザルトハ、蓋シ初ヤ是ニ於テ盡サヾル所アリ、終ヤ是ヲ忘レレハナリ、孟子ノ言豈信ナラスヤ、世事ニ志アル者讀テ此章ニ至リ三復流涕スルノミ、悠々タル蒼天是レ何人ソヤ、

第七章

此章公孫丑上篇第七章ト同一ノ手段同一ノ議論ニシテ、均シク恥ノ一字ヲ以テ人ヲ激勵ス、恥ノ一字孟子喫緊ノ語、故ニ云ク人不レ可ニ以無ニ恥、又云ク恥之於レ人大矣並ニ盡心上篇ニ見ユ然モ恥ヲ知ラヌ人ニ至テハ孟子ノ說モ亦窮スヘシ、齊景公ノ涕出テ吳ニ女スヲ見テ、一時ノ權道保國ノ良圖ト思フノ族ハ、人間ニ羞恥ト云「アルヲ夢ニモ知ラス、斯人ヲ〆路ニ當ラシメハ、國体ヲ失ヒ國事ヲ誤ル「豈限リアランヤ、然モ恥ハ人心必有ノ物ナレハ、木石ニ非ルヨリハ恥ナキ「ヲ得ス、其恥ナキト云者ハ眞ニ恥ナキニ非ス、恥ルト雖モ是ヲ處スル「ナキ故ニ、強テ恥サルノ容ヲナスノミ、其中心益々自ラ恥ルナリ、是ニ因テ孟子又是ヲ處スルノ法ヲ揭示シ、遂ニ五年七年等ノ效驗ヲ擧テ是ヲ歆動ス、是ニ於テ誰カ敢テ羞恥ヲ棄テ效驗ニ趨カサランヤ、況ヤ文王ヲ師トスルハ甚容易ナル「ニテ、即上章反求在身ノ說ニ過キス、其政ニ発スル者ハ民ヲ養ヒ且敎ルニ過キス、其兵ニ発スル者ハ民ヲ弔シ罪ヲ伐ニ過キス、已ニ羞恥ノ甚シキヲ知リ、又效驗ノ易キヲ知ル、誰敢テ其圖ヲ改サランヤ、如何ソ今人頑然トシテ移ラサル、時復孟子アル「ナシ、吾將タ誰ヲカ尤メン、悲カナ、

第二十場　九月三日

第八章

自取レ之也、

此章主意此一句ニアリ、自侮、自毀、自伐、自作孽、皆是自取ノ謂ナリ、下第十章自暴自棄モ亦此謂ナリ、自侮トハ自身ニ吾身ヲ輕侮スルナリ、凡ソ人ノ一身、性ヲ天ニ受ケ德ヲ心ニ具ス、天地ノ待ツ所、鬼神ノ依ル所、ソレ亦尊重ト云ヘシ、而〆自ラ其尊重タルヲ知ラス、放僻邪侈至ラサル「ナキ者ハ、豈自ラ輕侮スルニ非スヤ、自毀トハ自身ニ吾家ヲ破毀スルナリ、凡ソ人ノ家、父子アリ兄弟アリ夫婦アリ、然ル後其家完全ナリ、父ノ子ヲ慈セサル、子ノ父ニ孝セサル、兄ノ弟ニ友ナラサル、弟ノ兄ニ悌ナラ(サ)ル、夫ノ婦ニ敎ヘサル、婦ノ夫ニ順ハサルヨリ、父子相夷リ兄弟墻ニ鬩キ、夫妻目ヲ側メ終ニ骨肉相食ミ家從テ破毀スルニ至ル、是自ラ破毀スルニ非スヤ、自伐トハ

自身ニ吾國ヲ擊伐スルナリ、凡ソ國ノ國タル所以ハ、宗族アリ群臣アリ万民アリ米粟アリ貨財アリ甲兵アリ城郭アルヲ以テナリ、而メ善ク國ヲ持セサル者ハ宗族ヲ親ムヿヲ知ラスシテ宗族背キ離ル、群臣ヲ体スルヿヲ知ラスメ群臣怒リ怨ム、萬民ヲ愛スルヿヲ知ラスメ萬民叛キ散ル、米粟ノ凶年飢歲ニ備ヘ窮餓流亡ヲ救フナシ、城郭ノ暴寇ヲ拒キ甲兵ノ叛逆ヲ平クルナシ、事皆如レ是ナレハ國何ヲ以テ滅亡セサランヤ、是レ自ラ擊伐スルニ非スヤ、是ヲ察セスシテ人ノ輕侮ヲ怒リ人ノ破毀ヲ惡ミ人ノ擊伐ヲ恐ル、亦末ナラスヤ、此章ノ起手所レ謂不仁者ノ爲ス所往々然ラサルヿナシ、嗚呼不仁ノ者其危ヲ安トシ其滅ヲ利トシ亡ル所以ヲ樂トシ自ラ侮ノ侮タルヲ知ラス、自ラ毀ノ毀タルヲ知ラス、自ラ伐ノ伐タルヲ知ラス、昏迷惑溺死亡ニ至テ遂ニ自ラ悟ラサルハ實ニ哀ムヘキノミ、

第九章

所レ欲與レ之、聚レ之、所レ惡勿レ施爾也、

此章此二句ニ歸宿ス、下文仁ノ字又此二句ヲ要約スルナリ、而メ仁ノ字教養ヲ兼ヌ、所レ欲、所レ惡ハ註引ク所龍錯ノ語甚タ明ナリ、但其所レ謂壽富安逸ノ内ニ就テ教養ノ両意ヲ觀ンヿヲ要ス、養ノ意ハ言スシテ明ナリ、教ノ意ハ民ヲメ風俗善美行義修整ニシテ刑罰ニ遠カラシメハ、是民ヲ壽ナラシムルナリ、民ヲメ貧窮相惠ミ疾病相恤ミ鰥寡孤独其所ヲ得サルナカラシメハ、是民ヲ富シムルナリ、已ニ富ミ且壽ナラハ安ト云ヘシ、逸ト云ヘシ、若シ徒ニ民ヲ養フヲ知テ教ルヲ知ラサレハ、壽富安逸未タ至レリトセス、教養ノ二字孔孟論政ノ眼目ナリ、獨リ此章ノミニ非ス、

教養已ニ備リ壽富安逸已ニ至ル時ハ、心ヲ得民ヲ得天下ヲ得ル自ラ成ル所ノ效驗ナリ、但シ心ヲ得民ヲ得天下ヲ得ノ得ノ字ノ意味ヲ善ク味フヘシ、得トハ吾物トシ吾自由ニナル心ナリ、天下ヲ得レハ天下ハ吾物ニテ吾自由ニナルナリ、民ヲ得レハ民ハ吾物ニテ吾自由ニナルナリ、心ヲ得レハ心ハ吾物ニテ吾自由ニナルナリ、故ニ民ヲ得心ヲ得ルハ孫子所レ謂令二民與レ上同一ノ意ノ義ナリ、民心カ上ノ思フ如クナルヿナリ、上方ニ夷狄ヲ惡テ是ヲ征伐セント思ヘハ民心モ亦斯ノ如シ、上方ニ城郭ヲ築キ艦砲ヲ造リ寇賊ニ備ヘントスレハ民心モ亦斯ノ如シ、若シ上ノ思フ所少ニテモ民心ノ違戻スルヿアレハ得ト云ヘカラス、得ノ字ノ意味カクノ如シ、書ヲ讀ムハ意味ヲ知ルヿヲ要ス、

七年ノ病三年ノ艾ノ譬喩尤モ人口ニ膾炙ス、實ニ古今ノ格言ナリ、既往ハ咎メスシテ可ナリ、來者ヲ以テ是ヲ論セン、夷虜ノ病ハ七年ヤ十年ノ病ニ非ス、數十百年ノ病ナリ、守備ノ艾ハ一日ハ一日ノ功アリ、十日ハ十日、百日ハ百日、一年ハ一年、三年ハ三年ノ功アリ、今日ヨリ艾ヲ取テ乾スヘシ、猶豫スルヿナカレ、又學業ノ事ニ就テ考ヘシ、人皆云フ余ヲメ今十年ヲ早セシメハ何ノ業ヲ成サン何ノ藝ヲ修ント、是皆七年ノ病三年ノ艾ノ譬ナリ、即日ヨリ思立テ業ヲ始メ藝ヲ試ムヘシ、何ソ年ノ早晩ヲ論センヤ、諺ニ云ク思ヒ立ツタカ吉日ト、正ニ艾ヲ求ムルノ良術ナリ、

第十章

自暴自棄安宅正路ノ說切實ト云ヘシ、讀者自ラ其義ヲ了スヘシ、嗚呼自暴ハ頑物ナリ、自棄ハ惰弱者ナリ、孰人モ此両等人ニハ成トモナキモノナルカ、安宅トテ安トモ知ラス、正路トテ正トモ知ラスンハ遂ニ此両等人タルヲ免レス、哀カナ、

第十一章

人々親二其親一、長二其長一、而天下平、

此語天下ノ至論ナリ、君々タリ臣々タリ父々タリ子々タリ兄々タリ弟々タリ夫々タリ婦々タリ、天下豈平カナラサルヿアランヤ、然ルニ天下ノ平カナラサルハ君々タラスシテ臣々タラス、臣々タラスシテ君々タラサルニアリ、二ツノ者常ニ相待テ後天下平カナラス、父子兄弟夫婦皆一理ナリ、若君々タラスト云ヒ臣々タラハ天下倘平ナリ、臣々タラスト云ヒ君々タラハ天下倘平ナリ、此處工夫ノ入ル所ナリ、君ハ君ノ道ヲ盡シテ臣ヲ感格スヘシ、臣ハ臣ノ道ヲ盡シテ君ヲ感格スヘシ、父子兄弟夫婦モ一理ナリ、此義中々小サカシキ者ノ知ル所ニ非ス、

第十二章

此章中庸全部ノ意ヲ括テ一章トス、又大學ト表裏ス、並ニ註已ニ是ヲ辨ス、而シテ善ニ明ナルト身ニ誠ナルト誠ト誠ヲ思フトノ四頂ニ歸ス、善ニ明ナルハ多ク知ニ於テ發明ス、書ヲ讀ミ道ヲ思フ皆是ニ屬ス、身ニ誠ナルハ多ク行ニ於テ発明ス、仁ヲ行ヒ義ニ由ル皆是ニ屬ス、然ルニ知ハ行ノ本タリ、行ハ知ノ實タリ、二ツノ者固ヨリ相倚テ離レス、誠ハ知行ノ自ラ誠ナルナリ、思誠ハ知行ノ誠ナランヿヲ思フナリ、此義學庸ヲ熟讀セハ自ラ明ナリ、今必シモ贅セス、上章云ク道在レ爾、事在レ易ト云モノ此章ニ於テ益々明ナリ、獲二於上一ノ獲ハ上第九章得レ民、得レ心ノ得ノ如シ、但彼我ノ差別アルノミ、獲於上ハ我心ヲ上ニ獲ラレ上ノ物トナルナリ、我レ誠敬ヲ盡シ我レ忠貞ヲ致スト云ヒ、上ノ信孚ヲ得ルヿ能ハサルハ是我心ヲ上ニ獲ラレサルナリ、我誠敬ヲ盡セハ上其誠敬ヲ信シ、我忠貞ヲ致セハ上其忠貞ヲ信シ、凡ソ吾心ヲ竭ス所上皆是ヲ信スレハ、吾心皆上ノ心ト流通シテ、吾心ハ上ノ物トナリ、上ノ心ハ又吾物トナル、上下相得ルナリ、孫子所レ謂與レ衆相得ノ意ナリ、是ヲ上ニ獲ラル、ト云ナリ、

第十三章

此章卽チ上章至誠ニシテ動カスノ一徵ナリ、文王至誠ニシテ老ヲ養フ故ニ伯夷太公動テ興起スルナリ、天下ノ人皆動テ是ニ歸スルナリ、文王ノ心初ヨリ伯夷太公ヲ動サン天下ノ人ヲ動サントノ心アルニ非ス、若シ此心アラハ至誠ニ非ス、是亦上ノ道在レ爾、事在レ易ノ義トモ相通ス、下章ノ意ハ皆誠ナラサルノ非ヲ論スルナリ、

第十四章

善戰者服二上刑一、連二諸侯一者次レ之、辟二草萊一任二土地一者次レ之、

善戰者ノ三言ヲ聞テ人皆驚愕セサルハナシ、今ヤ國家多事、夷寇陸梁、善戰者アリテ寇ヲ平ケ、連二諸侯一者アリテ列藩心ヲ協ヘ力ヲ合セ、辟二草萊一任二土地一者アリテ國用ヲ足スニ非スンハ、何ヲ以テ時艱ヲ濟ンヤ、是人々ノ驚愕スル所ナリ、然ルニ是深ク孟子ノ意ヲ察セサル者ト云ヘシ、孟子ノ意ハ仁政ヲ行ハスシテ此三者ヲ主トスルノ非ヲ云ナリ、今ノ時ニ方リテ親ヲ親シミ賢ヲ賢トシ民ヲ愛シ士ヲ養フノ政ヲ行ハスシテ、此三者ヲ主トセハ其極如何ソヤ、是孟子ノ惡ム所ナリ、故ニ云ク服二上刑一ト、

第十五章

第十六章

人ノ精神ハ目ニアリ、故ニ人ヲ觀ルハ目ニ於テス、胸中ノ正不正ハ眸子ノ瞭眊ニアリ、而シテ善ク眸子ヲ觀ル者ハ人ノ智愚動靜ニ至ル迄皆昭々タリ、然レハ正邪ノミヲ云ニ非ス、聲音笑貌ヲ以テ恭儉ヲナスト云ヒ、人亦其眸子ヲ觀ントス、果シテ何ノ益アランヤ、空言僞行素ヨリ人ヲ服シ信ヲ取ルニ足ラス、何ソ至誠ノ人ヲ動スニ如ンヤ、

第十七章

淳于髡手ヲ以テ天下ヲ援ントス、孟子道ヲ以テ天下ヲ援ントス、二說論セスシテ明ナリ、然ヒ後世天下ヲ援フモノ大氏手ヲ以テセサルハナシ、術ヲ以テ人ヲ弄シ智ヲ以テ世ヲ馭シ、自己ノ誠意ニ原カス一身ノ實行ニ本ツカサルハ、皆道ヲ以テスルニ非ス、手ヲ以テスルナリ、齊桓晉文ノ覇タル所以、成湯文王ノ王タル所以、論スル所道ト手トノ間ノミ、道ハ心ニ原ツキ理ニ從フ者ナリ、手ハ是ニ反ス、

第十八章

易レ子而教レ之、

此篇大氏治國平天下ノ本ハ身ト心ニアルヿヲ云、此章忽チ父子ノ道ヲ云者ハ、亦治平ノ本ハ人倫ヲ明ニスルニアリテ、人倫ノ大ナル者ハ父子ニアルヲ以テナリ、柳(抑カ)易レ子而教レ之ノ說大ニ善シ、世道ニ志アルノ士ハカクコソ心掛クヘキヿナリ、其義ハ本文已ニ明ナリ、余謂ラク有志ノ士ハ必ス同志ノ友アリ、同師ノ朋アリ、師ヲ同シ志ヲ同シ常ニ善ヲ以テ相責メ相切劘シテ不義ニ陷ラサル如クス、是所レ謂執友ナリ、故ニ子ヲ易テ教ユルヿヲ得ヘシ、禮記ニ每々父執父執ト云ヲ視テモ亦知ルヘシ、故ニ吾苟モ師ナク志ナクハ執友モ亦ナシ、何ヲ以テ子ヲ易テ教ヘンヤ、蘇詢云ク一介之士必有二密友一、以開二心胸一、以濟二緩急一ト、密友ハ即チ執友ナリ、嗚呼士トシテ安ソ斯友ナカルヘケンヤ、

第二十一場上　九月七日

第十九章

此章事レ親、守レ身ノ二事ヲ論ス、終ニ事レ親ノ一事ヲ承テ、曾子曾元ノ孝ヲ引テ、養二口体一ト養レ志トヲ辨別ス、養志ヲ以テ主トス、請レ所レ與曰レ有ト云ハ特ニ其端ヲ云ノミ、養志ノ義ハ甚廣大ナリ、凡ソ父母ノ志ノ達スル樣ニスルヿ皆是ナリ、人子タル者父母ノ心ヲ以テ心トスル時ハ孝ト云ヘシト云モ即此義ナリ、

第二十章

賢人ヲ用テ不肖ヲ黜ケ善政ヲ擧テ惡政ヲ革ムルハ人君ノ急務ナルニ、是レハ適ムルニ足ラス間ルニ足ラスト云ハ大識見ト云ヘシ、大氏後世ノ策士論者適ムル所間ル所皆人ト政トノ外ニ出ルヿ能ハス、誰カ敢テ君臣ノ非ヲ格スヿヲ知ンヤ、且今日ヲ以テ是ヲ論スルニ、人君斷然トシテ國威ヲ四海ニ宣ヘ外夷ヲ撻伐セントノ誠心アラハ、天下ノ大ナル人民ノ衆ナル何ソ賢材ナキヲ憂ヘン、賢材已ニ擧用セハ何ソ善政ナキヲ憂ヘン、君已ニ誠心アリ賢材已ニ擧リ善政已ニ行レハ、國威ヲ四海ニ宣ヘ外夷ヲ撻伐スルニ於テ何ノ難キヿカアラン、若シ人君此誠心ナクンハ賢材アリト云ヒ善政アリト云ヒ亦空文ノミ、況ヤ賢材必ス聚ラス善政必ス行レサルヲヤ、

世間ノ毀譽ハ大氐其實ヲ得サル者ナリ、然ルニ毀ヲ懼レ譽ヲ求ムルノ心アラハ、心ヲ用ユル所皆外面ニアリテ、實事日ニ薄シ、故ニ君子ノ務メハ己(ヲ)修メ實ヲ盡スニアリ、何ソ世間ノ毀譽ニ拘ランヤ、全ヲ求ムルモ却テ毀ヲ得、虞ラスメ却テ譽ヲ得ル者ナレハ、毀譽何ソ常ニスヘケンヤ、

第二十二章岡白駒、孟子解、人之輕二易其言一者、以無二身任二之責一耳、若身任二其責一、則知二其爲レ之難一、豈敢輕易苟言哉ト、此說先ツ吾意ヲ獲タリ

無レ責耳矣、

此章註已ニ明ナリ、但シ無レ責耳矣ノ一句ニ於テ余窃ニ一說アリ、責ハ言責ノ責ト同シ、責任ナリ、無責トハ自ラ責トシ自ラ任トスル所ナキナリ、凡ソ人ノ言語ヲ容易ニスルハ自ラ責任トスル所ナキヲ以テナリ、苟モ實行ヲ以テ自ラ責任トスルナラハ、言語モ容易ニハナル間敷ナリ、君子ハ言ニ訥ニシテ行ニ敏ナランヿヲ欲スト云ト意相似タリ、

第二十三章

人ノ師トナランコトヲ欲スレハ學フ所己カ爲ニ非ス、博聞强記人ノ顧問ニ備ルノミ、而メ是學者ノ通患ナリ、吾輩尤モ自ラ戒シムヘシ、凡學ヲナスノ要ハ己カ爲ニスルニアリ、己カ爲ニスルハ君子ノ學ナリ、人ノ爲ニスルハ小人ノ學ナリ、而メ己カ爲ニスルノ學ハ、人ノ師トナルヲ好ムニ非スシテ自ラ人ノ師トナルヘシ、人ノ爲ニスルノ學ハ、人ノ師トナラント欲スレ𪜈遂ニ師トナルニ足ラス、故ニ云ク記聞ノ學ハ以テ師トナルニ足ラスト是ナリ、

以上三章人ノ毀譽ニ拘ラスシテ己ヲ脩メ實ヲ盡シ、第二十一章ノ意之言語ヲ容易ニセス、實行ヲ以テ自ラ責任トシ、第二十二章ノ意〻人ノ師トナルヲ好マスシテ己ノ爲ニスルノ實學ヲ脩ムヘキヲ云、此章ノ意ナリ意並ニ相似タリ、皆己ヲ脩メ實ヲ務ムルノ敎〻、

第二十四章

第二十五章

此二章並ニ樂正子ヲ責ム、前章ハ其來見ルノ遲キヲ責メ、後章ハ其子敖ニ從フヲ責ム、子敖ハ王驩ナリ、王驩ノ事公孫丑下篇第六章ニ見ユ、云ク孟子爲レ卿ニ於齊一、出弔ニ於滕一、王使二蓋大夫王驩爲一輔行一、王驩朝暮見、反二齊滕之路一、未二嘗與レ之言二行事一也、又離婁下篇ニモ見ユ、云ク公行子有二子之喪一、右師往弔、右師ハ王驩也孟子不下與二右師一言上、右師不レ悅曰、是簡レ驩也、孟子聞レ之曰、我欲レ行レ禮、子敖以我爲レ簡、不二亦異一乎、ト此二章ヲ觀テモ亦王驩ノ小人タルヿ知ヘシ、而メ樂正子乃チ子敖ニ從ヒ來ル、是孟子ノ責ル所ナリ、カツ子學二古之道一而以餔啜也ノ一語ヲ以テ是ヲ考フルニ、樂正子ノ子敖ニ從フハ子敖ノ扶持ヲ受ケタルト見ヘタリ、定テ其臣トナルカ其客トナルカナルヘシ、故ニ孟子深ク是ヲ責ムルハ、其身ヲ小人ニ失フ君子ノ道ニ非ルヲ以テナリ、不レ然ンハ孟子何ソ來見ルノ遲キト子敖ニ從ヒ來ルトヲ責ムルコト甚タ深キヤ、然𪜈樂正子モ亦輕スヘカラス、梁惠王下篇末章ニ見ユル所ノ、魯ノ平公ノ爲ニ孟子ノ賢ヲ說ク所ヲ觀テ知ルヘシ、又告子下篇ニ云、魯欲レ使二樂正子爲一政、孟子曰、吾聞レ之、喜而不レ寐、又曰、其爲レ人也好レ善、盡心下篇ニ云、浩生不害問曰、樂正子何人也、孟子曰、善人也、信人也、ト此類ヲ以テ樂正子ノ人トナリ大抵知ルヘシ、又案スルニ子敖ハ齊人ナリ、樂正子ハ魯人ナルヘシ、樂正子子敖ニ從ヒ來ルハ、子

敖魯ニ往テ樂正子ヲ連テ齊ニ歸リ、孟子時ニ齊ニ居ラル、ナルヘシ、

第二十六章

此論又萬章上篇ニモ見ユ、舜ノ告ケズシテ娶リ、湯武ノ桀紂ヲ放伐シ、箕子ノ武王ノ爲ニ洪範ヲ陳スル如キ箕子ハ殷ノ宗室ナリ、武王ハ殷ノ仇敵ナリ、國亡テ仇敵ノ爲ニ法ヲ傳ル人臣ノ義ニ非ス、先輩淺見綱齋ノ說ニ云ク、道ノ亡ヒンコヲ憂テ仇敵ニ傳ルハ譬ハ書ヲ讀ミ學問カ仕度トテ人ノ書籍ヲ盜ムニ同シト云ヘリ、實ニ正論ト云ヘシ、其詳靖獻遺言講義ニ見ユ、皆聖人ノ事ニモセヨ後人ノ法トナスヘカラズ、後ナキハ大不孝トハ雖モ父母ノ意ニ違フ者亦孝ト云ヘカラス、且舜ノ此事ヲナス時父母ヲ是トシ給フヤ己ヲ是トシ給フヤ、父母ヲ是トシ己ヲ非トセハ己ノ非ヲ以テ父母ノ是ニ違フ不孝亦甚シ、父母ヲ非トシテ己ヲ是トセハ又孝子ノ心ニ非ス、天下無二不是底父母一（羅仲素ノ語下第二十八章圈外ノ註ニ見ユ）ト云如ク、人子ノ心ニテハ毫末モ父母ヲ不是ト思ワヌコソ孝ト云ヘシ、然レハ舜孝子ナラバ決シテ此事ヲナサズ、若果メ此事ヲナサハ舜孝子ニ非ス、註范氏曰、若父非二瞽瞍一、子非二大舜一、而欲三不レ告而娶一、則天下之罪人也、ト然ラハ聖人ノ行ハ凡人ノ模範トナラサルカ、且自ラ舜トシ父ヲ瞽瞍トスルハ天下ノ妄人ナリ、范氏ノ說徒ニ必無ノ事ヲ設テ後人ヲ惑ハシム、其誣罔甚シ、且後ナキヲ大不孝トスルニヨリ告スシテ娶ヲナホ告ルカ如シト云ハヽ、父母ノ命媒妁ノ言ヲ待ズメ、穴隙ヲ鑽テ相窺ヒ、墻ヲ越テ相從ヒ、父母國人皆是ヲ賤ムルモ、後アラハ亦孝ト云ヘキカ、東家ノ墻ヲ踰テ其處女ヲ摟テ後アラハ亦孝ト云ヘキカ、是亦不通ノ論ナリ、且娶ラスンハ舜ハ滅ニ後ナカルヘシ、然モ弟象ニシテ後アラハ瞽瞍ノ血紂ヲ絶ツニ至ラス、喻ヘハ大伯仲雍周ヲ去ルト雖モ、弟季歷アルヲ以テ大王ノ血紂ハ絶サルカ如シ、故ニ余謂ラク舜實ニ此事ナクメ孟子此論ヲ發セハ聖人ヲ誣ユルト云ヘシ、舜實ニ此事アリテ孟子此論ヲ發セハ聖人ニ阿ルト云ヘシ、

※（統は孝明天皇の御諱統仁に當り缺劃である）

第二十七章

此章仁義智禮樂ヲ說ク最モ親切ナリ、而シテ其尤モ意ヲ着ル所樂ノ上ニアリ、足踏手舞ニ至ルハ樂モ亦盛ナリ、大氏聖人ノ人ヲ敎ヘ政ヲ行フ皆窮屈ナル所ニ非ス、從容ナル所ニ妙處アリ、深ク味フヘシ、

第二十八章

此章天下之爲二父子一者定ト云フ深味アリ、瞽瞍ハ天下ノ頑父ナレモ大舜ノ至孝アレハ底豫ニ至ル、底ハ致ナリト註ス、豫ヲ致スハ豫ハ極ムル心ニテ至極悅豫スルヿナリ然レハ天下豈復タ事(フ)ヘカラサルノ父アランヤ、是天下ノ父子タル者定ルナリ、推メ是ヲ廣ムレハ父ノミニ非ス、君モ亦然リ、然ラハ暴君頑父ト云モ、臣子タル者善ク己カ忠孝ヲ盡ス時ハ、豈感格セサルノ理アランヤ、因テ臣子ノ心得ヲ論スヘシ、苟モ君父アラン者ハ勞シテ怨ミスト云フヲ落着スヘシ、諫行ワレサレモ言聽レサレモ、功アリテ却テ罪セラレ志アリテ却テ疎セラル、ト云モ、毫末モ怨心アルヘカラス、凡ソ慈父仁君ニ事ヘテ孝子トナリ忠臣トナル者古今少カラス、誠ニ吉祥善事ト云ヘシ、暴君頑父ニ事ヘテ忠孝ナル者ニ至テハ不幸ノ至リ誠ニ哀シムヘシ、然モ是ニ非レハ眞ノ忠孝ノ誠意ヲ觀ルニ足ラス、余因テ忠孝ノ最モ不幸ナル者ヲ集輯シテ一書トナシ、以テ慈父仁君ニ事ヘテ不孝不忠ナル者ヲ諷セント欲ス、而メ未タ及ニ暇アラサルナリ、

此篇大要治國平天下ノ大体ヲ論シ、自ラ反シ己ヲ竭スノ道ヲ主トス、末章舜ノ瞽瞍ニ事ルヲ引テ自ラ反シ己ヲ竭スノ極則ヲ示ス、其意深シ、篇中大氏（氏カ）章々相承ケ相連ル事煩ケレハ具論スルニ及ハス、讀者意ヲ注シテ是ヲ觀ル

シ、

第二十一場下　同日

離婁下

首章

其揆一也ト、修身齊家ヨリ治國平天下ニ至ル所ト、民ヲ養テ是ヲ富シ教テ是ヲ善ナラシムルトノミ、何ソ更ニ他義アランヤ、

第二章

子產ノ政摠テ小惠ヲ事トシテ大德ヲ知ラサルヲ譏ルナリ、孔子子產ヲ評シテ惠人也ト宣フモ同意ナリ、諸葛孔明云ク、國ヲ治ルニハ大德ヲ以テス、小惠ヲ以テセスト云モ此意ナリ、政ヲ執リ事ヲ論スル者此義ヲ知サレハ誤ル〻多シ、後世君德ヲ論スル者、或ハ是ヲ知スシテ小惠ヲ以テ君德ト心得テ、事々シク称述シテ却テ識者ノ非笑ヲ受ル者少カラス、愼マサルヘケンヤ、

第三章

書ヲ讀ムハ主意ヲ觀ル〻ヲ要トス、此事ノ如キ孟子宣王ノ爲メニ說ク、故ニ君道ヲ以テ主意トス、若シ誤テ臣道モ亦如レ是ト思ハ、大ニ非ナリ、若シ臣道ヲ論スル時ハ、君々タラスト云ヒ臣以テ臣タラサルヘカラスト是ナリ、然ヒ若臣ヲ視ル〻手足ノ如ナレヒ、臣君ヲ視ル〻國人ノ如ク、君臣ヲ視ル〻犬馬ノ如クナレヒ、臣君ヲ視ル〻却テ寇讎ノ如キ者アリ、是其罪万死スト云ヒ何ヲ以テ是ヲ償ンヤ、

賈誼ノ治安策ニ云、主上遇二其大臣一、如レ遇二犬馬一、彼將二犬馬自爲一也、如レ遇二官徒一、彼將二官徒自爲一也、是レ孟子ノ言ニ原ツクト云ヒカク云ヒハ忠厚ニシテ弊ナシトス、

第四章　十一月十一日

去徙ハ皆其國ヲ去テ他國ニ徙ルヲ云、是レ游仕ノ人ニ就テ云、世祿ノ士國ト休戚ヲ同フスル者ノ如キハ、豈禍ヲ免レ自ラ其智ニ誇ル〻ヲ得ンヤ、人臣タル者時ノ不淑ニ遇テ諫諍死ヲ致ス、固ヨリ正義ナリ、何ソ遽ニ去徙スル〻ヲ得ンヤ、然レヒ諫行ハレズ言聽カレス、君子道消シ小人道長シタランニハ、官ヲ辭シ身ヲ退ソキ、一身ノ覺悟ヲ全フシ、緩急ノミ用ニ立タン〻ヲ計ルモ、亦是一義ニシテ即チ去徙ノ意ナリ、

第五章

此章上篇第二十章ト義小異ナリト云ヒ、要スルニ別理アル〻ナシ、人君ノ戒ニ於テ此語程親切ナルハナシ、三復詳味スヘシ、且上篇記スル所ト合攷スヘシ、

第六章

非礼之礼、非義之義、此類世間最モ多シ、權門勢家ニ奔走スルヲ俗人ハ礼ト心得、娼妓婦女ニ約信ヲ違ヘサルヲ俠士ハ義ト心得ル類、又北條足利等ノ逆賊ノ爲メニ忠義ヲ致シ、恐多クモ堂々タル　天朝ヘ楯ヲ衝キ奉ル皆是ナリ、大道ヲ明ニセスンハ礼義ノ正ヲ失ヒ非ニ陷ル〻多シ、大道ニ通スルニ非スンハ安ンソ大人タル〻ヲ得ンヤ、

第七章

養ノ一字最モ心ヲ付テ看ルヘシ、註ニ養謂ニ涵育薫陶俟ニ其自化一也ト云、涵ハヒタスナリ、綿ヲ水ニテヒタス意ナリ、育ハ小兒ヲ乳ニテソタツル意ナリ、薫ハ香ヲフスヘ込ナリ、陶ハ土器ヲ灶ニテ燒堅ムルナリ、人ヲ養フモ此四ツノ者ノ如クニテ、不中不才ノ人ヲ繩ニテ縛リ杖ニテ策ウチ、一朝一夕ニ中ナラシメ才ナラシメントニハ非ス、仁義道德ノ中ニ沐浴サセテ、覺ヘズ知ラス善ニ移リ惡ニ遠カリ、旧染ノ汙自ラ化スルヲ待ツ可シ、是人ノ父兄タルノ道ニシテ、父兄ノミニアラス、人ノ上ト爲テ政ヲ施スモ、人ノ師ト爲テ教ヲ施スモ、一ノ養ノ字ヲ深ク味フヘシ、

第八章

不爲ハ獷者ノ類ナリ、有爲ハ狂者ノ類ナリ、モト是レ兩種ノ人ナリ、譬ヘハ伯夷ノ周ノ粟ヲ食フヲ耻テ首陽ニ餓死シ、嚴子陵ノ光武ニ屈セスシテ釣臺ニ老ユル如キ、皆不爲ノ志ト云ヘシ、伊尹ノ成湯ヲ輔ケテ夏桀ヲ南巢ニ放チ、太公ノ武王ヲ勸メテ殷紂ヲ牧野ニ誅スル如キ、同シク天下ノ亂ヲ定メ萬民ノ苦ヲ救フハ、有爲ノ業ト云ヘシ、伯夷子陵、伊尹太公、分テ云ヘハ兩種ノ人ナリ、然モ伊尹有莘ノ野ニ耕ヘシ、太公渭川ニ釣セシ時ニ當テ、富貴利達一ツモ其心ヲ動カス所ナシ、是レ其不爲ノ志ナリ、此志アレハコソ、有爲ノ業モ出來タルナリ、又伯夷子陵ノ如キ不爲ノ志アル人ハ、苟モ其位ニ當リ其事ニ任スルヿアラハ、固ヨリ亦有爲ノ業ヲ成スヿ必セリ、今吾徒罪ヲ獲テ獄ニ坐ス、眞ニ能ク心ヲ道德ノ域ニ樂シマシメ、天下ノ事一ツモ心ヲ動カスヿナク、不爲ノ志確乎タラハ、一旦事變ニ臨ムヿアリモ、必ス能ク有爲ノ業ヲ成スヿヲ得ン、是レ吾カ學ヲ勤ムル所以ナリ、

第九章　十一月十二日

此章註ニ有レ爲ノ而言トアリ、此義深ク講究スヘシ、君子ノ語默動靜、義ニ合フト義ニ合ハヌトヲ顧ルノミ、何ソ後患ノ有無ヲ論センヤ、若シ後患ヲ懼ル、故ニテ、人ノ不善ヲ言ハサルヲ以テ道トセハ、唐ノ韓退之カ史ヲ爲ル者ハ人禍アラサレハ則チ天刑アリ、畏惧セスシテ輕シク之ヲ爲スヘケンヤト云ト、同日ノ論ニテ、甚タ非ナリ、柳宗元ノ駁スル如ク、凡ソ其位ニ居テハ其道ヲ直フセンヿヲ思フ、刑禍ハ惧ル、所ニ非ストノ論、最モ其正ヲ得タリ、然モ職ニモ非スシテ好テ人ヲ誹謗シ、其不善ヲ言テ無益ノ刑禍ヲ買フハ、亦愚昧ノ至ト云ヘシ、故ニ孟子斯人ノ爲ニ是言ヲ発シ之ヲ誡ムルナリ、故ニ有レ爲而言ト註スルナリ、

第十章

孔子ハ聖人ナレハ其大成ノ德至正至中、固ヨリ論ヲ待タス、然レモ世俗道義ヲ知ラス、或ハ孔子ノ行ヲ以テ太甚トナスニ至ル、孔子君ニ事ルニ祇ヲ以テス、而シテ人以テ諂ヘリトス、孔子南子ヲ見、佛肸ニ往キ、公山弗擾ニ往ク、子路以テ疑フヿヲナス、其政ヲ執ルニ至テハ立處ニ少正卯ヲ誅シ、夾谷ニ在テハ齊侯ヲ叱スルヿ蓄狗ニ類ス、是レ皆世人ノ所謂太甚ナル者ナリ、然モ道義ヲ以テ論スル時ハ、本分ノ外毫末ヲ加ルヿナシ、世俗ヨリ視ル時ハ皆太甚ニ非ルハナシ、有道ノ世ハ如何アラン、澆季ノ世ニ於テ道ヲ行ヒ義ヲ行ハ、必ス一世ノ人ヲシテ太甚ト称セシメン、若シ又太甚ノ称アルニ非ンハ、決ノ道義ニ非ス、即チ流俗ニ同シテ汙世ニ合フモノノミ、

第十一章

人ニ三等アリ、下等ノ人ハ義ニ合ハズ信ナラズ果ナラサルノ徒ニテ、是レ妄人ナリ、中等ノ人ハ信ヲ必トシ果ヲ必トシ、未タ必モ義ニ合ハサルノ徒ニテ、是レ游俠ノ類ナリ、上等ノ人ハ即チ本文ノ所謂大人ニテ、信ヲ必トセス果ヲ必トセス、惟義ノ在ル所ニ從テ行フノ人ナリ、若シ汎ク人品ヲ論セハ、中等ノ人モ亦得易キニ非ス、輕ンスルヿナカレ、然ルニ學ヲナスニ至テハ、上等ヲ捨テ何ヲカ学ハン、

第十二章

赤子之心ハ純一無僞而已ト註ス、純一ナレハ些トモ利害ヲ計較スルノ念ナク、無僞ナレハ些トモ機変巧詐ノ行ナシ、故ニ富貴貧賤死生苦樂一ツモ外物ノ僞メニ誘セラル、ヿナク、鉄石ノ腸ヲ以テ万事ニ酬酢ス、天下何事カナスヘカラサラン、

此篇大人ヲ論スル凡三章、第六章大人ノ僞サル所ヲ云、第十一章大人ノ僞ス所ヲ云、此章ニ至リ大人ノ胸中ヲ云、即チ僞ス所僞サヽル所ノ根本ナリ、

第十三章

此章註已ニ明ナリ、今更ニ一異說ヲ発シ考ニ備フ、生ヲ養フハ父母ノ目前ノ事ナレハ、甚タ狂妄ノ人ニ非ルヨリハ、可ナリニ恭敬ヲ致ス者ナレハ、是ヲ以テ遽ニ其人ヲ信シ孝子トシ、孝アレハ悌モアルヘク忠モアルヘクナト、思ヒ、大事ニ當テントセハ、大ナル誤ナルヘシ、死ヲ送ルニ至テモ尚能ク必ス誠ニ必ス信ナルヿコソ實ノ孝子ニテ、カヽル人コソ大事ニ當ルニ足ルベシ、當大事トハ大切ノ事ニ當リ、善ク是レニ堪ユルヲ云、即チ大節ニ臨テ奪フヘカラサルノ膽腸アルヲ云ナリ、當ノ字義朱註ト小異ナリ　是レ父母ノ生死ノミナラス、萬事皆此理ナリ、國強ク勢盛ンナル時ハ、孰レモ忠勤ヲ勵ムモノナリ、國衰ヘ勢去ルニ至テハ、志ヲ変シ敵ニ降リ主ヲ賣ル類寡カラス、故ニ人ハ晩節ヲ全フスルニ非サレハ、何程才智學藝アリト雖モ、亦何ソ尊フニ足ンヤ、明主ニ忠アルハ珍ラシカラズ、暗主ニ忠ナルコソ眞忠ナレ、慈父ニ孝アルハ珍ラシカラズ、頑父ニ孝ナルコソ眞孝ナレ、賞譽セラレテ忠孝ナルヿ珍ラシカラス、責罰セラレテ忠孝ナルコソ眞ノ忠孝ナレ、士大夫タル者嗜ムヘキヿ実ニ爰ニアリ、

第十四章　十一月十三日

此章重處自得ノ上ニアリ、自得ハ心ニ得(ル)ナリ、言語動作ノ間ニアラズ、然レモ其已ニ自得スルニ至テハ、言語動作ニ著ル、者モ亦自ラ別ナル者アリ、

第十五章

博學詳說ハ遂ニ約ニ歸ス、四書六經歴代史乘浩瀚ナリト云モ、其日用ノ要歸ハ一ノ誠ノ字ニ止ル、而シテ君トシテハ仁、臣トシテハ忠、父トシテハ慈、子トシテハ孝、是ノミ、然モ仁忠慈孝亦許多ノ節目アリ、許多ノ方法アリ博學詳說スルニ非スンハ、安ンソ万変ニ酬酢シ精微ヲ分析スルヿヲ得ンヤ、已ニ博已ニ詳、又其約ニ歸スルヿヲ知ラスンハ、遂ニ渉獵ト拘泥トノ弊ヲ免カレサルナリ、大氐博ヨリ約ニ歸シ、約ヨリ博ニ至ル、二ツノ者常ニ相待テ功ヲナス、而シテ詳ノ工夫約博両事ニ於テ共(ニ)切要ノ務トス、

第十六章

服レ人養レ人ノ公私、學者ニ於テ最モ精察スヘキコトナリ、蓋シ學ノ道タル、己カ才能ヲ衒シテ人ヲ屈スル所以ニ非ス、人ヲ教育シテ同シク善ニ帰セント欲スル所以ナリ、養人ノ意義、第七章、中也養二不中一、才也養二不才一ノ意ト相照シテ発明スヘシ、

第十七章

此章深ク賢ヲ蔽フヲ惡ム、賢ヲ蔽フトハ、身大臣執政ト成テ下ニ賢者アルヲ知ナカラ拔用セサルノ類ヲ云、賢ヲ見テ擧ルヿ能ハス、擧テ先スルヿ能ハサルノ義ナリ、賢ヲ蔽フスラ孟子ハ深ク惡ンテ不祥ノ実トス、況ヤ賢ヲ嫉テ是ヲ陷ル、如キハ、孟子是ヲ如何トカ云ハン、然レモ人私心ヲ挾ンテ事ヲ處スル時ハ、忠勤ノ人ニテモ或ハ己カ愛憎ヲ以テシ、或ハ意見ノ異同ヲ以テ、賢ヲ蔽ヒ賢ヲ陷ルヿ、古今往々アルコトナリ、愼ムヘシ戒ムヘシ、

第十八章

仲尼ノ川上ニ在シテ逝者ハ是ノ如シ晝夜ヲ舍テスト宣フハ、天地ノ流行ヲ以テ学問ノ工夫ヲ語ルナリ、此章孟子ノ論スル所ハ、本アル者ノ已ムコトナキヲ云、然モ其手ヲ下ス所ハ則一ナリ、凡ソ人ハ源アルノ水ヲ以テ志トスヘシ、學問ノ進修、忠孝ノ行事皆然リ、苟モ源ナク已ムコトアリ、科ニ盈タスシテ進ムコトアリテハ、誠ニ愧ヘキノ至ナリ、

第十九章　十一月十四日

學問ノ道、人ノ禽獸ニ異ル所以ヲ知ルヨリ要ナルハナシ、其異ル所ハ、五倫五常ヲ得ルト失フトヨリ外ハナシ、是ヲ失フヲ庶民トシ、勤メテ是ヲ得ルヲ君子トシ、從容トシテ自ラ存スル者ヲ聖人トス、衆人ト云モ勤勵スレハ君子トナリ其功ノ熟スルニ至テハ即チ聖人ナリ、禽獸ニ陷ルト聖人君子ニ升ルトノ分ハ、所以異ノ三字ニアリ、親切熟思スヘシ、

第二十章

其有二不レ合者一、仰而思レ之、夜以継レ日、幸而得レ之、坐以待レ旦、

周公ノ行フ所、学者ニ於テ最モ切ナリ、學者古今ニ上下シ、華夷ヲ通觀ス、其間時異ニ地殊ニ、事換リ勢違フテ、合サル者千差万別、豈擧テ數フヘケンヤ、夫ヲ知ラスシテ一概ニ論スル時ハ、必ス時勢人情ニ逆ヒ大害ヲ生スル者少カラズ、漢土ニテモ周制ヲ後世ニ行ントノ事ヲ誤ル者、漢ノ王莽、宋ノ王安石、明ノ方孝孺ノ如キ甚タ多シ、以テ鑑戒トスヘシ、又本邦ニ於テ事々漢土ニ模倣セント欲シテ事ヲ誤ル者亦多シ、近世迂儒或ハ漢土天子ノ事ヲ以テ、直ニ今ノ諸侯ニ説テ、穆々深遠垂拱無爲ヲ以テ美德トスル類少カラス、今ノ諸侯ハ即チ戰陣ノ大將ナレハ、一麾ヲ揮テ万衆ヲ指揮スルヿ固ヨリ其職ナレハ、風雪ニ立テ艱苦ヲ凌キ、山海ニ漁獵シ船馬ニ慣習スルモ、亦身軀ヲ鍛錬スルノ一助ナルニ、夫ヲハ却テ失德ノ如ク陳説スル類、皆合ハサル者アルヲ知ラサルナリ、故ニ学者是等ノ所ニ於テ、仰テ思ヒ夜ヲ以テ日ニ継クノ工夫ナクンハ、萬卷ノ書ヲ讀ムト云モ、君ヲ致シ民ヲ澤スルニ於テ、毫モ益アルヿナシ、

第二十一章

孔子ノ春秋、天下ノ邪正ヲ定メ百王ノ大法タルヿハ、論ヲ待タサルヿナリ、其他列國皆史官アリテ、時事ヲ記スル

コヲ掌トル、皆世教ニ於テ大ニ裨益アリ、其後歴代皆史ヲ廃セス、特ニ宋ノ制度ノ如キ、宰相ニテ史館ヲ兼、時政記ト云テ、榻前ニテ議論スル所ノ詞ヲ書シ、起居注ト云テ、柱下ニテ見聞スル所ノ実ヲ書ス、是ヲ日暦ト云、本邦ニテモ古ヨリ史官アリ、近世幕府列藩皆記録アリ、然モ本邦古ヨリノ通習トシテ事ヲ秘密スル故、外人妄ニ其記ヲ見ルコヲ得ス、是レ大ニ惜ムヘキコナリ、凡ソ史ニ二益アリ、一ツハ時事ヲ直書シテ少シモ忌諱スルコナケレハ、官吏畏避スル所アリテ悪ヲナサズ、勸勵スル所アリテ善ヲ勤ム、二ツハ學者記録ヲ見ルコヲ得レハ、時事ノ得失、措置ノ善悪ヲ熟知シ、他日官ニ當ルノ資トナルコ多シ、願クハ史局ヲ開キ良史ヲ撰ヒ、春秋ノ遺意ヲ尋ネ一書ヲ編輯シ、遍ク官吏學者ニ見セ度事ナリ、

第二十二章

古ヨリ學問ハ皆傳習來歴アリ、孟子ハ子思ノ門人ニ學ヒ、子思ハ曾子ニ學ヒ、曾子ハ即チ親シク孔門ノ高弟ナリ、又宋儒ノ如キ周濂溪ヨリ二程ニ傳ヘ、二程ヨリ張横渠羅豫章李延平等ノ諸賢ヲ歴テ朱子ニ傳フ、此類古今皆然ラサルコナシ、今吾輩獄ニ坐シ、良師ニ從テ道ヲ聞クコヲ得ス、常ニ恐クハ其学習スル所私見私意ニ陷リ、聖人ノ大道ニ違ンコヲ、故ニ常ニ心ヲ虛ニシ懷ヲ披キ、古人ノ眞面目ヲ窺フヲ以テ志トス、讀テ五世而斬、私淑ニ於人ノ章ニ至リテ、感慨ナキコ能ハス、

第二十三章

此章孟子事ニ臨テ深思熟慮スルノ目ヲ擧ク、此類推シテ廣メハ豈極リアランヤ、抑朱子註ニ於テ過取固害ニ於廉、然過與亦反害ニ其惠、過死亦反害ニ其勇、ト云、固・然・亦・反ノ四字ヲ下シ、斟酌商量ヲ示ス、本文語意モト此抑揚アルニ非ス、特ニ朱子書ヲ辨シ後人ヲ曉サント欲スルノ老婆心ヲ見ルヘシ、常人ノ情多クハ取易キニ失ス、故ニ固ト云テ抑中ノ抑ヲ示ス、與ルト死スルトハ多クハ難キニ失ス、故ニ過テ與ヘ過テ死スルニ於テハ、過テ取ルト文ヲ異ニシ、然亦反ノ三字ニテ抑中ノ揚ヲ示ス、學者中道ニ志スハ固ヨリナレモ、其次ハ過テ取ランヨリハ過テ與ヘンニ如カス、過テ生キンヨリハ過テ死センニ如カス、是亦知ラスンハアルヘカラス、

第二十四章　十一月十七日

此章尹公之他ノ友ヲ取ルノ端シキヲ以テ、羿ノ罪其友ヲ取(ル)端シカラサルニアルヲ明ス、而シテ二人ノ事固ヨリ論スルニ足ルコナキハ、註已ニ辨ス、扨友ヲ取ルノ端シキト否ラサルトハ、実ニ一身禍福ノ根元タルコ斯ノ如シ、但シ羿ノ罪アルハ徒ニ友ヲ取ルノ端シカラサルノミニ非ス、彼固ヨリ逆戻ノ人、他人ノ殺ストナル固ヨリ其所ナリ、凡ソ人ノ殺害疾悪スルトナル大氐自ラ致ス所以ノ罪アリ、譽ハ吾人ヲ罵レハ、人亦吾ヲ罵ル、吾レ人ヲ辱ムレハ、人モ亦吾ヲ辱ムルカ如シ、徒ニ他人ヲ咎ムヘキノミニ非ス、是則本文言外ノ意、察セスンハアルヘカラス、

第二十五章

西子蒙ニ不潔ニハ俊才博学ニシテ美德善行ナキ者ノ譬トスヘシ、悪人齊戒沐浴スルハ劣才陋学ニシテ美德善行アル者ノ譬トスヘシ、然ラハ則士ニ貴フ所ハ、德ナリ才ニ非ス、行ナリ学ニ非ス、此章ヲ讀テ以テ士ノ先務ヲ知ルヘシ、

第二十六章

天下之言レ性也、則故而已矣、

性ハ即チ理ナリ心ナリ、性理心ナル者ハ、形色聲臭ノ見聞スヘキナシ、唯其已ニ然ルノ跡ニ就テ見レハ自ラ明ナリ、是ヲ故ト云、凡ソ空理ヲ玩ヒ實事ヲ忽ニスルハ学者ノ通病ナリ、是皆空疎迂僻ノ輩ノ口ニ藉ク所ニシテ、篤學実行ノ士ノ聞クヲ欲セサル所ナリ、故ニ孟子性善ヲ道フ必ス堯舜ヲ称ス、又其牽牛ノ譬赤子入井ノ譬等ノ如キ、皆跡ノ見ルヘキ者ヲ以テ人ニ示スノミ、一モ空理ヲ說カス、是レ學者最モ思ヲ致スヘキ所ナリ、然ラサレハ高ク性理心ヲ辨論シテ忠孝節義ニ於テ一モ関繫ナキ者、往々是アリ、読書ノ術ノ如キ、世或ハ經ヲ好ミ史ヲ廢スル者アリ、是レ大ニ非ナリ、吾常ニ史ヲ讀ミ古人ノ行事ヲ看テ、志ヲ勵スヿヲ好ム、是亦故而已矣ノ意ナリ、孔子モ宣フヿアリ、吾之ヲ空言ニ載セント欲ス、之ヲ行事ニ載スルノ親切著明ナルニ如ズト、蓋シ亦此意ナリ、

第二十七章

禮ハ一定ノ規矩、中正ノ標準ナリ、俗ノ如キハ或ハ恭ニ過テ諂ニ入リ、傲ニ過テ慢ニ失スル者アリ、而シテ皆禮ニ非ス、若シ眞ニ禮ヲ行ハントナラハ孔孟ノ爲ス所ヲ見テ知ヘシ、孔子ノ下ニ拜スルハ、慢ニ失スルヲ抑テ禮ニ帰スルナリ、孟子ノ言ハサルハ、孟子獨不與驩言諂ニ入ルヲ矯テ禮ニ帰スルナリ、而シテ其道ニ於ケルハ則同シ、當今禮ト俗ト皆孔孟ノ時ト同シカラス、然レ𪜈細ニ是ヲ考フルニ、豈諂慢禮ヲ失スル者ナカランヤ、宜シク深ク思ヲ致スヘシ、是亦第十章仲尼不レ爲二已甚一者ノ意ト、互ニ相発明スヘシ、

第二十八章

此章切實痛快、宜シク一通ヲ錄シ座右ニ貼シテ朝夕観省スヘシ、其義明白辨ヲ待タス、存心ノ二字一章ノ骨子、仁禮ハ其目ナリ、人恒愛二敬之一ハ是レ常ヲ云、二ノ自反スルハ是レ変ヲ云、愈反シテ愈切ナリ、忠矣ト云ニ至リテハ自ラ居ル甚タ高シ、常人或ハ前二反ヲ能スト云𪜈、忠矣ニ至テハ多クハ忿恨ニ堪ルヿ能ハズ、是レ其自ラ居ル妄人ト均シキノミ、說テ終身之憂一朝之患ニ至リテ、字々直ニ肺腸ヲ刺スヲ覺フ、遂ニ如二舜而已矣一ニ落着ス、其工夫ハ則亦仁禮ノ二字ノミ、是レ一章首尾照應ノ所ナリ、是等ノ章孟子中ニ在テモ亦多ク得ベカラス、況ヤ他書ニ於ヲヤ、豈容易ニ看過スヘケンヤ、

第二十九章　十一月十八日

禹稷顏回同レ道、

禹稷顏回其行同カラスト云𪜈、其道ハ則同シキ所深ク思フヘシ、顏回ハ己ヲ脩ムルナリ、禹稷ハ民ヲ救フナリ、而シテ皆仁ノ道ナリ、仁者ハ己立ント欲ゞ人ヲ立ツ、己達セント欲ゞ人ヲ達ス、己ヲ脩ムルノ心アリ、故ニ民ヲ救フノ心アリ、是其道同シキ所ナリ、大賢以上皆然リ、中人以下或ハ其一偏ヲ得ルモ、亦是一種ノ人物ニシテ、凡庸人ノ比ニ非ス、伊尹ノ任、伯夷ノ清ノ如キ、其地然ラシムルト云𪜈、抑亦性質好尚自ラ同シカラサル者アリ、況ヤ中人以下ニ於テヲヤ、然ルニ同道ノ本文ニ泥ミ、進退出處ノ際ニ當テ一概ニ拘泥スル時ハ、却テ安排ノ失アリ、大氏私心ダニ除キ去ル時ハ、進モ亦可ナリ、退モ亦可ナリ、出ルモ亦可ナリ、處ルモ亦可ナリ、私心未タ除カサレハ、進退出處亦皆不可ナリ、予性狂瞽常ニ鄉鄰ノ間ニ被髮纓冠スルノ過アリ、然𪜈利名ヲ謀ルニ非ス、陋巷ノ簞瓢尤モ其

安スル所ナリ、因テ知ル禹稷ノ行アル者ハ、顔回ノ心ナカルヘカラサルヿヲ、若シ勞ヲ憚リ身ヲ顧ミ、禹稷ノ行ヲナサス、顔回ノ跡ニ託スル者ハ、又豈眞ノ顔回ナランヤ、

禹稷當二平世一、顔子當二亂世一、

孔顔ノ時ノ亂世タルハ、春秋諸書ヲ觀テ知ルヘシ、獨リ禹稷ノ時、洪水天ニ滔シ、黎民食ニ艱ム、何ソ平世ト云フヿヲ得ンヤ、而シテ孟子是ヲ平世ト云者ハ、堯舜ノ君アリ禹稷ノ臣アリ、是其平世タル所以ナリ、春秋ノ時ハ天子職ヲ上ニ失ヒ、孔顔ノ聖賢タモ草野ニ伏匿ス、是其亂世タル所以ナリ、故ニ君子上ニアリ小人下ニアレハ、天災時變夷狄禽獸アリト云ヒ平世ノ道ナリ、小人上ニアリ君子下ニアレハ、天災時變夷狄禽獸ナシト云ヒ亂世ノ道ナリ、亂ハ兵戰ニモ非ス、平ハ豐儉ニモ非ス、君々タリ臣々タリ、父々タリ子々タリ、天下平ナリ、且今時ノ如キ平トセンカ亂トセンカ、當サニ思テ得ヘシ、

第三十章

世俗所レ謂不孝者五、

此五條簡明的實特ニ民庶ニ於テ最モ切ナリ、能此五條ヲ眞心ニ教諭セハ、民俗ヲ淳ニスルニ於テ良益アルヘシ、世教ニ志アル者、淺近ヲ以テ是ヲ忽ニスルヿ勿レ、

孟子章子ヲ愛敬スルハ、章子ヲ罪ナシト云フニ非ス、其自ラ罪ヲ知リ自ラ咎悔スルノ誠ナルヲ以テナリ、是朱注ニ所謂至公至仁ナリ、（公ナル故ニ罪ナシト云ハズ、仁ナル故ニ自ラ咎悔スルヲ愛ス、）知ルヘシ古ノ君子ノ人ヲ待ツ、寛恕ニシテ仁ナル故ナリ私スル所ナキヿヲ、公ナル故ナリ今ノ君子ハ然ラス、前日一過罪アレハ、悔ユト云ヒ悛ムト云ヒ、曾テ是ヲ恕セス、行譏ルヘキナキ者ハ、其心ノ必シモ然ラサル所ヲ探テ是ヲ罪ス、其行偶然中正ヲ失スル者アレハ、更ニ其心ヲ併セテ是ヲ罪ス、殆ント古ノ君子ニ異ナリ、

第三十一章

曾子ノ居ル所ハ師道ノ正ナリ、子思ノ行フ所ハ臣道ノ常ナリ、孟子ノ意蓋シ曾子ヲ以テ自ラ居リ、是亦子思ニ異ルニ非サルヲ明スナリ、抑臣道ノ常ハ吾輩今日最モ講究スヘキ所ナリ、師道ニ至テハ敢テ論スル所ニ非ス、然ヒ試ニ君道ヲ以テ是ヲ論スル時ハ、師道彼カ如ニシテ然ル後臣道亦自ラ此ノ如クナラン、惜カナ今ノ人君曾子ノ如キノ師ナシ、安ソ子思ノ如キノ臣ヲ得ンヤ、然ヒ後世迂僻ノ儒、妄リニ自ラ尊大ニシ、曾子ノ師道ヲ以テ自ラ居ラント欲スル如キ、是亦惡ムヘシ、王安石ノ講官ヲ以テ坐講ヲ爭フ如キ是ナリ、（曾鞏子固講議アリ、意安石ヲ駁ス、就テ見ルヘシ）

第三十二章

魏武自ラ言フ、吾四目ト兩口トアルニ非ス、唯智多キノミト、孟子ノ意亦然リ、兩目一口、堯舜ト雖ヒ常人ト同シキノミ、其異ナル者ハ心ナリ、心存スレハ則堯舜ナリ、心失スレハ則常人ナリ、然レヒ心存シテ智多キノ人ハ其精神氣象自ラ常人ニ異ナル者アリ、王ノ使シムル人果シテ善ク是ヲ觀ルヿヲ得ルヤ否、

第三十三章

此章富貴利達ヲ求ムルノ人ヲ耻カシム痛快ト云ヘシ、此種ノ人物頑鈍無耻、古今同流國ノ萎靡振ハサル、實ニ是ニ

厚ツク、願クハ大有力ノ人アリテ、此章ヲ三復シテ其人ヲ罵詈シ、以テ廉耻ノ風ヲ一振シタキヿナリ、離婁ノ篇茲ニ終ル、孟子先生意アルヿニヤ、

離婁下篇凡三十三章甚タ條理アルヲ見ス、但シ首章先聖後聖其揆一也ニ始ル、第二十九章舜稷顏回同道トアリ、第三十一章曾子子思同道トアリ、三章同意ニシテ皆時中ノ義ヲ明ス、又舜（第十九章）禹湯文武周公（第二十章）孔子（第二十一章）及ヒ自ラ言フノ章（第二十二章）ノ如キ、亦群聖時ニ中スルノ意ヲ見ス、因テ知ル通篇時ニ中ノ義、且世俗ノ惑ヲ解キ誤ヲ正ス者多シ、子產ノ惠（第二章）舊君ノ服（第三章）仲尼ノ甚（第十章）翠ノ罪（第二十四章）公行子ノ喪（第二十七章）匡章ノ不孝（第三十章）ノ諸章尤モ明ナリ、其他推シテ知ルヘシ、然モ深ク拘ルヿナカレ、

講孟劄記　卷之三下

萬章上　十一月二十日

首章

人悅レ之好色富貴、無レ足二以解一レ憂者一、惟順二於父母一、可二以解一レ憂、

此章孝子ノ心ヲ說ク、至レリ盡セリ、而シテ其要又此二句ニ歸ス、蓋一心ノ慕フ所、父母ノ外又アルヿナシ、故ニ世間千万ノ事皆輕シ、是孝タル所以ナリ、憂トハ心鬱悶シテ遣ル所ナク、食テ味ヲ甘ンセス、寐テ席ヲ安ンセス、樂ヲ聞テ樂シマス、美ヲ服シテ喜ハサルノ謂ニシテ、窮人ノ歸スル所ナキカ如キハ、是ヲ形容スルナリ、父母ニ順ナラサルニ當テハ、此憂心誰人モアルヿナリ、然モ悅之好色富貴アリト云モ、尙且憂ヲ解クニ足サルハ、唯舜ノミ然リトス、是至孝タル所以ナリ、又常人ハ人悅之好色富貴ノ欲ノ爲ニシテ、更ニ父母ニ順ナラサルヲ顧ミサル者甚タ多シ、是最モ戒ヲ加ヘシ、

第二章

孟子ノ謬妄未タ此章ヨリ甚シキハナシ、舜之不レ告而娶ノ非、已ニ離婁上篇第二十六章ニ於テ是ヲ論ス、此章如告則廢二人之大倫一、以懟二父母一ト云、最モ非ナリ、不レ告而娶ハ父子ノ大倫ヲ廢スルナリ、何ソ唯男女居レ室ノ大倫ヲ廢スルノミナランヤ、且男女居レ室ノ大倫ヲ廢シタルトテ、父母ヲ讎怨スル豈孝子ノ心ナランヤ、其謬妄論ヲ待タ

ス、帝亦知ニ告焉則不レ得レ妻也ノ非ハ、程子ノ辨スルカ如ク、上ヨリ下ヲ治ムルヿナレハ、何ソ告ルヲ用ヒン、」萬章問フ所完廩浚井ノ二事、蓋シ當時ノ俗說、所レ謂齊東野人ノ語ナル者ニシテ、甚タ人情ニ近カラス、朱註ニ云フ其有無不レ可レ知ト、余ハ則チ斷シテ其無ヲ知ル、註引ク所史記ノ云云、本文ヲ証スルニ足ラス、恐クハ史遷本文ニ因テ妄作シテ、敷衍スルノミ、詩ニ天命ニ亂焉、降而生レ商ヲ、毛傳ニハ亂焉降ヲ以テ郊禖ヲ祀ルノ候トス、而シテ史遷簡狄行浴、見ニ燕墮ニ其卵ヲ一取呑レ之因生レ契ノ說ヲ造リ、履ニ帝武敏ヲ一、毛傳ニハ高辛ノ行ニ從フトス、而シテ史遷姜原出レ野、見ニ巨人跡ヲ一、忻然踐レ之、因生レ稷ノ說ヲ造タルノ類、以上蘇老泉學妃論ニ見ユ　繆妄斯ノ如キ者遷カ常談、何ソ史記ヲ引テ本文ヲ証スルヲ得ンヤ、」程子象憂亦憂、象喜亦喜、人情天理、於レ是爲レ至、此說甚妙、試ニ思フニ、舜ノ心象ノ憂喜スルノ事ヲ同シク憂喜スルニ非ス、象ノ憂喜スルヲ憂喜スルナリ、譬ハ慈親ノ愛兒ヲ視ルカ如シ、兒マサニ喜笑歡娛スレハ親ノ心甚喜フ、兒方ニ憂患涕泣スレハ親ノ心甚憂フ、是親ノ憂喜人情ニ発シ天理ニ原ツキ、少シノ詐僞アルニ非ス、若シ其憂喜スル所ノ事ヲ同シク憂喜スルト云ハヽ、大人小人憂喜スル所各異ナリ、而シテ強テ是ヲ同セントセハ僞ノミ、抑聖人ノ意ニ於テ合フヿアルヤ否ハ知サレ𪜈、今別ニ一論ヲ爰ニ設ク、象ノ忸怩タルニ當テ、舜幾微ノ言面ニ著ルアリテ、汝向ニ我ヲ殺サント欲ス、吾已ニ其謀ヲ知ルノ意ヲ示サハ、舜ノ禍踵ヲ旋サス、舜ノ從容琴ヲ鼓シ、惟茲ノ臣庶、汝其于レ予治メヨナト、云フ、是レ舜ノ大度弘量ニテハ自然ニ発スル所ニシテ、是レ象カ心ヲ安スルヿヲ得ル所以ナリ、危疑ノ際此度量ナクンハ、必禍ヲ免ヿ能ハス、若シ夫古今奸雄多ク此術ヲ借リ用ユ、是レ亦何ソ言フニ足ラン、

第三章　十一月二十一日

不レ藏レ怒焉、不レ宿レ怨焉、

此二句尤モ善シ、徒ニ弟ニ於ルノミナラス、仁人ノ心他人ニ於ケルモ亦斯ノ如シ、論語ニ匿レ怨而友ニ其人ヲ一、左丘明恥レ之、丘亦恥レ之ト云、亦同意ナリ、凡ソ人ニ交ルノ道、怨怒スル所アラハ、直ニ是ヲ忠告直言スベシ、若シ忠告直言スルヿ能ハスンハ、怨怒スルヿナキニ若カス、若シ然ラスシテ是ヲ胸中ニ藏匿留蓄シテ、時ヲ待テ是ヲ発セント欲スルハ、陰柔小人ノスル所ニシテ誠ニ臆病ト云ヘシ、君子ノ心ハ天ノ如シ、怨怒スル所アレハ雷霆ノ怒ヲ発スルヿモアレ𪜈、其事解ルニ至テ、又天晴日明ナル如ク、一毫モ心中ニ殘ス所ナシ、是君子陽剛ノ德ナリ、

親レ之欲ニ其貴一也、

身天子タリ弟匹夫タラハ、親シマント欲スト云𪜈、貴賤懸隔ニシテ、勢相親ムヿ能ハス、故ニ是ヲ貴スルトナリ、天子使下吏治ニ其國一而納中其貢稅上(爲)、

明ノ王陽明象祠記ニ、漢ノ諸土天子ヨリ相ヲ置クハ、舜ノ象ニ於ケルニ倣フナラントアリ、是實ニ良法ト云フヘシ、德川氏三家其他ノ親藩ニ於ケル附家老アリ、亦此意ナラン、但シ漢ノ國相ハ時々ニテ轉移ス、德川氏ノ附家老ハ世襲トス、是ヲ異ナリトス、舜ノ吏如何ヲ知ヘカラスト云𪜈、臆ヲ以テ是ヲ度ルニ、亦漢ノ國相ノ如クニシテ、世襲ニハ非ルヘシ、

註吳氏曰、仁之至、義之盡也ト、之ヲ有庫ニ封シ以テ富貴ニスルハ、仁ノ至レルナリ、吏ヲシテ其國ヲ治メシメ、

其國ニナスアル能ハサルハ、義ノ盡セルナリ、唐ノ明皇長枕大被ヲ作リ、兄弟同寢スルハ、仁ヲナサント欲シテ仁ニアラス、又漢ノ景帝ノ梁王ニ於ル、始メハ之ヲ縱ニスルヿ太タ過ク、之ヲ仁ト云ヘカラス、後ニハ之ヲ容ムルヿ太タ峻シ、義又之ヲ失フ、明皇景帝ノ說ハ語類ニ原ツク、

第四章

說レ詩者、不二以レ文害レ辭、不二以レ辭害レ志、以レ意逆レ志、是爲レ得レ之、

三句讀書ノ要訣徒タ詩ヲ說クノミナラス、凡ソ讀書ノ法ハ吾心ヲ虛クシ、胸中ニ一種ノ意見ヲ構ヘス、吾心ヲ書ノ中ヘ推入テ、書ノ道理如何ト見、其意ヲ迎ヘ來ルヘシ、今人書ヲ讀ム、都テコレ書ヲ把テ我心ヘ引ツクルナリ、志ヲ逆ルニ非ス、是亦語類ニ原ツク余謂フニ有力ノ人書ヲ觧シ、附會牽強ニ涉ル者多シ、皆志ヲ逆サルノ過ナリ、然モ無識ノ人書ヲ信スルニ過キ、或ハ辭ニ泥着シ、活眼ヲ開キ活讀スルヿ能ハス、更ニ一辯ヲ生スル者アリ、此處ノ味自得ニアリ、言傳シ難シ、大氐勿レ忘勿二助長一ノ工夫ヲ以テ悟ルヘシ、

詩曰、永言孝思、孝思維則、

註ニ人能長言孝思而不レ忘、則可ヨ以爲二天下法則一也、余謂フニ、舜天下ノ君トナリ、自ラ其父ヲ尊テ天子ノ父トシ、天下ヲ以テ養フ、其尊養ノ道並ニ至レリ、是ヨリ下公侯卿大夫ニ至リテモ、皆是ニ倣フヿヲ得ルナリ、喻ヘハ匹夫ヨリ拔擢シテ公侯トナレハ、其父匹夫タレモ亦公侯ノ父ナリ、卿大夫トナレハ、其父匹夫タレモ亦卿大夫ノ父ナリ、是レ所レ謂天下ノ法則トナスヘキ者ナリ、抑後世薄俗、子タル者少シク貴顯ナレハ、却テ父母ニ驕誇ナル者甚タ多シ、是大ニ非ナリ、孔子於二鄉黨一恂々如也、似二不レ能レ言者一、況ンヤ其父母ニ於テヲヤ、宜シク舜ノ事ヲ以テ天下ノ法則トスヘシ、

第五章　十一月二十二日

第六章

二章通シテ一章トナシミルヘル、（シカ）此章ニ於テ天命ノ說ヲ明ニスヘシ、蓋シ古ヘ天ト称スル二義アリ、天視自二我民視一、天聽自二我民聽一ト、是一義ナリ、蓋シ天モト心ナシ、民心ヲ以テ心トス、視聽アルニ非ス、民ノ視聽ヲ以テ視聽トス、凡ソ人ハ天地ノ氣ヲ得テ形トシ、天地ノ理ヲ得テ心トス、是人心ヲ以テ天心トスルノ義ナリ、故ニ天下ノ朝覲訟獄謳歌スル者皆歸スルヲ天也ト云ヘリ、莫二之爲一而爲者天也、莫二之致一而至者命也ト、是一義ナリ、蓋シ人力ノ及ハサル所ヲ指シテ云フ、乃チ舜禹益相去久遠、其子之賢不肖皆天也ト云モノニシテ、人ノ夭壽智愚ヨリ、萬端ノ損得幸不幸等、都テ人力ニ任セヌヿ皆是ナリ、古人天ヲ說ク、此二義ノ外更ニアルヿヲキカス、然ルニ漢儒以來洪範春秋ノ說ヲ附會シ、五行天文種々ノ說ヲ設ケ、世ヲ眩惑シ、又唐ノ六典ニハ、大瑞上瑞中瑞下瑞ノ目ヲ載スルニ至ル、是所レ謂天ヲ誣ルノ甚シキ者ニシテ、余甚タ此類ヲ惡ミ、務メテ是ヲ排斥ス、而シテ此說已ニ人心ニ漸漬シ、遽ニ破リ難シ、唐ノ柳宗元ガ天說、時令論、貞符等ノ諸篇、其論極メテ明透ナリ、余常ニ好テ称道ス、今又孟子ノ此章ヲ得テ根據トス、

使二之主レ祭、而百神享レ之、

祭テ神ノ享ルトハ、我カ誠心ノ徹スルヲ云、舜大麓ニ入レハ烈風雷雨ニモ迷ハスト、即チ此事ナリ、又易ニ震百里ヲ驚カス匕鬯ヲ失ハスト云モ同シコトナリ、天地鬼神素ヨリ物ナシ、然ルニ名山大川宗廟社稷、皆人心ノ自然ニ崇敬スル所、故ニ祭祀スル者斉戒沐浴、必ス誠ニ必ス敬ナレハ、自ラ著明スル物アル、是レ則チ百神ノ享ル所ナリ、故ニ神ノ享ルハ心ノ誠アルナリ、心已ニ誠ナレハ、以テ事ヲ治メテ百姓ヲ安ンスヘシ、此理ヲ知ラスシテ、神ノ享ルニ至テ異端怪誕ノ説ヲ附會スルコトナカレ、

匹夫而有二天下一、繼レ世以有二天下一、

此義天子ヨリ士庶人ニ達ス、天下國家創業開國ノ主ハ、皆德アリ時アルニ非レハ能ハサルコト勿論ナリ、乃チ士庶人ニ至テモ、一家ヲ興隆成立スルコトハ甚タ難シ、且諸士ノ如キ各々俸祿ヲ繼クコト、皆其祖先數十年間沐雨櫛風ノ勞、粉骨碎身ノ功ニ因テ、百石五十石ノ微祿ニテモ、漸クニ賜フ所ナレハ、容易ナラサルコトナリ、而ルニ其子孫ニ至テモ、甚タ狂悖ノ至ニ非ルヨリハ、舊ニ仍テ上ヨリ其祿ヲ下シ置ルヽ、人君天意ヲ奉承シテ行フ所ニシテ、限リナキ厚恩ト云ヘシ、此理ヲ弁ヘス、不才無能ノ身ニシテ、莫大ノ祿ヲ食ミ、君恩モ祖德モ考ヘスシテ、得タリ良シテ、我レハ大祿ノ士ナリト人ニ誇ル、懼ルヘキノ至ナリ、宜シク深ク省ルヘキコトナリ、獨リ天子ノ事トノミ看過スヘカラス、

第七章　十一月二十四日

進退出處ノ道、伊尹ニ至テ一章遺憾ナシト云ヘシ、其自ラ任スルニ天下ノ重ヲ以テシ、斯民ヲ覺シ斯民ヲ救フ、固ヨリ所レ謂聖ノ任ナル者ニシテ、其畎畝ノ中ニ処リ、堯舜ノ道ヲ樂ミ、必スヤ湯ノ三聘ヲ待テ、然ル後敢テ出ツ、其自ラ待ノ重キ、又斯ノ如シ、孔子ト云ヘルモ亦是ニ過キス、孔子魯衛陳宋ニ奔走スルハ、即チ伊尹ノ任ニシテ、陳ニ在シテ魯ノ狂獧ヲ思フハ、伊尹斯民ヲ覺スルノ志ナリ、易ヲ讀テ韋編三絶シ、夏殷ノ禮吾能ク之ヲ言フハ、伊尹畎畝ノ中ニ處リ堯舜ノ道ヲ樂シムノ心ナリ、孟子ハ孔子ヲ学フ者ナリ、而シテ又常ニ伊尹ヲ称道ス、且其自ラ居ルニ云ク、志ヲ得テハ民ト之ニ因ルトハ、斯民ヲ覺シ斯民ヲ救フノ志ナリ、志ヲ得サレハ獨リ其身ヲ善クスト云ハ、畎畝ノ中ニ處リ堯舜ノ道ヲ樂ムノ心ナリ、後世諸葛孔明親ラ南陽ニ耕シ、常ニ自ラ管仲樂毅ニ比シ、先主ノ三顧ヲ待テ後、初テ出仕フ、其仕フルニ當テハ、漢賊兩立セズ、王業偏安ナラサルヲ以テ、奸兇ヲ攘除シ、漢室ヲ興復スルヲ己カ任トス、何ソ其伊尹ニ髣髴タルヤ、先賢謂フ伊尹ノ志ヲ志シ、顏淵ノ学ヲ学フト、又志ヲ立ルハ明道希文ヲ以テ主本トスト、人或ハ伊尹希文ノ志ヲ以テ、民ヲ救フノ一偏トシ、顏淵明道ノ学ヲ以テ、己ヲ修ムルノ一偏トシ、二ツノ者ヲ兼備シテ後、始テ完全トス、殊テ知ラズ聖賢己ヲ修ムル、民ヲ救フ、始ヨリ二道ナシ、殊ニ伊尹ノ如キハ、孔子ト符ヲ同フシ、又孟子ノ学フ所實ニ是ニ外ナラス、豈一偏ノ人ナランヤ、

天之生二此民一也、使二先知覺一後知一、使二先覺覺一後覺一也、予天民之先覺者也、予將下以二斯道一覺中斯民上、非二予覺一之而誰也、

此一節反復誦讀以テ志ヲ勵スヘシ、余カ愚劣、事ニ於テ一モ知覺スル所ナシ、何ソ天民之先覺者ヲ以テ自ラ居ルヘケンヤ、其狂妄自ム揣ラサルモ亦甚シ、然ルニ玆ニ説アリ、知ト云亦唯志ノミ、苟モ能ク伊尹ノ志ヲ以テ自ラ信セハ、

知覚ニ於テ亦自ラ得ル所アラン、然ラスシテ無知無覚ヲ以テ徒ニ自ラ退避スル者ハ、自棄ノ甚シキナリ、

聖人之行不レ同也、或遠或近、或去或不レ去、歸レ潔ニ其身一而已矣、

此語余深ク尊信スル所ナリ、苟モ其身サヘ潔ケレハ、行ノ同異、何ソ深ク論スルニ足ラン、之ヲ去ルハ微子ノ仁ナリ、之カ奴トナルハ箕子ノ仁ナリ、諫テ死スルハ比干ノ仁ナリ、武王ヲ助ケテ紂ヲ誅スルハ大公ノ仁ナリ、周粟ヲ食ハスシテ首陽ニ餓ルハ夷齊ノ仁ナリ、此類地同シテ行異ナル者、古今甚タ多シ、細カニ是ヲ論スル時ハ、功ノ大小事ノ優劣ハアルヘケレ𪜈、其身ヲ潔スルニ至テハ、皆仁ト云ヘシ、潔スルハ私心ナキヿナリ、即己ヲ正フスルノ謂ナリ、拘儒或ハ此義ヲ失シ、一律ヲ執テ萬人ヲ議シ、或ハ己ヲ以テ人ヲ論ズ、是青史中全人ナキ所以ナリ、又滿世界全人ナキ所以ナリ、此義又離婁下篇第二十九章、禹稷顏回同道ノ下ニモ論ス、

第八章

孔子進以レ禮、退以レ義、

註徐氏曰、禮主ニ於辞遜一、故進以レ礼、義主ニ於断制一、故退以レ義、難レ進而易レ退者也ト、此說甚タ明白ナリ、此義又離婁下篇第二十三章ト合セ攷フヘシ、

觀ニ近臣一以ニ其所レ爲レ主、觀ニ遠臣一以ニ其所レ主、

是人ヲ觀ルノ妙訣ナリ、凡ソ人ヲ觀ルハ、其交ル所ノ人ヲ見レハ、其大畧ヲ見ルヘシ、君子ハ德ヲ以テ相群シ、小人ハ利ヲ以テ相類スルヨリ、同学同藝ノ類ニ至テモ、亦皆是ヲ推シテ知ルヘシ、魏ノ李克ノ文侯ニ答ヘテ、居視ニ其所レ親、富視ニ其所レ與、達視ニ其所レ擧、窮視ニ其所レ不レ爲、貧視ニ其所レ不レ取ト云モ、亦是ニ木ツクナラン、

第九章

百里奚ノ智、不レ可レ諫而不レ諫、知ニ穆公之可ニ與有レ行、並ニ人ヲ知ルナリ、知ニ虞公之將レ亡、預シメ成敗ヲ知ルナリ、是等ノ處ニ於テ、古人智ノ字ノ正解ヲ知ルヘシ、

萬章上篇凡ソ九章、首章ヨリ四章ニ至ルマテ、皆舜ヲ論ス、五章六章、舜禹益伊尹周公ヲ論ス、七章伊尹ヲ論ス、八章孔子ヲ論ス、末章百里奚ヲ論ス、時世ヲ以テ次序ヲナス、條理自ラ明白ナリ、

乙卯十二月十五日、餘特恩脫レ獄歸レ家、而禁令頗嚴、足不レ出ニ戸庭一、席不レ延ニ故舊一、掃レ室靜處、獨與レ書親、家嚴家兄惜ニ余在レ獄所レ著講孟劄記未レ備、欲ニ必成ニ其編一、因又把ニ孟子一講レ之、繼*成劄記、外叔久保翁亦見レ枉焉、本月十七夜爲レ初、　矩方誌、

*（此字不明につき、荻市松陰神社藏久坂筆寫本により補った）

萬章下

首章

始ニ條理一者智之事也、終ニ條理一者聖之事也、智譬則巧也、聖譬則力也、

智ト聖ト是全章ノ綱領ナリ、智ハ射ノ巧ニシテ、即所レ謂致知ス、聖ハ射ノ力ニシテ、即所レ謂力行ナリ、知ト行トニツニシテ一ツ、一ニシテ二ツ、王陽明知行合一ノ說、固ヨリ自ラ當ル所アリト云𪜈、是等ノ所ニ至テハ、知先ニ

シテ行後トセサレハ明ナラス、凡ソ人ノ志ヲ勵マシ行ヲ砥スルニ、学問ノ工夫ヲ捨テ、唯行事一偏ニノミ拘泥スル時ハ、的ヲ準セズシテ強弓ヲ引キ長箭ヲ放ツカ如シ、其達スル愈遠クシテ、其中ル愈疎ナリ、故ニ知ヲ以テ先トセサルヿヲ得ス、是行ヲ主トシテ学ヲ廃スル者ノ誡トスヘシ、又讀書明理ノミヲ専務トシテ、曾テ實行實事ノ上ニ於テ、毫モ砥勵スル所ナキ者ハ、的ノ大小遠近悉ク詳審スト云ヒ、未タ曾テ弓ヲ把テ体ヲ習シタルヿナキカ如シ、一旦矢ヲ放ツ、其遠キニ及フヿ能ハサルハ、論ナキノミ、故ニ行ヲ以テ重トセサルヿヲ得ス、是学ヲ主トシテ行ヲ廃スル者ノ誡トスヘシ、然ヒ是レ吾徒小人知行偏廃ノ弊ヲ言ノミ、其實ハ知ニシテ行ヲ廃スルハ眞ノ知ニ非ス、行ニシテ知ヲ廃スルハ実ノ行ニ非ス、故ニ知行二ツニシテ一ツ、而シテ先後亦相待テ濟スヿアルナリ、抑伯夷伊尹柳下惠ノ力アリテ巧ヲ闕クト云者ハ、淺近ノ論ニ非ス、孔子ノ巧力俱ニ全キヲ以テ是ヲ比シテ、初テ其少シキ闕アルヲミルノミ、孔門ノ諸子、顔淵閔子冉牛ノ具体而微ナル如キ、巧ニシテ力足ラスト言ヘシ、子夏子游子張ノ一体ヲ具スル如キ力アリテ巧足ラスト言フヘシ、後ノ道ヲ学フ者、孔子ヲ以テ宗トスレハ、巧力俱ニ至リ、知行兼テ進ムヘキハ勿論ナレヒ、前輩ヲ論及ヒ人材ヲ育スル如キハ、妄ニ是ヲ以テ衆人ヲ律スルヿナカレ、人各能アリ不能アリ、

第二章

諸侯惡ニ其害セ己也、而皆去ニ其籍一、

古昔ノ良法美意後世ニ傳ラサルハ、常ニ暴慢ノ二ツニ因ルヿナリ、己ヲ害スルヲ惡ンテ其籍ヲ去ルト云ハ暴ナリ、後世秦ノ李斯書ヲ焚キ儒ヲ坑ニスル、暴ノ甚シキ者ニシテ、其由テ來ル所蓋シ亦一日ニ非ス、孟子以前已ニ籍ヲ去ルヲ見テ知ヘシ、慢ト云者ハ、記錄ニ忘リ修補ニ忘リ、年序ヲ經ルニ隨ヒ、澌滅シテ盡ルヲ言ナリ、玆ニ暴ノ事ヲ擧テ慢ノ事ニ及ハサル者ハ、特ニ其甚シキヲ擧ルナリ、抑國政ノ要ハ祖法ヲ守ルヨリ重キハナシ、祖法ハ皆載セテ籍ニアリ、中庸ニ文武ノ政、布テ方策ニアリト云モ、告子下篇ニ守二宗廟之典籍一ト云モ、皆祖法ノ事ナリ、今ヤ天下明良相遇フノ時、豈遽ニ暴ニシテ籍ヲ去ルニ至ル者アランヤ或云、是亦豈東ナシ、然レヒ慢ニシテ籍ノ自ラ去ルヲ知サル者ニ至テハ、其必無ヲ保シ難シ、宜シク君相ノ責トスヘキハ守籍ニアルナリ、扨周室ノ制、其詳ヲ知リ難シト云ヒ、吾常ニ周制ニ就テ深ク感スル所アリ、其天子公侯伯子男ヲ五等トシ、君卿大夫上士中士下士ヲ六等トス、周制毎事斯ノ如シ、籍田ノ禮葬月ノ數ノ類、惣テ皆然リ、其意蓋シ謂ラク、天子ト云ハ公侯ヨリ一等ヲ尊スルノミ、君ト云ハ卿大夫ヨリ一等ヲ高フスルノミ、故ニ三代ノ時ハ人君敢テ高崇ヲ以テ人ニ矜伐セス、恭謙ニシテ下ヲ待ツ禮アリ、是ヲ以テ國家和睦ナリ、春秋戰國ノ間、人君ノ威德日ニ薄ク、臣下日ニ驕リ、終ニ田氏齊ヲ簒ヒ、韓魏趙晉ヲ奪フ如キニ至リ、其終リ君臣ノ禮全ク廃ス、故ニ秦興テ天子トナリ、君臣ノ大分ヲ定ム、積弊ヲ一時ニ改メ、愉快ヲ目前ニ取ルト云ヒ、是ヨリシテ三代ノ美意絶テ存セス、以テ今ニ至ル、惜ムヘキノ甚シキナリ、本朝ノ如キハ君臣ノ義固ヨリ外國ノ比ニ非スト云ヒ、天子ハ誠ノ雲上人ニテ、人間ノ種ニハアラヌ如ク心得ルハ、古道曾テ然ルニ非ス、王朝ノ衰ヘテヨリ玆ニ至リ、又玆ニ至リテヨリ王朝益々衰フルナリ、此義詳ニ明主ノ前ニ陳スル者アラハ、必ス超然トシテ古道ニ進ム者アラン、然ヒ是亦卒爾ニ說カタシ、卒爾ニ說テ卒爾ニ聞ク時ハ、却テ權奸ノ口實トナシ、亂臣賊子跡ヲ本朝ニ踵クニ至ラン、是誠ニ恐ルヘシ、又案スルニ周制庶人ト云ヒ一家五人ヨリ九人ヲ養フ、是亦厚ト

云ヘシ、是レ支那ノ古ハ地廣ク田多クシテ人民少キ故ニ、能然ルヿヲ得ルト見ヘタリ、本邦ノ今日ヲ以テ例シ難シ、

第三章

友也者、友二其德一也、

此一句是全章ノ骨子ニシテ、遂ニ百乘之家小國之君大國之君ヨリ天子ニ至ル迄、匹夫ヲ友トスルヲ論スルナリ、今ノ王公貴人誰カ此章ヲ讀サラン、而メ其能ク匹夫ヲ友トスル、吾未タ是ヲ聞カス、享保正德ノ際、諸侯駕ヲ枉ケ陋巷ノ賢者ヲ顧ミラレタルヿ、猶或ハコレアルヨシ、今ハ則其風斷々乎トメ地ヲ掃ヘリ、近頃安中侯賢ニメ文学ヲ好ム、曾テ幕府ノ小普請羽倉某ヲ訪ハント欲ス、已ニシテ其事果サスト聞ク、假令其事果スヒ、吾恐クハ晉ノ平公ノ亥唐ニ於ケルニ過サルヘシ、然ラハ則果スト果サ、ルト、素ヨリ大關係ナキノミ、吾亦曾テ竊カニ人ニ聞クヿアリ、一侍御吾　君公ノ爲メニ某侯其儒臣ヲ親愛シ、是ヲ待ツニ礼節ニ拘ラサルヲ以テスルヨシヲ語ル、其意蓋シ　君公ノ溫言和顏ニシテ、臣下ヲ親ムヿ股肱心腹ノ如クシ給フヲ頗フテ云云スルナリ、而シテ　君公乃チ色ヲ正フメ曰ク、彼輩某々二侯ヲ指シ給フ、禮儀ノ何物タルヲ知ラス、侮慢自ラ賢トス、殆ント吾徒ニ非ス、人君ノ臣下ヲ待ツ自ラ礼節アリ、豈狎褻ヲ以テ親愛トセンヤト、是ニ於テ侍御慚服シテ退ソク、吾常ニ謂ラク、人君ノ臣下ヲ待ツヤ、礼節ヲ棄ル固ヨリ非ナリ、然レヒ礼節ニ拘ルモ亦非ナリ、已ニ王公ノ賢ヲ尊フヲ知リ、又貴ヲ貴ヒ賢ヲ尊フ其義一ナルヲ知ラハ、思ヒ半ニ過キン、　君公固ヨリ賢明、又学ヲ好ミ道ヲ信ス、何ソ此章ヲ以テ　君公ノ爲ニ誦セサル、吾已ニ侍御ノ忠思アルヲ感シ、更ニ其聖学ナキヲ惜ム、又吾師平象山常ニ云ク、昔者樂翁公白川侍從松平定信執政タル時ハ、常ニ布衣韋帶ノ士ヲ引見スト聞ク、今天下如何ナル時ソヤ、而シテ執政高シテ驕リ、貴シテ矜リ、敢テ天下ノ賢ニ下ルヿヲセス、天下ノ事知ルヘキノミト、眞ニ知言ナルカナ、余講シテ此章ニ至リ蓋シ三復流涕ス、

第四章

其交也以レ道、其接也以レ禮、斯孔子受レ之矣、

此章交際ヲ論ス、大聖ノ作用ヲ見ルニ足ル、此二句尤モ其肯綮タリ、何等ノ公平弘大ノ言ソヤ、大氐後世賢士隅節ヲ砥勵スル者、權勢ノ人ニ於ケル、敢テ其贈餽ヲ受ケス、其汲引ヲ受ケス、恬然退處シ確然自守シ、敢テ其門ニ至ラス、是ヲ以テ或ハ仕進ノ路ヲ梗塞シ、或ハ意外ノ罪責ヲ受ルヿアリト云ヒ、未タ曾テ權勢ノ汙染スル所トナリテ清潔ノ操ヲ失ハス、百世ノ下ヲメ頑夫モ廉ニ、惰夫モ志ヲ立ルヿアル者アリ、然ヒ大聖ノ作用ニ至テハ決メ然ラス、孔子ノ如キ佛肸公山弗擾ノ召スヲ往ント欲ス、陽貨ノ蒸豚スラ拜受シ玉フ、然レハ權勢ノ人孔子ニ贈餽シ孔子ヲ汲引スル者アリヒ孔子ハ決メ辞セサルヘシ、蓋シ聖人ハ將迎ナク往來ナシ、冲漠無朕、物來テ順應ス、故ニ交ルニ道ヲ以スレハ、其道ヲ悅ンテ是ニ交リ、接スルニ礼ヲ以テスレハ、其礼ヲ悅ンテ是ニ接ス、昨日道礼ナシト云ヒ、今日道礼アレハ其道礼ヲ悅フ、昨日ノ無道無礼ヲ追咎メス、又明日ノ無道無礼ヲ預メ計ラス、其公平弘大如何ソヤ、然ヒ是賢人以下ノ及ヒ易キ所ニ非ス、柳宗元ノ王伾王叔文ニ身ヲ失フ如キ、古今多キヿナレハ、賢人以下ニテハ、此等ノ処尤モ愼ヲ致スヘシ、已ニ其贈餽ヲ受ケ、又其汲引ヲ受クレハ、他日其人傲縱ノ事アリテモ、直論面折スルヿ難ク、或ハ曲從メ早晩トナク其黨類ニ陷ルヿアル者ナリ、是庸俗ノ論ナリ、然ヒ人情相遠カラス、善ク此境域ヲ脫離スル人ハ、正直剛明ノ人ニ非サレハ難トス、反省メ知ルヘシ、